
デュエリスト アシュマ 第十三話 美しき世界

高岡 佳司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デュエリスト アシュマ 第十三話 美しき世界

【Nコード】

N4548K

【作者名】

高岡 佳司

【あらすじ】

オロは混沌としたアヘイビア大陸、オロ・エバス国に帰ってきた。

そして、新たなるマスケド『エルファの騎士団』が……。

一方、イーハンでもクーデターが。

こちらにもマスケド『クロダの六人衆』が暗躍する。

SF剣戟冒険アドベンチャー、新シリーズオロ編三部作の三、

デュエリスト アシュマ『第十三話 美しき世界』ただ今参上！

主な登場人物

アシユマ・アトー

本名をアシユマ・アトー・ショアク・アシユオン・ヒョウエ・シバと言う。

かつてイレギュラーナンバーと呼ばれた人工生命体でもある。無類の武器、『鬼虎』と言う刀を持つ。

アシユマはその鬼虎の生きたインターフェイスとして作られた。

『鬼虎』とは万人殺しの妖刀の異名を持つ無と有を行き来する驚異的な武器だ。

日本刀の形を取っている。

剣の腕は当代随一、体術は達人級。

特に刀を良くこなし、並ぶ者の無いほどの武術の達人。

剣聖と行っても良い。

年の頃は二十四〜五。

これは生年月日があやふやな為である。

謂れの無い事には敢然と立ち向かい、怒ると何でも真つ二つにする怖い男でもあったが

アーチエルにとっては優しい夫である

アーチエル・アトー。

この少女、本名をアーチエル・アトー・ヒョウエ・シバ・ショアク・アシユオンと言った。

元、レキシタニア王国の第一王女。

破壊の権化、バヴェルのまさに鍵であった少女。

今は、愛するアシユマの妻。

と、同時にアシユマが暴走しない為のストッパーでもある。どこまでも真っ直ぐな、豊かで美しい栗色の髪を持ち、長く密度の高いまつ毛と黒目がちの大きな瞳を持ち合わせた美しい眼は遙か彼方を見つめ、潤って張りのある形の良い薄紅色の唇はきゅつと真一文字に引き締められて、人形のように形容されるほどの美形の少女。

凜として、可憐で、儂げで、などとよく形容される。

オルバニアン・マグマイヤー

ノリトレア王家王位継承者第二位であるルーラン・ノリトレアがその正体であり、アルステインの義理の弟に当たる。

王位継承者なのだが、今は王位継承権をかなぐり捨てて、武者修行を兼ねた賞金稼ぎとなっている。

刀と銃両方にいい勘働きを發揮し、また、魔導機兵に乗らせれば右に出るものがないほどの操縦センスを見せる。

好むと好まざるとに関わらず、喜怒哀楽のはっきりした性格である。

アルミナ・ラ・シア

言いたい事ははっきり言う性格。

口の悪いのがタマに傷。

戦利眼なる特殊な能力を持つ大剣使いの少女である。

顔かたちは目鼻立ちがはっきりとしていて、きりつとした美少女である。

眼帯を取って両目が開けば赤い眼と黄金に光る眼が見れるはずである。

リイナとは喧嘩友達でもある。

アルステイン・ノリトレア

ノリトレア王国の国王である。

年の頃は二十七。

頭は切れるが変わり者の王である。

また、国民に善政を敷き人気は高い。

その正体は義賊ダスト・モンキーことヨディ・ヨフルである。

エファール・ノリトレア

ノリトレアの王妃でアルステインの妻である。

アルステインの事をヨディと呼ぶ。

年の頃は二十三。

アシユマを好いていた事もあるが、今は夫の事が好きで好きでたまらない様。

剣の实力は折り紙付き。

最近密かに鞭使いだった事が判明。

實力の程は中々のものらしい。。

玉に瑕なのが、怒りに任せると周りが見渡せなくなると言つ事、酒癖が悪い事。

これさえなければ優しく美しい女性であると言えよう。

アシユオン・ノリトレア

アルステインとエファールの子。

エファールなどは目に入れても痛くないほどの可愛がり様だそう
だ。

キュポア・アップルトン

レキシタニア王国の第二王女。

アーチエルの実妹である。

常にお転婆だが、時に弱い部分も見せる。

物事をずばずば言うが、心根は優しい少女である。

最近はそのいうことは減ったが多少我侷な所もある。

最近見合いをし、シュンマ・イーハニアと将来を誓い合う。

今はシュンマと恋を謳歌している。

シュンマ・イーハニア

イーハン国の皇太子。

イーハン国がクーデターで政権を奪われていた時はハルマ・イコ
ナと名乗っていた。

ちなみにイコナは母方の姓である。

魔法に造詣が深く、剣の腕も達者である。

非常に温厚であり、日向を思わせる微笑が印象的な美青年である。

アルステインの実弟でもある。

キュポアと恋仲であり将来を誓い合った仲でもある。

リイナ・アナン

体に似合わず大振りで鉈の様なククリを使う。

が、今は戦闘の一线からは身を引いている

正体はアシユマと同じイレギュラーナンバーで戦闘のセンスに関してはもしかしてアシユマの次に実力があるかもしれない少女である。

戦闘の一线から身を引いたことが悔やまれる所ではある。

それ以外、はっとする様な美少女である。

この少女、二重人格であり、優しい可憐な少女の時もあれば、寡黙でそのくせ口を開けば口が悪く性悪に見えることもあるが性根はとても優しい。

アルミナとは喧嘩友達でもある。

アールヌー国のレンヌ王子とは中々良い仲であるが、そのことからかわれると泣く。

レンヌ・アデュニ

スラリと背が伸び、褐色の肌と相まってエキゾチックな美少年。

アールヌー国の第二王子であるが実質的な後継者。

これは兄のディーヌ・アデュニ第一王子が王位継承権を放棄したためである。

時に喧嘩もするがリイナとはとても仲の良い恋仲にある。

召喚術を得意としている。

ディーヌ・アデュニ

アールヌー国の第一王子。

王位継承権は自ら放棄。

未来を見通せる特殊な力を持っている。

アルルマ・サンファ

アル・プリズンに投獄されていたテレパシストの少女。
アシュマ達と行動を共にする。

ミカ・タキオ

スコラの優等生。

アシュマと同じイーハンのタマン島出身。

アーチエルとは親友関係にある。

ジークフリート・シュヴァイツァーと、言う将来を誓い合った恋人がいる。

非常に他人想いのところがある。

ジークフリート・シュヴァイツァー

アルミナと同じく身の丈ほどもある大きな剣を遣う。

剣の腕も確かである。

ただ、アルミナ曰くアシュマに輪をかけた寡黙さと無愛想さで周りからは誤解されがちであるが、ミカには優しい彼氏であるらしい。

アン・デボン

元々はアップルトン家のメイドとして働くが、数奇な運命からかアーチエルと共に戦場にも付いて回る不遇な人。

ただし本人はアーチエルのお側にいられるだけで幸せらしい。

アーチェルの姉的存在でもある。
いまは、ガンロクに身も心も捧げている。

アリシアナ・コクレト。

黒龍号のメカニック担当。
程よく鍛えられ、引き締まった肉体を持っている。
鼻筋の通った中々の美人でもある
良くも悪くも軍人気質。

ガンロク

本名は誰にも分からない。

身の丈は二メートルを軽く超えるが意外と起用で剣の腕も中々鋭い。

その腕は実質的な師匠のアシユマも認めるところである。

ビッシュ・ノマン

アシユマの古い友人。

今はノリトレアの練武館の道場主。

腕は立つ。

フィナ・ノマン

ビッシュノマンの妻。

以前は一番弟子だった。

アバヤイ老人

アシユマの道場の師範代。

と、言っても形ばかり。

腕の方は平凡なもの。

しかし人格者でそちらの方で師範代に。

イツテツ。

通称「オヤツサン」

本名は不明だ。

現代の名工とも呼ばれる。

常に実戦的な武器を打ち続ける。

かと思えば、日常的な包丁とかも打っている。

性格は頑固一徹。

何にも妥協を許さない。

アシユマがスコラ移転に伴って、オロ本社から密かにスカウトした。

今では（何故か）王立王宮公園広場の一角に工房を開いている。

ショウマ・イーハニア

イーハンの王。

シュンマの父親。

善王。

カオルコ・イーハニア

イーハンの第一皇女。
シュンマの姉。

ロンギ・ターフリ

ノリトレアの首相。

ダ・アヒ

クーロン共和国政府の外務次官。

オロ・エバス

汎用型電脳装置などの基本OSを作って財を成し、今では、鉄鋼や貴金属、造船や飛行機、果ては魔導機兵の様な兵器なども取り扱っている豪商。

今や世界の五パーセントは彼の財力とまで言われ、世界をその指で動かせるのではないかと噂されるほどの人物。

ナナル・エコリコ

オロの愛人。

オロと七賢人とのパイプ役。
七賢人側の人間。

ヨナルト・リンギ

ノリトレアのクーデターの首魁。
アイル・ノリトレアなる幼女を王位に就け、自身は傀儡を操るものとして君臨。

シュニク・インジャ

イーハンのクーデターの首魁。
マスクド、クロダの六人衆のマスター。
ヨナルト率いるノリトレアと軍事同盟を結ぶ。

ウフエイトウ

白羊鬼なるを持つ剣を持つマスクド。
エルファの騎士団のリーダー。
同じマスクドのウシャトウの兄。

ギバ

金牛鬼なるウォーハンマーを操るマスクド。
力は強い。

エルファの騎士団の一人。

サイファイ

同じマスクド、ワラシーの双子の兄

双児鬼なる二刀を持つ。

エルファの騎士団の一人。

ワラシー

同じマスクド、サイファイは双子の兄。

双児鬼なる二刀を持つ。

エルファの騎士団の一人。

ウデイガア

巨蟹鬼なる戦斧を持つ。

こちらも力自慢。

マスクド。

エルファの騎士団の一人。

シャケルウ

獅子鬼なる大槍を使う。

エルファの騎士団の一人。

マール

処女鬼なるレイピアを使う。

エルファの騎士団の一人。

ナトイゲフル

天秤鬼なる金剛棒を使う。

エルファの騎士団の一人。

ウシャトウ

天蝸鬼なる剣を使ってくる。

エルファの騎士団、リーダーのウフェイトウは実兄。

ナイゲル

人馬鬼なる剣と弓矢を使ってくる。

エルファの騎士団の一人。

レトウ

磨羯鬼なる鎌を使ってくる。

エルファの騎士団の一人。

イラ

宝瓶鬼。スモールソードとスモールシールドを使う。
エルファの騎士団の一人。

ウゴグロフ

双魚鬼なる大剣クレイモアを使ってくる。
これも力自慢。

エルファの騎士団の一人。

シシオウ

天餓鬼と言う二刀の忍者刀（直刀）を操る。
マスクドの、クロダの六人衆の頭目。

エヴユ

地餓鬼と言う鎖鎌を操る。
クロダの六人衆の内の一人。

アジャオ

水餓鬼と言う手槍を操る。
クロダの六人衆の内の一人。

オクナフ

火餓鬼と言う大刀を操る。
クロダの六人衆の内の一人。

キエラ

風餓鬼と言う鞭を操る。
女。

クロダの六人衆の内の一人。

ナイシー

金餓鬼と言う鉤爪を使う。
クロダの六人衆の内の一人。

序節 ノリトレアの庭にて……

王宮の一角、星屑のテラスと呼ばれるところで二人の男女が、歓談をしながら茶会を開いていた。

一人は見目麗しい青年で、もう一人は壮年の女性であった。

「まあ、仕方ないでしょう」

「勝手に決めてしまっても構わない物でしょうか？」

「それこそ仕方ないでしょう。あれだけの事をしてのけて、理事でいられないでしょう」

「そうですね。理事会での結論も一致していますし、あなたが理事長になって頂ければこれ程心強い事はないでしょうから」

二人が話しているのは、スコラの理事長オロ・エバスの事だ。

と、なると、この事を話し合っているのはノリトレアの国王であり、理事長代理のアルステイン・ノリトレア。

そしてもう一人はスコラの校長、ミス・ケリー・サトウ、その人である。

議題はスコラの理事長、オロ・エバスの理事長解任に関して。

原因は先のオロ・エバスによる、様々な事変による物である。

しかし、オロ・エバス国は依然として存在をしていた。

重役達による合議制を取って、アヘイビア大陸に君臨していたのである。

「しかし、オロ理事長……もう理事長ではありませんでしたわね。

オロ氏にも困った物ですわね」

「おや？ 校長にしては御優しい。困った所では無いでしょうに。

かなり今回は困りましたね。バヴェルまで持ち出して。そして最後はドロンぱあ。ホント今は、何処の空でしょうなあ」

「そうですね。ところで、どうでしょう？ 理事長代理。この際

ですからスコラを、ノリトレアに移転すると言うのは。理事会も異論はでないでしょうし」

「その点はもう一度理事会に正式にかけたほうが良いかもしれませんね。今ここで決めてしまうと、どうしても、裏で全てを決めてしまおうと言うような印象を持たれかねない」

「そうですね。そうですね」

ミス・ケリー・サトウはティーカップを口に運びながら言った。

「それにしても、アルステイン様。貴方は本当に立派になられて腰が据わったというか、地に足が付いたというか」

「ははは。お褒めに預かり光栄の至り」

アルステインは少しおどけて言ってみる。

「そうやっておどけるところは変わりませんね」

「校長も相変わらずで」

その時、一人の女性がやって来た。

「あら、校長。いらっしやい」

飾らない言葉で喋り、ミス・ケリー・サトウの来訪を喜ぶ者、アルステインの妻、エファール王妃である。

「これは、王妃。お邪魔をしております」

ミス・ケリー・サトウが応える。

「あら、王妃だなんていいのよ。エファールで。そう、呼んで頂戴な」

「はあ。王妃がそれでよいのなら」

「いいの。そちらの方が。で、話は纏まとまったの？ ヨデイ」

「そうですね。僕がスコラの理事長になりそうです。そしてスコラはノリトレアに移転する事になりそうです」

「まあ！ そうなの？」

「ええ」

「どこに？」

「今の所、この王立王宮公園広場の一角が候補地です。まだ、完璧に決まったわけじゃ、ありませんがね」

「あらまあ。随分と近場になったこと。何で又？」

エファールは軽く驚いてみせる。

「魔導地政学的な物や東洋風水学的に見て良いのだそうですよ」

「何？ フースイって？」

「都市、住居、建物、墓などの位置の吉凶禍福を決定するために用いられてきた、気の流れを、物の位置で制御する思想だそうですよ。クローン由来ですがね」

「ふうん」

「ま、そういうことです」

アルステインが静かに言う。

「それより私もお茶を頂こうかしら」

そう言って、エファールは呼び鈴を鳴らした。

その後、アルステインは理事会の承認を受けて、正式にスコラの理事長になった。

そして、スコラのノリトレアへの移転も正式に決まった。

設計の段取りも決まり、今では、パイルバンカーの音がけたたましく鳴り響く毎日である。

しかし、その間も生徒には休む暇は無い。

生徒達は校舎が出来るまでの間、野外授業と言う事になった。

勿論その中には、ミカ・タキオや、サクラコ・セタ。

エミル・フォルテにリイナ・アナン、キュポア・アップルトン。

そしてアーチエル・アトーの顔があった。

公園の大きな木の木陰が落ちる芝生の上で、移動式の黒板を持ち出して、今は魔法学の授業のようだ。

他には王宮の一部を開放して授業をして生徒を受け入れもした。

講師は何とアシユマ・アトーだ。

「もう、周知の事と思うが、魔力の元は念であり、その念の元は気である。しかし、その気は東洋気学の言う所の臍下丹田せいかたんでんで気を錬ることはあまり知られていない。そこで今日は気を錬る事から始める」

「ええ？ 今更嫌ですわ。そんな泥臭い事」

露骨に嫌がるのは、サクラコだ。

「何にもまして基礎と言うのは大事なことだ。文句言わない。やるぞ」

アシユマ達の授業を遠くで見える眼があった。

アルステインとエファールである。

「あら、懐かしいわね。ついこの間まで、ああやって授業をしたものね」

「おや？ 今から講師として復帰してもいいんですよ？ エファさん」

「それにしても、随分と自主退学する生徒が出たものね？ 予想の外じゃなくって？」

「それは仕方がないですよ。エファさん。元々アヘイビア大陸で設立された施設です。元アヘイビアの生徒が多数いましたから。そうなるのは当然の帰結です」

「そうね。そうよね。折角造った仮設住宅が寂しそうに見えるわね」「そうですね」

今も話題に出た仮設住宅は学生寮で生徒はそこで寝起きをした。

仮設住宅は一棟六人住まいの造りであった。

アヘイビアにスコラがあった頃の学生寮と比べれば雲泥の差だったが、生活には不自由はしなかった。

そして、生徒の自主退学であるが、アヘイビア系の生徒が多かった。

アヘイビアと、今言葉に出たが、今は大陸の名として残るばかりで以前にも語ったが、

国名としては、今はオロ・エバス国として成立をしていた。

重役達による合議制で意思を決定していた。

しかし、以前のようなカリスマは薄れ、今や各地で反乱の芽が息吹きつつあった。

王宮の一角、花咲きのテラスでキュポアとシュンマが語り合っていた。

中々良い雰囲気だ。

この二人は見合いをして、お互いの家公認の恋人同士となり、将来を誓い合う仲となっていた。

椅子に座り、茶を喫している。

「おう、シュンマ。今年は臨海学校とやらはあるのかのう？」

「うん……校舎移転もありますし難しいんじゃないでしょうか？」

「そうか。そうじゃな。わらわもそうではないかと思っておったのじゃ。少しばかり残念じゃのう」

二人が会話している中、新たに二人ばかりやって来て会話に加わる。

レンヌとリイナだ。

「やあ、こちらにいらしたんですか」

レンヌである。

「うむ。こちらで茶をしていた」

キュポアが応える。

「何の話をしていたのだ？」

リイナが訊く。

「うむ。今年の臨海学校の事についてじゃ。わらわはまだ臨海学校なるものに、行った事がないでな。一度は行ってみたいと思っていたのじゃ。ま、来年があるがの」

「でも少し寂しいですね」

シュンマが言う。

「まあ、仕方なかる」

そこへ現れる、とある人。

スコラの教師アシユマ・アトーである。

元来は一介の剣士である。

「気落ちしなくて良いぞ。今年もカレーは行うぞうだ」

「ほ、本当か？」

キュポアが目を輝かして訊く。

「ああ」

アシユマの話によれば、今年もカレー、決闘、ナンパ、キャンプ
ファイヤーは行うと言う。

場所は王立王宮公園広場の一角で行うと言う事のようにだ。

「しかし、その前には怖い期末試験がある？」

「俺はあまり感心せんが、期末試験は無い様だぞ？ 喜べ」

「何か棘のある言い方じゃのう」

「そうか？」

「おお。そうじゃわい」

「あら、アシユマさま。キュポアと何を話してらっしゃるの？」

アーチエルがやって来た。

このアーチエルと言うのは、アシユマの妻で、元レキシタニアの
王女だった。

まだ少女と言っても良い美しい女性である。

このスコラの生徒でもある。

「ああ。カレーの話だ」

「今晚のおかず？ カレーが良いの？ アシユマさま」

「いや、今年は臨海学校自体が無いから、せめてカレーとキャンプ
ファイヤーをするぞうだ」

「あら、そちらの話？」

「ああ」

「期末試験も無いのですよね？ 残念」

「姉様」

「あらキュポア？ 嫌なの？」

「当たり前じゃ」

「楽しいじゃない？ 勉強」

「楽しくないわい」

「じゃあ、何でスコラにいるの？」

「スコラにいるのは楽しい」

「？ 変な子」

「変な子言うなあ！」

「そんな事よりアーチエル。何か用でもあったのか？」

アシユマが途中で口を挟む。

「あつ、そうでした。教えて欲しい所があつて」

「どれ？」

「あ、もう少し落ち着いたところで……」

「そうか」

「じゃあ、キュポア。又後でね」

アーチエルがそう言つて二人は去つた。

「アーチエル、何で場所を変えるんだ？」

「あら、アシユマさま。気の利かない」

「？」

「ま、いいです。アシユマさまは朴念仁なんですから」

「？」

「ま、いいです」

夏は盛りの頃を迎え、ノリトレアにも暑い季節がやって来た。

例年なら臨海学校があるのだが、校舎移転と言つ大事業があるの

で、それは中止。

そして期末試験も中止。

こちらは生徒に拍手喝采を浴びた。

しかし、せめて、カレー、（ナンパ）（決闘）キャンプファイヤ

ーは残し、やろうと言つことになった。

キュポアモリイナも今年は燃えた。
去年、カレーを渡せなかった分、力を込めて作るつもりだった。
何故ならば、カレーの洗礼を受けていないレンヌとシユンマは、
建前上スコラの中では「フリー」と言う事になる。
まさかとは思うが、万が一にも、自分達意外に、「美味しい」を言
われれば、非常にまずい事になるのだ。
だから、力が入ろうと言うモノだ。

そして、イベントの一日目、カレーの飯盒炊爨はんごうすいさんの日がやって来た。

「ここで、理事長からのお言葉を承ります」

校長のミス・ケリー・サトウが言った。

ここでマイクが理事長のアルスティーンの手に渡る。

「えーでは。夏だ!!」

「おおっ!!」

「カレーだっ!!」

「おおっ!!」

「おおっ!!」

「おおっ!!」

盛り上がる男子生徒をよそに、女子学生は何を言うのかと呆れて
いた。

臨海学校ならまだしも、今年は海に行かないのだ。

水着になるわけではないのだ。

おっぱいもくそも、ないのである。

それにも増してこの盛り上がりようは、一体なんなのだろう?

「諸君! あれだけの大量のおっぱいが、たった一人の男に全部搔
つ攫われて良いものだろうか? 否!! 良いはずが無い!! お

っぱいは、皆等しく平等に分け与えられたモノでは無いだろうか？
諸君！！」

「おおおっ！！！」

「そこで諸君！ 私は提案したい！！ 七百ものおっぱいが一人の
独裁者、そう、アシユマ・アトーの手に渡る前に……」

ゴン！

突然アルステイーンの後頭部に衝撃が加わる。

途端にアルステイーンは壇上でぐんにやりして、崩れ落ちる。

「何を以前と同じ展開をしているのよ？ 生徒の皆さんは、こんな
馬鹿の言うこと等忘れて、カレー作りに勤しんでください」

途端に起こるブーイング。

「何？ あんたたち、私とやろうっての！？ 良いわよ！ 誰から
！？ いつでもかかっていらっしやいな！ 相手になってあげるわ
よ！！」

これまた以前と同じ展開だった。

そして、エファールは同じ様な展開で、アルステイーンを引き摺
って行った。

でも、実の所、勝負をかける女子の中には、水着を着て気を引こ
うとしている生徒が、いるにはいた。

皆それぞれに、女子の意地と、情熱を賭けた戦いが始まった。

それは、キュポアやリイナも同じであった。

二人は、各々の想い人の為に、正に命を賭けてカレーを作った。

大げさな話ではない。

公認に近い形の交際を続けている二人であったが、万が一にも他
の女子に、『美味しい』を言われる事も有り得るのだ。

気は抜けない。

二人は別々にカレー作りに没頭した。

今年、アーチエルはアシユマとカップル公認、（と、言うより既

にアシユマの人妻なのだが」と、言う事で、何もしなくて言いのだが、愛する夫の為にカレーを作って、持って行った。

正に、愛情込めて、作ったと言っても良い。

しかし、何故かそのアシユマの前には、カレーを持った女子の列が出来ていた。

何故に？

風聞によると、どうやら妾候補を決める事らしい。

冗談ではない。

アーチエルは早速列に並んだ。

アシユマに『美味しい』とかわせて、そんな妾だなんだのと、言う事を吹き飛ばしてしまおうと考えた。

アシユマはうんざりしていた。

妻がいる身なのに、何故こんな事に付き合わされねばならないのか？

散れ散れ、と、言っても並びなおす。

女の情念と言うのは怖いものだと、改めて思い知らされた。

中にはビキニ姿で、カレーを持ってくる女子もいる。

仕方が無いので、カレーを一口ずつ食し始める。

そこで『イマイチ』と言うのだ。

そうしなければ、女子の情念は断ち切れない。

今年も辛い夏がやって来た。

列を律儀に並び、アーチエルの番が来た。

相変わらずアーチエルの作るカレーは、美味しい。

いや、アーチエルの作る料理は、全て美味しいのだが。

なので、アシユマは安心して、アーチエルの作るカレーを食した。

「どうですか？ アシユマさま。美味しいですか？」

「ああ。美味い」

「アシユマせんせー、今年も美味い出ましたー」

からんからんと、手持ちのベルを鳴らして、鳴子の女子が触れて回る。

「あゝあ」

と、女子共は落胆して散っていく。

矢張り妻への愛は絶対なのだど、思い知らされる。

アシユマはアーチエルの頭をなでてやった。

「嬉しい」

アーチエルはそう言ってアシユマに抱き付く。

「おほん！」

後ろから咳払いが聞こえる。

アシユマとアーチエルが慌てて、離れて後ろを見る。

背後にはミス・ケリー・サトウが居た。

「アシユマ先生。仲の良い夫婦だとは存じますが、時と場所と周りへの影響を考えてください」

アシユマにしてみればまた、校長の小言が始まったと思った。

が、

「これからは、気をつけて下さい」

と、その一言で終わってしまった。

アシユマは多少拍子抜けした。

「アシユマさま」

アーチエルなどは却って不安に駆られたようだ。

「大丈夫。アーチエル。大事無い」

そう言ってアシユマはアーチエルの手を握ってやる。

アーチエルもアシユマの手を握り返す。

そして見詰め合う。

アーチエルは照れて下を向く。

アシユマはそんなアーチエルを、優しい瞳で見つめていた。

リイナのカレーが出来たようだ。
零さないように気をつけながら急いでレンヌの下に持っていく。
既にレンヌの前には長い列が出来ていた。
仕方なくリイナは列の最後尾に着いた。

キュポアは上機嫌で、カレーをシュンマの下へと、持って言った。
案の定長い列が出来ていた。
普通なら、キュポアの場合

「散れ！ 散れ！」

と、蹴散らした物だが、ここは一種特異な世界。
力任せに行く事も出来ない。
仕方なく自分の番が来るのを待った。

リイナの番が来た。

腕によりをかけた自慢のカレーだ。

レンヌの目が優しい。

リイナは、胸の動悸を抑えることが、出来なかった。

レンヌがリイナのカレーを、一口食べる。

「美味しい！ 美味しいよ、リイナ！」

レンヌは本当に美味しそうに、リイナのカレーを食べた。

「レンヌ王子、美味い出ました〜」

からんからんと手持ちのベルが鳴る。

一方キュポアもその順番が来た。

シュンマの、春を思わせるような、微笑がそこにあった。
キュポアもリイナと同じ様に胸の動悸が激しくなった。

「シュ、シュンマ……わ、わらわの作ったカレーじゃ。食したも
「はい」

シュンマは喜んで一口カレーを口に含んだ。
その途端シュンマの顔色が青くなる。

「どうじゃ？ 美味しいである？」

「え、ええ。美味しいですネ……」

シュンマの額から脂汗が流れる。

「シュンマ皇太子、美味い出ました」

鳴子の女子がベルを鳴らす。

シュンマの周りの女子は散って行った。

「どうじゃ？ 美味しいである？」

「え？ ええ」

シュンマの食は中々進まなかった。

「どうしたシュンマ。食が進まんじゃないか？」

「い、いえ。そんな事は無いですよ」

どうも、シュンマの様子がおかしい。

「なんじゃ。どうしたのじゃ？ 不味いのか？ ちよっとスプーン
を貸してみよ」

「い、いやキュポアさん。こ、これは」

と、言ってる側からキュポアは巧みにシュンマのスプーンを奪い、
一口自分の作ったカレーを食してみる。

忽ち自分で顔が青くなる事が分かる。

「か、辛い！！ 苦い！！ 酸っぱい！！ 不味い！！ なんじゃ

これは！！ 濟まぬシュンマ。こんな物を食させて『美味しい』と言
わさせて、わらわは……」

「いえ、良いんですよ。キュポアさん。愛する人の作るものなら美
味しいんです」

「シュンマ……」

キュポアは感動で何も言えなくなってしまった。

その夜、敗残兵と貸した男子は皆で集まり、カレーを作って寂しくそれを食した。

元々、仮設住宅が質素な為、ある種キャンプに来ているものだと勘違いを起こさせた。

次の日は自由行動だ。

と、言っても臨海学校とは違い、することは何も無い。名目上は。

だが、カレーの救済措置として、『決闘』制度と『ナンパ』が残っていた。

当然、シュンマとレンヌに照準が集まる。

「レンヌ・アデュニ王子！ リイナ・アナンさんを賭けて、決闘を申し込む！」

ここで、リイナがその決闘を禁止すれば決闘は行われない。

が、リイナは少し意地悪そうに、レンヌがどうという反応を見せるかが、見てみたくなった。

「この決闘、許します」

リイナがそう言う。

それを受けてレンヌも堂々とした物で

「では、始めましょう」

と、言った。

リイナは、ちよつと拍子抜けした。

レンヌが、ちよつと躊躇して困る所を、見てみたかったのである。

「い、行くぞ！」

決闘の申込者が木刀を構える。

それに対してレンヌは、

「秘めたる聖剣、内より溢れん！」

愛するものを、護る為

両の手、両の目聖剣掴まん！

出でよ聖剣、汝の敵を切り刻まん！

へブンスソード！！」

なんと、へブンスソードを召喚してきた。

「な、何だあれは？」

この生徒はへブンスソードを見たことが無いらしい。

「ち、畜生！ 召喚なんて汚いぞ！」

実際、この決闘にはルールは無い。

自分の得意なもので、相手に挑めばよい。

ただし、相手に怪我をさせたり、死亡させたりしてはいけない。

「お、覚えていろよ！」

申込者は、捨て台詞を残して、去って行った。

「なんだ。つまらん」

そう言ったのは、リイナだ。

「リイナ、相手をからかうなんて良くないよ。今度から止めにしよ
うよ」

「レンヌ。お前の反応が見てみたかった。へブンスソードを出した
時点で、拍子抜けしたかな。まあ、アシュマに言わせると、戦わず
して勝つというのが、兵法の最たるものらしいからな。あれで良か
ったのかも知れんが」

そしてナンパだ。

際どい格好をした生徒がやたら、アシュマの周りをうろついでい
る。

確か、カップルになった者にはナンパの参加資格が、無い筈であ
る。

その禁を破ってまで、アシュマにちょっかいを出すと言うのは、

明らかに、お妾さんを狙つての事であろう。
アシユマに声をかけてもらうのを待っているのである。
勿論アシユマにはその気は無い。
その上、そんな女子に纏わりつかれて、鬱陶しかった。
アシユマは助けを、アーチエルに求めた。
が、アーチエルが居ない。
アーチエルはどうしたのだろうか？

そのアーチエルも男子に囲まれていた。
ナンパである。

明らかに違反行為である。

しかし、人妻でありながら、アーチエルはそれだけの人気を保っていたのである。

しかしこれでは埒が明かないので、ベルもちの女子が周りを囲みアーチエルを守っていた。

そんなわけでアーチエルも、アシユマに助けを求めて彷徨っていた。

そして、二人は邂逅し抱き合う。

それは、周りを白けさせ、生徒は散って行った。

その日は朝から、キャンプファイヤーの準備が進められていた。
夕闇から夜に差し掛かる頃、薪に火が点りキャンプファイヤーが始まった。

アシユマとアーチエルは、それを少し離れた所から見ていた。

「以前はああやって、輪に加わり、火を囲んで踊りを踊っていたの
ね」

「懐かしいのかい？」

「すこし」

「輪に加わりたいかい？」

「すこし……でも、いいの」

「いいのかい？」

「ええ」

キュポアとシユンマ、リイナとレンヌが輪の中に加わっていた。アシュマとアーチェルの二人は幻想的な輪を見つめていた。

第一節 蘇るマスクド

死亡説も流れたオロ・エバスだが、そのオロが行き成り現れた。それも、現在空位のオロ・エバス国の大統領の座に、行き成り復帰した。

それまで空位だった大統領の座に、重役たちは誰も就かなかったのは、ひとえにこの為だったのだ。

その時に驚いたことに、大統領の復帰を喜んだのはイーチャイルド一族だった。

彼らは、あらゆるメディアを使い、オロの生来のカリスマ性も手伝って、国民揃ってオロの復帰を喜んだ。

強力な広告宣伝だ。

強力なプロパガンダだった。

「諸君、私がオロ・エバスだ。人は、私が死んだと言う。逃げたとも言つ者もいる。だが私は帰ってきた！ この国を世界の盟主とする為に！ その為には、如何なる敵対勢力も排除する！ また私はその力も持っている！ 国民よ立つときは今だ！ 国民の一人一人の力を今貸して欲しい！ さすればそれは叶うであろう！」

オロの帰還演説だ。

多くの人がオロの私邸の庭でこの演説を聴いていた。

オロの庭は広い。

一つの市が軽く入るほど広大だ。

その庭に人が集まった。

万単位である。

その観衆がオロの演説に酔い、熱狂し、涙した。感動し心を動かされた。

帰還演説としてはまずまずの物だろう。

その背後には、国家をまたぐ組織力を持った者の臭いがした。そう、それは七賢人と言う名の臭いだった。

そして、彼は帰ってくると共に、ある女性を連れ帰ってきた。
彼女の名はナナル・エコリコと言った。

これまた以前妾てはめを努めたティシユラと比較しても、遜色ない美貌とスタイルの持ち主だった。

「中々よう御座いました」

ナナルが言う。

「うむ。これならば、次のステップに進んでも良からう」

オロがそう言って受ける。

「はい」

「茶番……か……」

アルステインが、オロの演説中継を見ながら、ぼそりと呟いた。

「え？ なに？ ヨデイ？」

側に座っていたエファールが、訊く。

「いえ。何でもありませんよ」

その王宮に一組の男女がやって来た。

その男女が、何やら王宮の入り口で、衛兵と口論をしていた。

「だから、この城の関係者だと、言っているだろう！」

「じゃあ、その証拠を出せ！」

「証拠なんかあるか！ アルステインを出せ！」

「国王を呼び捨てにするとは、胡乱つらんな奴」

「おう、どうした？」

「おお、何か怪しい奴が、国王陛下を呼び捨てにして……」

「呼び捨てだったって兄貴だぜ兄貴！ 良いだろ呼び捨てにしたって！」

胡乱呼ばわりされたその男は叫んだ。

「何を言う！ 国王陛下を呼び捨てにするなど言語道断！」

「アンタが話すと、話しがややこしくなるから……」

胡乱呼ばわりされた男に、付いて来た女が、そう言う。

「何を言うか、お前も十分怪しいぞ。大体人前で眼帯をつけているなんて十分怪しい！」

「なにおう？ 眼帯の、何処がいけないのよ！！こんなに可愛いのに！！ 眼帯取るうか？ 可愛すぎて驚くわよ！？」

「そんな事はどうでも良い！！ 怪しすぎるぞお前ら！！」

「何よ！ こいつムカつく！！」

「お、おい……少しは押さえるよ……」

今度は、胡乱呼ばわりの男が、眼帯女を抑えようとする。

「あんたもあんたよ！ ここまで言われて黙ってるなんて何よ！？」

「別に黙っちゃいないだろう」

「どうした？ どうした？ 揉め事か？」

衛兵がどんどん集まる

「お前から寄るなあ！」

眼帯女が、布に包まれた背の大剣を取り出し、振り回す気配を見せた

「おい、馬鹿！ 止めるこんな所で！」

胡乱呼ばわりされた男が、眼帯女をなだめようとする。

「て、抵抗する気か？ 皆、抑えろ！！」

「ま、まて！ 証拠はないが、見せたい物がある！！」

胡乱呼ばわりされた男が懐に手を伸ばす。

「おい！ 懐から何か取り出す気だぞ！！ この男も取り押さえる

！！」

「何でそうなる！？」

そこに男が通りかかる。

アシユマだ。

「なんだ。オルバニアン。何をやってる？ アルミナも」

「アシユマ殿！ この二人をご存知なのですか？」

衛兵がアシユマに向かって訊く。

「ご存知も何もかたつぽの男は、ルーラン・ノリトレアだぞ？ 今
はオルバニアン・マグマイヤーと名乗っているがな。女の方はアル
ミナ・ラ・シア。身元は俺が保障するぞ？」

「えっ！ こ、これは失礼をば……」

「失礼にも程があるぜ。全く」

オルバニアンが言う。

「ホントよ」

アルミナも続けて言う。

「じゃあ、通つて構わないよな？」

「はい。失礼致しました」

「ま、いいつて事よ」

オルバニアンとアルミナは、衛兵の視線の集まる中、その中央を
掻き分け闊歩して行った。

「じゃあ、オルバニアン。俺は授業があるから」

アシユマはそう言って去って行く。

「おう！ すまんな。サンキュー！」

オロが、又、自邸の庭で、演説を始めようとしていた。
アルステイーンは、又もや、その演説のTV中継を見ようとして
いた。

側にはエファールがいる。

ここはアルステイーンのプライベートルームだ。

アルステイーンが、政務から離れ、最もリラックスできる空間だ。

「困ります……この先は王の自室でして……」

「構わねえだろ！ 義兄弟きょうだいなんだからよ！」

「幾らルーラン様とは言え、困ります。」

「うるへい！」

(うるさいのはお前だよ……)

アルステイーンは心でそう思った。

声の主は、分かつてる。

いつもいつも、暑苦しい奴だ。

その連れの女も、やかましい。

似た者夫婦とは良く言つたものだ。

まだ結婚はしていないが。

「アルステイーン！ 入るぞ！！」

ドアをガチャリと開け、アルステイーンが暑苦しいと形容した人間が、入ってきた。

オルバニアンである。

「なによ？ けたたましいわねえ」

エフアールが言う。

「そんな、エフアール姉さん」

アルミナが猫なで声で言う。

「別にアタシヤ、アンタの姉じゃないわよ」

「私がオルバニアンと結婚すれば、そうなるわ」

「どちらにしても、けたたましいわねえ。少し静かにしてよ。テレビ大事などころなんだから」

「そうそう！ それだよ！ それぞれ。その為に帰ってきたんだよ！！」

その為にとはどういうことか？

何故帰ってきたのか？

アルステイーンは溜息と共に訊く。

「オルバニアン。君は何で帰ってきたのかね？」

「おうよ！ それぞれ。オロがあんな演説をしたろう？ 次にやるのは世界征服に決まっていらいらあな！ その為にノリトレアに帰ってきたのよ！！」

アルステイーンは、中々鋭い、目の付け所が良いと思った。

あながち、外れてはいないとも、思った。

「中々良い所に目を付けましたね？ オルバニアン」
「だろ？」

オルバニアンは、鼻高々だ。

「しかし、世界征服とは、大風呂敷を広げましたね？」

「そうよ。世界征服なんて、するわけ無いじゃない？」

いや、オロならやりかねない。

アルステイーンは、大真面目にそう思った。

それをオルバニアンは、

「オロなら、やりかねえぜ！」

得意顔で、そう言ったものだった。

「おっと、始まるみたいですよ？」

アルステイーンが、テレビモニタを見つめながら言う。

「おお！ そうか」

オルバニアンが黙って、テレビモニタを見つめる。

素直に静かにテレビを見る。

単純な奴。

アルステイーンはそう思う。

が、そう言う所は、好ましいと思っていた。

いよいよ、オロの演説が始まるようだ。

『諸君！ 今、世界は脅威にさらされている！ 自らは、技術立国と名乗っているようだが、裏を返せば、その技術力で、世界に脅威を与えると言う事だ。その国とは、ノリトレアである！ ノリトレアが世界を脅かしている！ 現にノリトレアは、未だ王権国家で絶対王政を布いている！ 民主国家ではないのだ！』

「あいたたた」

アルステイーンは、痛いところを突かれたらしい。

「オロんとこの国も、似たようなもんじゃねーか」

オルバニアンが茶々を入れる。

「こら、いいところなんだから！」

アルミナがオルバニアンを、注意する。

『この独裁国家がある限り、世界に安寧の時は無い！ 今こそ我々オロ・エバス国が立ち上がる 때가来たのだ！ 立てよ国民！ 平和の為に！』

「げ！ 奴ら、狙いをこの国に定めてきやがったぜ！！ はあゝ。早目にこの国に帰ってきてきて良かったぜ」

「これから戦争でも起こりうる状況なのに、帰って来て良かったとは、相変わらず変わってますね。オルバニアン」

「変わりモンなら、あんたにや、敵わねえよ。アルステイン」

「お？ 言いましたね？ 牛丼にヨーグルトを掛けて食べるような人には、言われたくありませんね」

「なにおう？ あれはヨーグルトの酸味が牛丼にマッチして、美味いんだよ！」

「いや、あれは、アタシでもちよつと引く」

アルミナが間髪いれずに言う

「お前までそんな……」

『……で、我々は首都をフェイ・アメールに遷都する事にした。国民よ。分かって欲しい！ 我が国を守る為の措置なのだ。こうしなければ国は守れんのだ！』

オロは感情論に訴えて出る。

「今度はお涙頂戴かよ。オロも中々役者だぜ。どうするよ？ アルステイン。向こうさんはやる気だぜ？」

それは誰が見てもそうだった。

オロ・エバスが、ノリトレアを強く敵視していることは、確実だった。

いつ、宣戦布告しても、可笑しく無い程だった。

何故そこまで、ノリトレアを敵視するのか。

その本音は、オロの演説の中に、見え隠れする。

『技術立国のノリトレアの脅威』。

これが本音だろう。

オロ・エバス国の兵器開発力に対抗できる、唯一の国家。

それがノリトレアなのである。

だから、これほどまでにプロパガンダ政策を以ってして、国民感情を一つにまとめ、ノリトレアを倒そうとするのである。

「対策を少し、考えなければなりませんねえ」

アルステインが言う。

「少しかよ！」

オルバニアンが憤る。

それはそうである。彼にしてみれば、故郷が戦場になるかどうかの瀬戸際なのである。

「まあ、相手の出方も、見なければなりませんからねえ」

「そんなんで良いのかよ!？」

「専守防衛の国ですから」

アルステインは軽くそういった。

が、事態は重く見ていた。

夕方、アシユマが、王宮を訪ねる。

用があるのは、アルステインにだ。

用の内容と言うのは勿論、昼間のオロの演説だ。

アルステインは、公務繁多と言うことで少し待たされた。アシユマが呼ばれた。

「アシユマ君。お待たせ。で、用事はオロかい？」

「ああ。どうするつもりだ？」

「どうするもこうするも、様子見ですよ」

「時間がたてば不利になるぞ？」

「かといって、動けばオロの思う壺です」

「上手く封じ込められたわけか」

「そうですね」

「何か手はあるのか？」

「そうですね。一刻も早く民主共和制に移行する事ですね」

「一応、今も、元老院による共和制じゃないか？ 独裁政治とは違うんじゃないか」

「共和制とはいえ、束ねているのはこの僕なんですよ。それに貴族は選挙で選ばれていませんしね。だからそこを突かれたんですね。油断でした」

アルステインはそう言って、少し困った顔をした。

その頃、オロ・エバス国は、何をしていたか？

大急ぎで軍備増強をしていた。

仮想敵国は勿論ノリトレアだ。

巨大な艦艇が次々と建造されていく。

次々と最新鋭の魔導機兵が造られて行く。

殻兵器も開発されていた。

そして、マスケットまでもが発掘されようとしていた。

使える物は使う。

実利主義のなせる業である。

バヴェルは？

それが、最も気になるところであった。

今回はオロの背後に、七賢人の影が見え隠れする。

その情報はおそらく、オロの元にもたらされるであろう。

それにしても七賢人である。

彼らは、潰されても潰されても、後から後から、湧いて出てくる。

まるで押し出される飴のようだった。

現在の七賢人は、欠員が出ずに七人揃っていた。

七賢人は、今は、オロの邸宅にいた。

そのことから、行方不明の間に洗脳されたのかもしれない。

いや、むしろ七賢人と共闘という関係を、築いているのかも知れなかった。

その七賢人だが、個室を与えられ、そこに閉じこもった

食事は三食とも、贅を極めた物だったが、そこからは出ようとはしなかった。

また、皆頭からすっぽりとフードを被り、顔の様子を、窺い知る事は出来なかった。

その七賢人とオロとは定期的に話し合いが持たれた。

その時に、オロはマスクドなり、バヴェルなりの、眠っている位置を教えてもらっていた。

オロは、自分の執務室にいた。

オロは今、一人で考えていた。

ノリトレアの事だ。

ノリトレアがどうしても邪魔だった。

脅威だった。

滅ぼしたいとも思った。

それ程邪魔だったのだ。

ノリトレアが。

ノリトレアの技術力が。

地球上で唯一つ、オロ・エバスの技術力に敵うのは、ノリトレアだからだ。

だから、だ。

ノリトレアが邪魔なのは。

次に邪魔なのは、クーロン。

そしてノーツ連邦。

どちらも、強力な国力があるくせにオロ・エバスの……ひいては七賢人の意に沿わない。

でも、いずれは両国とも肅清するリストに入っている。

困った事にノリトレアとクーロンは友好的関係を築いている。

この二国が更に近付けば、オロにとって厄介な存在となるだろう。何と言っても、ノリトレアの技術と頭脳、そして億を超えるクー

ロンの人材が手を組む事を想像すると、それだけで頭を悩まし、痛くなる程だった。

それだけは、避けねばならなかった。

今の所、有り得ない事だが、ノリトレアとノーツ連邦が組むことも無いとは限らない。

どちらにしても、警戒しなければならない。

キーはノリトレアだ。ノリトレアさえ何とかすれば、事態は変わるだろう。

オロはそう思っていた。

オロ・エバスはオロ・エバス社のノリトレア支社、クーロン支社、ノーツ支社、それぞれの支社から社員を引き上げた。

これにはクーロン、ノーツの両政府は頭を捻ったが、ノリトレアの頭脳・アルステインは、なにやらきな臭い物を感じ取っていた。何かの前触れであることを察知したのである。

オロはノリトレアを一気に攻めると思いきや、次にとつた行動は……。

西方州連合、つまり、大きな所ではノルブル王国、ドラステイス共和国、レボトミノ連邦共和国、パクスワイ共和国各国に強く同盟関係を締結する為、各国遊説に出た。

先ず、この行動に賛辞を送ったのがレジルデ市国の法皇ネクロマンシア三世だった。

タイン教を守る正義の同盟を築く良き事だと。

ネクロマンシア三世はこれを

「正義と力の象徴。正しき力の同盟だ」

と、各地で公演した。
勿論これには七賢人の思惑が絡んでいた事に、疑う余地は無かつた。

しかし、各国の国民が以前オロが、バヴェルを使って自国を蹂躪した仕打ちを忘れてはいなかった。

遊説に来たオロには、その国民の冷ややかな視線が突き刺さった。先ず訪れたのが、ノルブル王国だ。

この国は王制を取っているものの、民主共和制を取っており、現在の元首はエガツサ二世、現在の首相はヴァネル・ホツサ。

議院内閣制である。

オロは首相官邸に招かれた。

そう、幾らその国民に憎まれようと、オロの存在を無下には出来なかつたのである。

それは、世界一の軍事大国となった、オロ・エバス国の元首であるオロを、無視出来なかつたのである。

ばかりか、その国民に植え付けられた恐怖は、忘れられてなかつたのである。

バヴェルの恐怖を。

ノルブルの国民は表面は笑ってオロを出迎えた。

心の内では彼を憎んで。

オロも、バヴェルもなしに、全世界を行き成り敵に回して勝てる程、自信家ではなかつた。

ただ、味方……戦力が欲しかったのである。
表面上でも。

どうせ、後で、この国も国民も、肅清するのである。

結局、首脳会談の後、オロ・エバス国とノルブル王国とは、軍事同盟を結んだ。

影には、七賢人の影が、チラホラと見え隠れしていた。

つまり、七賢人の方面からも、圧力がかったわけだ。

次にオロはドラスティス王国に訪問した。

矢張りこの国も怒りと憎しみを胸に秘め、そして表面上では笑ってオロを出迎えた。

この国もオロ・エバス国と同盟を結ばざるを得なかった。

そうしなければ、以前の二の舞の恐怖が頭をもたげたからである。

そしてレボトミノ連邦共和国である。

この国は、堂々とオロ・エバス国を非難した。

それは、オロ・エバス国がまだアヘイビアと名乗っていた頃、大統領政府にアヘイビアの特殊部隊を送り込まれた経緯を持つ。

その為か、半ば受け継がれ、アヘイビア（オロ・エバス）には反感を持っていた。

また、バヴェルに蹂躪された経験が無い。

その為、オロに対しては堂々としていた。

だが、ここに来るまでには、事務次官級の話し合いが行われている筈で、ここに来てごたごたするはずが無かった。

だが、レボトミノのテオドル・ブルックドルフ大統領は、徹底抗戦も辞さず、オロの提案を突っぱねた。

七賢人の根回しもあつた筈である。

その上で、この話を蹴った。

国民はテオドル大統領に拍手喝采を送った。

オロは気分を害し、不機嫌な中、レボトミノ連邦共和国を後にした。

パクスワイ共和国に赴いた。

この国は、先の都市国家レジルデ市国を内包している。

それが幸いしてか、若しくは七賢人が裏を引くプロパガンダが利いているのか、オロはこの国では割と歓迎された。

友好ムードの漂う中、軍事同盟はスムーズに調印され、そしてオロはこの国を離れた。

その後、ティバゴグ王国、アラウンド共和国と訪れ、それぞれ軍事同盟を結び、西方州連合を後にした。

しかしそれにしても、オロは今回の遊説で思い知らされたのは七賢人の底力だ。

各国で軍事同盟を結べたのも、七賢人のおかげだと言っても良い。オロは改めて、その力に寒気を覚えた。

よくも今まで、敵対行動を取られなかったモノだとも思った。

具体的にはイーチャイルドだ。

西方州連合国家群は、主に主戦力にしる後方支援にしる、何らかの形でイーチャイルドの軍事部門が関わっていた。

圧力を掛けられると否やは言えなかった。

オロ・エバス社も歩調を合わせるように圧力を掛けた。

オロは一旦自国、オロ・エバス国に帰国した。

オロは自分では気が付かなかったがかなり疲労していた。自室に戻ると直ぐに眠りに入った。

そのまま一日中眠り続けた。

起きると側にナナルがいた。

「ずっと側にいたのか？」

オロが口を開く。

「はい」

「何をしていた？」

「オロ様が起きるのを待っていました」

「……欲しいのか？」

「それもありませんが、先ずはお食事をと……」

「……食事は要らん。先ずはお前だな。ナナル」

二人は抱き合いそのままベッドに倒れこんだ。

オロはそのまま軽い政務をこなしながら、十日程休んだ。

ナナルを愛しながら。

西方州連合国家群から戻ってきたオロは、支持率が上がっていた。これも西方州連合国家群で、友好的（半ば強制的で威圧的）な関係を築けた事による評価だった。

「オロ様？ 次はどうなさるのですか？」

「うむ。南アヘイビア大陸諸国を遊説しようかと思っている」

「南アヘイビア大陸諸国を？」

「うむ。無傷で手に入れられる所は、手に入れておきたい。割と友好的な南アヘイビア大陸の国ならば、そう苦勞もせんだろう」

そして、オロは時を空ける事無く、南アヘイビア大陸へ旅立つて行った。

「拙いなこれは」

アルステイーンは、自分の政務室で呟いた。

「何がマズイんだよ？ アルステイーン」

この言葉は、オルバニアンだ。

帰国以来、ずっと、アルステイーンの側に居て入り浸っている。

「何でここに入り浸っているんですか？ 気になって仕事が出来ませんよ！」

「い〜じゃね〜かよ！ 暇なんだからよ！」

「暇なら、スコラに戻ったら、言いじゃないですか」

「勉強は嫌いなんだよ！ で、何がマズイんだよ？」

「オロです」

「オロがどうしたって？」

「外堀から埋められています」

「は？」

「西方州連合が、ほぼオロに籠絡されました。南アヘイビア大陸の国家群も、オロに恭順の意を示しました。これらが結集すると、かなりの大群になります。それらの矛先がノリトレアに向けられれば……」

「只じゃすまねえって事か……。おい、アルステイン。そうなる前にオロン所を攻めた方が良いんじゃないのか？」

「それが出来れば、苦労はしません」

「何で出来ねえんだよ？」

「国際世論と言っ言葉を知っていますか？」

「知ってるよ！」

オロは、次に東南海洋連合国家を訪問する。

諸島、半島群から成る国家だ。

クーロン共和国の南から、南東に伸びて位置する。

ちなみにクーロンはその国名を、その政変の後クーロン共和国と変えた。

オロは、東南海洋連合国家には軍事同盟を結ぶには至らなかった。それはオロにとって厄介な事だった。

幾らオロと七賢人といえども、クーロンを自由にする事は出来ない。

何時かは雌雄を決して、戦わねばならない強国なのだ。

しかし、経済的な提携を結ぶ事には成功した。

これは、裏を返せば、クーロンを経済的に封じ込める事が出来ることを意味する。

引いては、ノリトレアを経済的に封じ込める事を意味する。

事実、東南海洋連合国家は、クーロンをブロックし経済的に追い詰める政策を採った。

クーロンは経済的に追い詰められ始めた。

そしてオロはいよいよ本丸ノリトレアのあらゆる関係、即ち政治的、経済的、軍事的、文化交流、そしてにネットワークを封じ込める手立てに出る。

先ずは、オロが東南海洋連合国家に圧力を掛けて、ノリトレアとの関係を全て断ち切ってブロックした。

次にレボトミノ連邦共和国を除く西方州連合国家群が、政治的・経済的ブロックを掛けてきた。

勿論ノリトレアも黙ってはいず、経済ブロックを掛けて来た国に対し、特にオロ・エバス国に対し、大変に遺憾の意を表した。

レボトミノ連邦共和国や、クーロン共和国もそれに倣った。

だがそこまでだった。

「アルステイン！ 『遺憾の意』 たあ、どういうこった！？ そんな生つちよろい事で良いのか！？」

「オルバニアン。この間も言いましたよね？ さて、僕は何と言ったでしょう？」

「『こ、国際世論』？」

「」名答」

「こ、国際世論だったって、今だったら、アールヌー国だって、レボトミノだって、クーロンだって、そしてレキシタニアだって味方してくれるぜ?」

「それでも過激な行動は取れませんね」

「じゃあ、クーロンと軍事同盟を結ぶってのはどうよ?」

「良いかもしれませんが」

「なんだよ? 『しれませんが』 ってのはよあ?」

「畏の可能性がありません」

「『畏あ』? どんな畏があるって言うんだよ?」

オルバニアンは興奮して言った。

「まあまあ。興奮しないで」

アルステイーンは興奮するオルバニアンをなだめた。

「まあまああつて……で、畏って何だよあ?」

アルステイーンは一拍置いた後、溜息を吐き、こつ喋り始めた。

「もし、同盟が成立すれば、軍事的にオ口に対抗するぞ、と、言う口実を与えてしまいます。今、彼は、恐らく、このノリトレアを焦土にしたくて、ウズウズしているんじゃないかと僕は想像しています。それは、絶対避けねばなりません。だから下手に動けないのです」

「しかし、剣術だって睨^{にら}み合いは相当きついんだ。いつか隙を出してしまう。そこを突かれたら、一巻の終わりだぜ」

「大分政治に明るくなってきましたね。これで私はいつ引退しても言いぐらいですよ」

「俺は嫌だぜ。そんなの。……だけだよ、死中に活有りって言うぜ。アシユマなんかが」

「そうですねえ。そういう考え方もありますか」

アルステイーンは、飲み物を口を含みながら言った。

「こんな事で良いのかよ? 経済封鎖をされて、金も食いモンも閉ざされて、一番困るのはアルステイーンの言う、民なんじゃないの

か？ クーロンと手を結ぼうぜ。あそこなら食いモンもあるし、市場だって潤沢だ」

「貴方は本当に成長しましたね。オルバニアン」

「んなこたあ、どうでもいいんだよ」

その頃、オロはどうしていたか。

イーサ教国圏の歴々と、会っていた。

オロ・エバス国との協力関係を、築くためである。

イーサ教国圏の国々とは、どういう国の集まりか。

それは国教をイーサ教に定める国々で、大きい所では、ズーヌキ共和国、ツハーイ共和国、ハライン王国、エハボイ共和国等となっている。

これにアールヌー教を奉じるアールヌー国を合わせればこの地域の国々はだまかに抑えたことになる。

そのオロは今、ズーヌキ共和国にいた。

オロはなるべくなら、この地域とは戦火を交えたくは無かった。

だから、なるべくなら、穏便に事を運びたかった。

だが、この周辺の国々は強情だった。

元々、魔導石が潤沢に産出する上、その他の資源も産出する。

資金的には、オロになど頼らなくても、大丈夫だった。

逆に、

「今度来たら、そのそつ首刎ねるぞ！」

と、下手な三文芝居でも見ているかのような脅し文句で、オロを脅してきた。

これに、オロは嘆息した。

「これだから、無知な者と言うものは……」

オロはナナルに、零していた。

「では、攻めますか？」

「無駄だとは思いが、一応ここいら周辺の国々を見ておきたい」

と、オロはナナルに、返答していた。

だが、どの国も返答はほぼ同じで、最後には逆にオロを脅しつけてきた。

オロは最後にアールヌー国に訪問した。

この王子は、未来を見通せる力があるという。

嘘か真かは知らないが。

そして、二人は会談をもつ。

歴史的な一幕と言っても良い。

実はこのアールヌー国、世にその手の天才を数多く輩出し、又、七賢人の信者が非常に多いことで有名でもある。

ちなみに、この七賢人、表向きは宗教法人である。

が、何の神を奉じているかは、表向き分らない。

が、それはともかく、アデュニ王子の祖父王が、当時のアヘイビアから多額の資金と数多い武器を供与され、このイーサ教国圏の中で、唯一アールヌー教を奉じるアールヌー国を生き残らせ、尚且つ圧倒する力を手に入れた。

それは、今まで放浪の民と呼ばれたアールヌーの民を導き、数十年前のイーサ教国圏とアールヌーの戦争で次々と戦勝し、今の地位と土地を手に入れた。

これで、今のこの国が形作られた。

それには、当時のアヘイビアの後ろ盾、ひいては七賢人の後押しがあつて出来た事だった。

話を元に戻そう。

今の政権、つまり、ディーヌ・アデュニ王子はその手の者を追放した。

徹底的に。

国民は、一時的には、大いに憤慨した。

が、それも一時的なものだった。

それに、世間からは悟られないように、追放された者はその大部分が七賢人に入信した。

現政権のデュー・アデュニ王子は、七賢人とは一線を画した。それは、今までのツケと相まって、厳しい国家運営となったが、その予知能力を最大限に使役する事によって、何とか国家の呈を成していた。

そして今回のオロ・エバスとの対談である。

何か因縁めいたものを、感じずにはいられなかった。

「私に来る事に、あまり驚きは無いようですね。デュー・王子。矢張り予知ですか？」

「今回は予知と言うより、予測と言ったほうが良いですかね？」

「成るほど。大した卓越眼ですね。噂どおりだ」

「そのような事を話に来たわけではないでしょう？」

デュー・王子は柔らかく言ったが、事を急いでいるように見えた。

「ほう、焦ってらっしゃる」

「ふむ。焦っているのかな？ 僕は。まあ、いい。あまりこの国をほじくり回さないでくれよ？ オロ殿」

「ほう、そこまで分かるとは。と、言う事は例の『モノ』はここにあるのですかな？」

「さあ？ どうでしょうかね。ただし他国ではあまりほじくらない方が良いでしょう。その国にとっても、私の国にとっても、貴方の国にとっても、何の利益をもたらさないでしょう」

「私の前でよく言う」

「しかし、事実だ」

「それも予知ですかね？」

「これは真理です」

「ふん。馬鹿馬鹿しい。私は帰る」

「送っていきませんかよ？」

「構わん！」

「あまりこの辺りを蹂躪しないように。いずれ貴方は困った事になる」

「真理かい？」
「予知さ」

「一々癪かんに障る青年だ！」

オロは帰りのリムジンでそう喚く。

「あら？ それは貴方の代名詞ではないかしら？」

ナナルがそう言う。

「その口を塞いでやるう」

「あら、楽しみにしていいのかしら」

「お前も結構減らず口だ」

オロはそのままリムジンの中で、ナナルをゆっくりと押し倒した。

それは行き成りのことだった。

オロは、アールヌー国や周辺諸国をまず攻めた。

当初、一番初めに狙われると目されていたノリトレアではなく、

それはイーサ教国圏の制覇だった。

世界は驚いた。何故なら、オロは、まずノリトレアから攻めると思っていたからだ。

雲霞うんかの如く湧き起こるオロ・エバス、西方州連合国会合同軍（オロ連合軍）は怒濤の如く、イーサ教国圏になだれ込んだ。

ズーヌキ共和国、ツハーイ共和国、ハライン王国、エ八ボイ共和国のイーサ教国圏連合軍。

大小のイーサ教国圏は連合を組んで魔導機兵軍団を形作る。

オロも部隊を展開させる。

大部隊だ。

次々部隊を落とされていく各国。

次々占領されていく国々。

宗教対立と民族対立の垣根を越えてアールヌー国軍が参戦。

しかし結局は数には勝てず、全滅となる。

オロは地域を支配するにあたり、大義名分を「平和的平定」と、呼んだ。

今まで、アールヌー国や、イーサ教国圏は世界の火薬庫とまで言われ、誰もが敏感に反応し、腫れ物に触るように扱ってきたのだが、この男は違った。

宗教対立も民族紛争も皆平らげて平定してしまったのである。

世界中が、驚かないわけが無い。

世界中は、改めてこの男に、恐怖を感じざるを得なかった。

オロは『元』アールヌー国に代官を置いて、オロ・エバス国の属国とした。

ノリトレアではこの暴挙に驚いた。

先ず、混乱に陥ったのが国民だった。

それほどの恐怖を、オロはこの国に与えたのだ。

次は自分達だと。

アルステイーンは事態を收拾するのにてんやわんやだった。

そんな時、一人の男がアシュマを訪ねる。

アシュマの古い友人、ビツシュ・ノマンがやって来た。

「アシュマはいるかあ？」

ビツシュ・ノマンは、この国の武芸師範で知らぬ者はいなかった。門前は形式的なボディチェックを行い、宮殿の中へ入って行った。先ず、訪れたのが、アルステイーンの政務室の控え室だった。

ビツシュは直ぐに通され、アルステイーンに謁見した。

「アルステイーン陛下にはご機嫌麗しく……」

「まあまあ、そんなかたつ苦しいのは、無しにしましょう。毎日の様に会っているわけですし」

「まあ、陛下ならそう言うと思いました」

「計算されてましたか」

「そこまでは。しかしこの先は計算がつきませぬ」

「そこまで、変人かね？ 僕は」

「変人で御座りまする」

「そうですか。で、アシユマ君ですか？ 用があるのは？」

「失礼ですが、陛下でも構いません」

「ふむ。助勢の話ですか？」

「おや！ 何故それを」

「今の国際情勢ですからね。あなたやアシユマ君が、僕に助勢をする事は、貴方の性格を鑑みるにあたり、火を見るより明らかでしたからね」

「計算されてましたか」

「まあ。いつ来るかと思っていましたよ」

その時、部屋にノックの音が響いた。

「お？ お茶が来たようですね？」

アルステインが言う。

「アシユマ君には、僕の方から話を通しておきます」

「宜しくお願い申す」

ビツシュが頭を下げる。

「分かりました。でも良いのですか？」

「何がでしょうか？」

「いえ。良いです。それにしても心強さ百倍です。貴方が来てくれて」

「王にそのような言葉を頂き、光栄の至り」

「だから、硬いですつてば」

アルステインは茶をすすりながら、そう言った。

「がははは。失礼。今、アシユマは何処に」

ビツシュは、アルステインに豪快に笑いながら、訊いた。

「いま、アシユマ君は、レキシタニアに行っています」

「レキシタニアに？」

「ええ。もう一人の頼りになる仲間を、迎えに行っています」

「仲間？」
「ええ」

アシユマは道場に顔を出した。

「おお。師範。お戻りになられましたか。たしか、戻られるのはもう少し先かと」

そう言ったのは、師範代を勤める老人、アバヤイ老人である。

「帰って早々なんだが、ガンロクは居るか？」

「今は山に入っているでしょう」

「そうか。猪追いか」

「待ちますか？」

「ああ」

「久々に稽古をつけてくれませぬか？」

「うむ。日も高いしな。良かろう」

道場にいた皆は久々の稽古と聴いて喜んだ。

今日は特別に順番を切つて、師範であるアシユマと立会い稽古をした。

一通り稽古が終わった後、夕刻も近くなり稽古も終わり、皆が一息ついた頃、アシユマが口を開いた。

「皆も知つての通り、いま世界は混迷の呈を表している。俺は、微力ではあるが、アルスティーンに助勢をしようと思う。分かつて欲しい」

「師範なら、そういうと思つておりました。存分にお働きになつて下さい」

「おお！」

と、皆も賛意の声をあげた。

「ここへの帰参が遅れる事になるぞ？」

「構いませぬ！」

「存分にお働きを！」

「師範にしか出来ない事で御座りまする！」

「すまぬ。皆。この通りだ」

アシユマは謝意に頭を垂れた。

「面を上げてくだされ、師範。我等の意見は一緒に御座りまする」

「すまぬ」

アシユマはそのまま頭を垂れ続けた。

「師範……」

その時ガンロクが顔を見せた。

「お師匠……頭を下げて何をしてるだ？」

「おお、ガンロク。待っていた」

「待っていたって……なんだべ？」

ガンロクは奇妙な顔をして、頭を捻った。

「師匠と一緒にノリトレアに？」

「うむ。駄目か？」

「駄目に御座りまする」

即答したのは、アンである。

今では、結婚こそしていないが、ガンロクの妻の風格を見せていた。

そのアンが言うのである。

言葉は重みを持った。

「駄目か」

「はい」

「世界はこれから、混迷を極める事になるう。その時、ガンロクの方があれば、どれだけ多くの人が助かるだろう」

「それでもガンロクさんが死んでは、何にもなりません。それともアシユマさまは、ガンロクさんに死んで来いと仰るのです？」

アンはびしゃりと言いつつ放った。

（参ったぞ。これはアーチエル並みの頑固さだ）

アシユマは人知れず呟いた。

……筈だったが、アンには聞こえていたらしく、

「アシユマさま！」

こう切り替えされた。

「アンさん。ワシ、お師匠について行こうかと思っているだ」

「ななな、なんですって!？」

アンは目玉が出るほど驚いた。

「きつと強敵が待っている。そんな奴らと戦いてえだ！」

「ガ、ガンロクさん!! 何を言いだすの? やめて。そんな事を

言うのは。わたくし、貴方に死んでほしくない!!」

「いんや、死なねえ。それだけは信じてくんろ」

「何処をどう信じると言うの!？」

「頼む! 行かしてくんろ！」

「ガンロクさんの馬鹿!!」

アンは一人、走り去ってしまった。

「良いのか? ガンロク」

「お師匠らしくないべ。決めたことだべ」

「尤もだ」

その夜、ガンロクの寢所に、アンが密かに訪れた。

母屋の離れ、アンの部屋の隣にガンロクは住むようになっていた。

「ガンロクさん……」

「……起きているだ」

「昼間は我がまま申して済みませんでした」

「いんや、我がままではねえと思う」

「ガンロクさん。わたくし、決めました。貴方様についてゆきます」

「ななな、なんだって!!」

「わたくし、ガンロクさんのいない世界なんて考えられません」

「駄目だ! なんねえ!!」

「いえ。もう決めました。アンの我がままを許してください」

「駄目だ。その我がままだけは許せねえ」

「なら、ガンロクさんに取り付いて、ガンロクさんを行かせません」
「う……」

アンはガンロクに抱きついた。

振りほどこうかと思えば振りほどけるのだが、ガンロクにはアンに対してそこまでの乱暴を働く気にはなれなかった。

「負けたべ。一緒においで」

「あ、有難う御座います。ガンロクさん！」

「い、一緒に、ね、寝るだけか？」

「……はい」

アシユマは矢張り母屋に寝ていて、

(やれやれ。丸聞こえだな)

そう思った。

アシユマ達一行はその日の朝、ノリトレアに向かって飛び立った。

話しは少し遡る。

何故、オロは代官をアールヌー国に置いたのか？

イーサ教国圏を睨むのならもつと中央にあるツハーイ共和国やズーヌキ共和国のほうが睨みが利くはずである。

現に、オロはここに代官を置いた後も、暫くこの地に止まった。

何を待っているのか？

答えは七賢人からもたらされた。

この地に、マスクドが眠っていると言っているのである。

オロはこの地に、マスクドが眠っていると言つから、先ず手始めにこの地を押さえたのである。

アールヌー国のとある地点、地下数百メートルの地点で何かを発

見した。

マスクドの眠るカプセルのようだ。
全部で十三個あった。

以前発掘したマスクドは全部で七体。
単純に考えれば、ほぼ倍の数である。
地上に持つてきて並べる。

オロは正に小躍りして喜んだ。

「いつ開く？」

オロが訊く。

「さあ、そこまでは……」

ナナルが苦笑いをして

「さあ、そこまでは……」

と、答えた。

「それでは困る！」

オロが怒る。

「そう、怒らずに。そのうちに開きます。そう遠いことではあり
ませぬ。それまで暫しお待ちを」

「本当だな？」

「はい」

「それでは次の遺物を発掘すると行くか」

「そんな、神人様を遺物等と……」

「テイシユラと言い、お前と言い、何故そんな箱にこだわるのだ？
幾ら無限の知恵が与えられると言っても、その試しが無い」

「今に分かります」

ナナルはそう言った。

その矢先であった。

マスクドのカプセルが開く。

「おお！ 開いた！」

オロが喜色を示す。

「誰がこの中のリーダーかな？」

「わたくしである。あなたがマスターになるのかな」

「そうだ。私はオロ・エバスだ」

「そうですか。マイ・マスター。我が名はウフェイトウ。エルファの騎士団の団長を務めている」

ウフェイトウは亜麻色の少しウェーブの掛かった美しい髪の毛と、意志の強そうだが、細い美しい眉を持っていた。

鼻筋は通り、涼しげな瞳を持っていた。

美形と行って良いだろう。

「そうか。早速だが……」

オロが何かを言いかける。

そして今に至る。

今でも発掘現場では二つ目の神人のバックアップを発掘している。ナナルは思う。

もし神人が見付ければ神人による人類粛清と携拳と新生人類復活が行われるだろうと。

その時にはオロは何を思うだろう。

そもそも世界にとって暴拳とも言われたこの侵略劇を何を思っ
て行っただろう。

それは、オロにしか分からない。

だが、オロにとっては何かしらの各個たる意思を持ってその行い
をしているように見えた。

ノリトレアでは、アールヌー国の王子、ディーヌ・アデュニを救
う為、作戦を練っていた。

特に弟であるレンヌ・アデュニ王子の意気込みは、尋常ならぬ者
があった。

そこへ、アシュマが、ガンロクを連れて帰り、そのまま会議の場

に臨んだ。

その為、アンまでもが会議の場に出ることになった。

「まあ、アン。貴女どうして？」

アーチエルが言った。

「それよりも、アーチエルお前こそどうして？」

驚いたのはアシュマの方だった。

「何を仰せになります？ アシュマさま。アーチエルもディーヌ様を助けとう御座います故」

「……」

アシュマは言葉を失った。

あれ程、血を見るのを嫌がったアーチエルが、進んで戦評定の場に臨むとは……。

その時、アーチエルが言葉を発した。

「あ、別に進んでこの場にいるわけでは御座いませんのよ？ わたくしがいないと、皆、過激な方向に話が進んでしまうので、ここでもうして見張っていないと……」

まるで、アシュマの心を読んだようにアーチエルが話を返して返す。

「成る程」

アシュマは納得した。

「……で、話しは何処まで進んでいるんだ？」

アシュマが訊く。

「青龍号で一気に国土の奥深くまで侵入し、電光石火の素早さで、ディーヌ王子をお救い致します」

アルステインが言った。

「一気に……ディーヌが何処に居るのか分かっているのか？」

「それは、恐らくアル・プリズンでしょう」

レンヌ王子が口を開く。

「アル・プリズン？」

「前・父王又ハークが政治犯用に使用していた監獄です」

「そこに？」

「はい。恐らくは」

「何処にある？」

「はい。それは……」

レンヌは、アル・プリズンの詳しい在り処を、話した。

その後大体の段取りを決めて、評定を終えた。

それまでに、アーチエルは何度か発言をし、なるべくなら人命を尊重して欲しいと訴えた。

だが、それでは後れを取ると、アシユマが主張。

少し、アシユマとアーチエルの間に気まずいモノが流れ、そのま
まお互い席を立った。

しかし、後でアシユマがフォローを入れる。

「今度の作戦の成否は迅速さだ。迅速に行動すれば、それだけ死傷
者は減る」

「然様で御座いますか？」

「勿論」

アシユマはそう言って、アーチエルの頭をなでてやる。

「もう、アシユマさまはそんな事を言って、このアーチエルを籠絡
するのですね」

「籠絡とは又難しい言葉を選ぶなあ」

「そう言って誤魔化しても駄目です」

「誤魔化してなんていないさ」

二人の唇が近付いていく。

そして重なる。

「いつも同じ手なのね？ アシユマさま？」

「いつもその手に乗るじゃないか？ アーチエル」

「もう」

そう言って二人はまた軽く口付けをする。

「衆目のあるところでは、はしたのう御座いますぞ？ アーチエル
様」

アンがアーチエル達を、窘めた^{たしな}。

サイコ・フライヤー青龍号には、アシユマ、オルバニアン、ガンロク、ビツシユ、アルミナ、シユンマ、レンヌ、ジークフリート、アーチエル、キュポア、リイナ、ミカ、と錚々たる^{そつそつ}メンバーが乗っていた。

変わりどころではアンだ。

アーチエルと二人で青龍号のクルーの世話をした。

ところで、この作戦にアルステイーンとエフアールは参加していない。

当然である。

もう一国の王と后である。

万が一にも王が倒れば、この国は混迷を極める。

皆の説得もあって、アルステイーンは、洪々行くのを取りやめた。

青龍号は順調に航海をしていた。

途中、オロの軍勢に出会うことなくアールヌーの近くにまでたどり着くことが出来た。

そして青龍号のステルス性能と相まって、アールヌーの奥地、アール・プリズンにまですんなりと侵入する事が出来た。

そして速やかに展開するアシユマ達。

レンヌが皆を導く。

途中出くわした兵たちは、アシユマが先頭となって、峰に返した鬼虎で、ばしりばしりと敵をなぎ倒していく。

レンヌが目指しているのは、地位の高い者が収容されている牢獄のある区画だった。

しかしレンヌも完璧にこのプリズンを把握しているわけではない。
途中何箇所か迷った事もあった。

その時にはアシユマがディーヌの気を探って助けてくれた。
その甲斐もあってか、目標の場所に着いたようだ。

そこはホールのように広くて、壁にそれぞれ部屋が穿たれていた。^{うが}

「兄上、何処ですか!？」

「レンヌか? ここだ!」

レンヌが、兄であるディーヌ王子を見つける。

アシユマが錠前を叩き壊し、ディーヌ王子を助け出す。

「長居は無用だ。行くぞ、レンヌ」

アシユマがレンヌを誘う。

「済まぬ。アシユマ殿」

ディーヌ王子が礼を言う。

「その話しは、後。今は逃げる事だけを考えて欲しい」
アシユマが言う。

「待つて欲しいアシユマ殿、この娘も一緒に連れて行って欲しい」
ディーヌは隣の牢獄につながれている娘を、連れて行って欲しい
とアシユマに頼み込んだ。

「それは構わんが」

そういう言葉とは裏腹にアシユマの顔には嫌そうな表情が張り付
いていた。

「済まぬ。アシユマ殿」

アシユマは隣の牢獄の錠を叩き壊し、少女を連れ出した。

「済みません足手まといになって」

その、救い出された少女は、そう言った。

「誰もそんな事は言っていない」

アシユマが言う。

「でも、そうお考えなさっています」

「?」

アシユマは、この娘はテレパシストなのかと考えた。

「はい。お考えのとおり、娘で御座います」

「デイーヌ。この娘を何故？」

「連れて行くのかと、アシユマは思った。」

「このテレパシストの能力を、敵に使われたくは無いので」

「デイーヌが返す。」

「そうか。分かった」

「アシユマがそう言った。」

「悪い人ではなさそうですね？」

「突然、その少女はそう言った。」

「そうではないかもしれないぞ？」

「そうでしょうか？ 多少ひねた所はあるかも知れませんが、基本的

的に良い人です。貴方は」

「名は？」

「アシユマは話を強引に切り上げて、少女の名を尋ねた。」

「アルルマ・サンファと申します」

「そうか。では逃げるぞ」

「待て！ その狼藉者！」

「その時、聞き慣れぬ声のアシユマ達の上に降り注ぐ。」

「狼藉者？」

「アシユマが返す。」

「我が主の治める国で、囚人を奪うとは、狼藉者以外の何者でもあ
るまい？」

「見知らぬ騎士姿の者が言う。」

「狼藉者とは笑わせる。そちらこそ国を奪った篡奪者ではないか」

「アシユマが言う。」

「そういう言い方もあるか」

「そうとしか言えまい？ 国を奪い帝位を奪うと言う事は」

「成る程。ところで其許はアシユマ・アトー殿とお見受け致しますが如

何？」

「如何にもアシユマ・アトーだが」

「我が名はウフェイトウ。エルファの騎士団の団長をしている」
その騎士の姿をした男はウフェイトウと名乗った。

「……その気の張り方は覚えがある。マスクドか？」

「如何にもマスクドだ。ザザのところのマスクドを倒したそうだな？」

「何故それを？」

「我が主から聞いたでな」

「オロカ……」

「如何にも」

「お前らも俺達と戦おうと言うのか？」

「至極当然の事を訊くな？」

「お互い遺恨があるわけでなし、この戦い避けられぬか？」

「主の命があるでな。それにマスクドは鬼を持つ物と闘う運命にある。戦いは避けられぬな」

「そうか」

「では……」

と、ウフェイトウなるマスクドが言いながら手を掲げると、数人のマスクドが現れた。

「皆の者、油断なるまいぞ。ザザのところのマスクドを倒した輩だ」
ウフェイトウが、配下のマスクドに、檄を飛ばす。

その時オルバニアンが割って入る。

「アシユマ。助勢しようか？ アシユマでもあの人数を相手にするのは、無理だぜ？」

「出来るのか？ 相手は手強いぞ？」

「舐めるナイ！ 相手ぐらいいは出きるぜ」

「我等を愚弄くろうするか！？」

マスクドの内の一人が言う。

「お師匠。こつ言う時の為のおら達だべ。そのつもりでおらを呼んだのじゃねえのけ？」

ガンロクが言う。

「そうだな。お前たちを信頼してみよう」

アシユマが珍しくそう言う。

何かアシユマにも、感じ入る所があるのか。

「成程。おぬしも手駒を使うかなら我も手駒を使うぞ?」

と、ウフェイトウが言う。

「手駒ではない。仲間だ」

「そんな事はどちらでも宜しい。では私はアシユマと手合わせをしようぞ。他の者、適当に相手を見繕え」

「適当にとはなんでい! 舐めるな!!」

オルバニアンが激昂した。

「落ち着け、オルバニアン。敵の戦略だ」

アシユマがなだめる。

「す、すまねえ」

「なら我は、アシユマと手合わせをしてみよう」

ウフェイトウが、剣を抜いて両手に構える。

アシユマは何も言わず、腰をゆっくり沈めて居合いの形を取る。

その間、マスクドが何体か、オルバニアン達の前に来た。

「私はウシャトウ。いざ尋常に勝負」

「マスクドってのは勝負に関しちやフェアと言うのはホントらしいな」

「こんな小物相手に、何人ものマスクドを割くのも大人気ないでな」

ウシャトウは剣を手に、こう言った。

「ホントに大人気ないかは勝負してから決めな?」

「言ったな?」

「ああ。言ったさ」

今日のオルバニアンは大逸鉄ではなく、逸鉄で以って対峙した。

「貴様の名は何と言う?」

「オルバニアン・マグマイヤーだ。覚えておきな」

「女同士仲良くやろうじゃないかい？」

アルミナは女性のマスケドの前に立ちはだかった。

「女だからって舐めてないかい？ あゝ……」

「アルミナさ。アルミナ・ラ・シア」

「アルミナって言うのかい？ アタシはマールー。じゃあ、行くよ？」

ガンロクが大兵のマスケドと対峙していた。

「ウゴグロフだ。これから死に行く者に名を語っても意味は無いがな」

ウゴグロフと言う名のマスケドがガンロクに名乗りを上げた。

「ガンロクだ。そう簡単には殺られはしねえべ」

「そうか、ガンロクと言うのか……」

ジークはその大剣を持って既に敵に切りかかっていた。

「おおおおオッ！！」

電光石火の斬撃をマスケドに向かって放っていた。

「遅い！」

そのマスケドは余裕でジークの斬撃をかわす。

「なっ！？」

「大質量の武器と言うものはこうやって扱っただよ」

ジークが地面に突き刺さった剣を引き抜く間にそのマスケドは巨大な戦斧をジークに叩き込んだ。

ジークは寸での所で剣を引き抜き戦斧を受け止めた。

「ほう、これを受け止めるとはなあ。貴様の名は？」

「言う義理があるのか？」

「それは無いがな。俺の名はウデイガア。俺は名乗ったぞ？ 貴様の名は？」

「ジークフリート……」

「そうか」

二人は同時に離れ間合いを取った。

「さあ、どうする？ ジークフリートとやら。貴様程度の太刀捌きでは俺に傷一つつける事は出来ないぞ？ どうする？」

その時ジークはその大剣を右の車に構え左肩を異様に前に突き出しこう呟いた。

「秘剣・裏・閃光一刀・崩し・改……」

「女性を相手に戦うのは性に合わないんですが」

レン又はそう言った。

「あら。お姉さんにそんな事言っちゃって言いのかしら？ ボク？」

「『ボク』じゃありません。レンヌ・アデュニ。これが僕の名前です！」

「アデュニ？ ……ン？ ボク、レンヌ・アデュニ第二王子？」

「そうですよ。だから僕に免じて剣を引くことは出来ませんか？

お姉さん」

「やっぱり『ボク』ね。それにお姉さんじゃ寂しいわ。私の名前はイラ。それに退くことは出来ないの。主の命令は絶対なの」^{マスター}

「オロですか？」

「ええ。そうよ」

「残念です」

そう言ってレン又は呪文を唱えだした。

「秘めたる聖剣、内より溢れん！

愛するものを、護る為

六つの星に、六つの剣、

額に印を表す時に、
両の手、両の目聖剣掴まん！
出でよ聖剣、汝の敵を切り刻まん！
へブンスソード！！」

「あら？　へブンスソードを召喚できるのね？　大したものだわ」
イラは少し驚いた。

まさかこの時代にへブンスソードを召喚できる者がいようとは思わなかったのである。

それを言うなら、この時代に『鬼』を持つ者がいようとは思わなかった。

更によえば、自分達が千年強も眠っていようとは思わなかったのである。

シユンマもマスクドと対峙していた。

シユンマは魔法に精通している魔導士かと思われがちだが、体術や剣術に優れた魔法剣士なのである。

その構えに隙は無かった。

相手のマスクドはこれは中々、と、思った。

そうやって対峙している間に、シユンマは呪文を唱え始めた。

「我は禁忌を見た者、犯したものだ。

我が憎しみは、汝の快樂。

我の癒しは、汝の死のみ。

黒く塗りこめ我が魂。

今、その力を汝らに示せん。

全てを吸い込め。

ブラックホール！！」

「いかん!!」

相手のマスクドは魔法の及ぶ範囲から身を退いた。

その隙を突いて、シュンマは相手のマスクドに切りつけた。

相手のマスクドはシュンマの剣を受け止めた。

「中々やるな。名は何と言う?」

「相手に名前を尋ねる時は、先ず御自分から名乗られるのが礼儀だと、聞き及んだ事がありますが?」

「そうだな。失礼した。我が名はマスクドのレトウ。エルファの騎士団のレトウだ。お主は?」

「シュンマ・イーハニアです」

「そうか。覚えておこう」

そして最後にビツシュ・ノマンがマスクドと向かい合っていた。

戦いは一進一退を極めていた。

こちらは刀、向こうは金剛棒。

相手が斬り付けばこれを防ぎそして反撃を加えて相手に阻まれる。中々高度な斬り合いだった。

「おい! ナトイゲフル! そんな奴早く殺っちまえよ!」

戦っていない数名のマスクドが言った。

「うるさい! 少し黙っている!」

「そうか。お前は、ナトイゲフルと言うのか」

ビツシュ・ノマンが少し興味を覚えて、思わず呟く。

「そうだ。お前の名は? ここまでの腕だ。只者ではなかるう?」

「ビツシュ・ノマンだ。お前はナトイゲフルと言うのか?」

「如何にも。お前のその名、覚えておこう」

アシユマとウフェイトウが対峙していた。

ウフェイトウは剣を振りかざし、アシユマを斬り下ろさんとして

いた。

一方のアシユマは、居合いの形を取り続けていた。いま、アシユマは秘剣・流星を使っていた。

奥義『無想活殺』で得た境地を、別の観点から編み出した技だ。

一剣が万剣になり万剣が一剣に帰る。

そしてそれはどの太刀筋の動きにも対応できる構えの色を匂わせていた為、逆に太刀筋が読めないとも言えた。

もし仮にウフェイトウが一つの太刀筋を読んだとすれば、それは微妙ながら身体の動きに表れ、アシユマはそれを読み別の太刀筋で攻撃してくる。

また仮にウフェイトウが、どの太刀筋も読まなかった場合、アシユマは得意の抜刀でウフェイトウを撃てば良い。

ウフェイトウが全ての太刀筋を読もうとした場合、アシユマの太刀筋は変幻自在、無限であるので全ての予測は不可能なのだ。

「む……」

ウフェイトウは攻めあぐねていた。

アシユマがこれ程までの腕とは、思ってた無かったのだ。

ウフェイトウは今、動けないでいた。

「ウフェイトウ！ どうした？」

「何、睨めっこしているんだ」

残りのマスクド達がはやし立てる。

（何を勝手な事を言う）

ウフェイトウは心の中で舌打ちをする。

（かなりの使い手だぞ。コイツは）

ウフェイトウは、アシユマとどう戦うか思い悩んだ。

アシユマを倒す方法が一つはある。

しかしそれは最後の手段だ。

相抜けだ。

しかし、今、相討ち（相抜けというよりは元来相討ち）のような手を講ずるわけには行かない。

戦いはまだ序盤なのである。

何があるのか分からない。

ここで死ぬわけにはいかないのである。

「どうした？ 切っ先に迷いが見えるぞ？」

アシユマが看破する。

ウフェイトウの心の動きを。

どうするか？

「者供、ここは退くぞ！」

ウフェイトウが皆に下知を下す。

「何！？」

「折角これからだったのに！」

マスクド達は憤った。

もう戦闘に入っているマスクドもいるのである。

「退くぞ！」

マスクドにとって上からの命令は絶対である。

「仕方ない、退くか」

戦闘をしていないマスクドが言う。

オルバニアンがウシャトウと切り結んでいた。

一合、二合と。

そしてウシャトウが口を開く。

「中々どうして、やるモノよ」

「アンタもな」

そうやっていったん二人は左右に別れた。

そして、オルバニアンは刀を徐々に切っ先を天に向かって突き上げ始めた。

「！？」

ウシャトウがオルバニアンの構えに奇異なものを感じる。

身体に気張った筋肉の緊張は無い。

刀は天を突き、胴はがら空き。

即ち胴に大きな隙が出来ていた。

が、ウシャトウは、これがオルバニアンの誘いだと思った。

それが証拠に、氣勢は一向に修まる気配を見せず、益々膨れ上がる勢いだ。

二人は爪先で距離を削るように少しずつ詰めて行った。

ウシャトウはそれでも斬って掛かるうかと思っていた。

どうせマスケドの念導境界面で防がれるのだ。

構わないと思った。

「天刀稲妻斬……！」

オルバニアンは静かに言った。

(小賢しい)

それはウシャトウの偽らざる感想だった。

ウシャトウはオルバニアンを侮った。

ウシャトウは剣を八双の構えに持って行き一気に振り下ろそうとした。

生死の間仕切りはいとも簡単に踏み越えられた。

ウシャトウは剣を振り下ろしてきた。

オルバニアンはやや遅れて刀を振り下ろしたように見えた。

ウシャトウは手首に強い衝撃を受けた。

見ると何とウシャトウの手首が斬られていた。

何故？

それは、ウシャトウが油断して念導境界面を強く張っていなかった事。

オルバニアンが、これまでのアシユマの話から念導境界面を強力に張っておくに越した事は無いとの情報。

念に強く反応する魔導石製の武器、逸鉄が、オルバニアンに強い念導境界面と鋭い斬撃を発しさせていた。

「油断だったなオツサン。じゃあ止めだ」

「侮るなよ？ 小僧」

多少油断をしていたようだ、ウシヤトウは思った。
ウシヤトウが、

「『天蝸鬼』よ、汝の主が命ずる。汝の主の危難に際し、汝の力を以って汝の主を癒すべし」

と、唱えて斬られた手首が元通りになる。

「さて、遊びはここまでだ。中々やるな。今度は今までのようにはいかんぞ？」

オルバニアンはその言葉を聞いて背中がぞくりとした。

ウシヤトウの念導境界面が強く張られたことを肌で感じた。

敵の隙が一分にも見受けられなくなった。

まるで別人だ。

その時、

「者供、ここは退くぞ！」

ウフエイトウが皆に下知が聞こえた。

これには、オルバニアンは正直助かったと思った。

アルミナはマールールの鋭いレイピアの攻撃に翻弄されて、マールールに圧されて形勢は不利であった。

アルミナは右目の眼帯をむしり取った。

これでアルミナは敵の太刀筋が読めるようになった。

「このアタシに『戦利眼』を使わせたね？　もうあんたの攻撃は効かないよ？」

アルミナはそう言い放った。

「『戦利眼』？　まあ、いいさ何を使おうと」

マールールの言葉はそのまま、確かに戦利眼をアルミナが使っても、戦いにくさは変わりがなかった。

ただ、太刀筋が見えるようになったので、危険度は減ったが。

「ち！」

アルミナは舌打ちをした。

しかし、所々小さな隙が出切るのを見逃さなかった。

アルミナはそしてロンリーストライフを振り下ろした。

「オツと危ないねえ。何するんだい」

マールールは寸での所でアルミナのロンリーストライフをかわした。

(くっ！やりにくい……)

アルミナはそう思った。

その時

「者供、ここは退くぞ！」

ウフェイトウの声が聞こえた。

「何だい？ これからだつてのに……。命拾いしたね、アンタ。」

「アルミナと言ったかい？ 次に会うまで、命は預けておくよ。じゃあね」

アルミナは悔しいが、その通りだと思った。

ガンロクとウゴグロフは互角の勝負をしていた。

ウゴグロフはガンロクと同等……。若しくはそれ以上の大兵だ。

ウゴグロフがクレイモアで、ガンロクに斬り掛かる。

それをガンロクが鉈の二刀で、受け止める。

それほどまでに、ウゴグロフの一刀は重い。

そして今度は、ガンロクが、三尺を超える大鉈を、ウゴグロフへと車に回し送り込む。

今度はウゴグロフが、ガンロクの攻撃を身を引いてかわす。

ガンロクの一撃はかなり鋭い。

それを紙一重でかわす。

そして又、ウゴグロフが、剣を振るう。

一進一退の攻防が、行われていた。

ガンロクは、焦っていた。

ガンロクは、腕は確かだった。

そして、ウゴグロフとも互角の腕前を、披露もしていた。

だが、如何せん、実戦経験が少なかつた。

それが、ガンロクの焦りを、引き出した。

その焦りは、ガンロクを怯ませ、徐々に劣勢へと引きずり込む。

ガンロクは、小さな切り傷が、少しずつ増え始めた。

（お、お師匠……アンさん……おら、も、もう駄目かもしんねえ…

…）

「ふ。戦意喪失気味のようだな。貴様それでも戦士か？ みつともない。待ってる。今、楽にしてやる」

ウゴグロフはクレイモアを振り上げた。

（だ、駄目だ！）

その時、

「者供、ここは退くぞ！」

ウフエイトウの声が聞こえた。

「ち！ いい所を。命拾いしたな。ガンロクとやら」

「う……」

ガンロクは敗北感に打ちのめされた。

ジークは秘剣を発する機会を窺っていた。

異様に前に出している左肩は、誘いだつた。

ウデイガアはそれを誘いと看破した。

誘いと分かつていて、どうするか迷っていた。

ウデイガアはこの技は、剣を車に回す技と踏んだ。

そして、戦斧を縦に斬り付けてきた。

中々鋭い一撃だつた。

相手に届く時間はこちらの方が早いはずだつた。

が、ジークは振りかぶり、重い剣を物ともせず縦に振ってきた。

ウデイガアは肩ばかりを見ていたので、振りかぶって来たジークへの間合いを見誤り、戦斧は空を斬つた。

頭上からは大剣が襲ってくる。
完全に後の後を取られた形だ。

ウデイガアはその勘働きで、剣を見もせず、ごろりと横へ転がった。

その時、

「退くぞ！」

と、ウフェイトウの声が聞こえた。

「ち！ これからだつてのに……」

ウデイガアはウフェイトウの下知に不快感を覚えた。

レンヌはヘブンスソードでイラを攻撃していた。

だが、イラはスモールソードとスモールシールドで、剣達は悉くしつじつと弾き返されていた。

それはまるで、舞いを舞っているようにも見えた。

そしてそのまま、レンヌに近付いてくる。

「ア、アンサラー、オールソード、コ、コマンド、アタックー！」

レンヌは焦っていた。

こうまで、ヘブンスソードをかわされたのは初めてで、真っ直ぐとレンヌの方へと歩んできたからであった。

イラは真っ直ぐ、レンヌの方へやって来る。

「さあ、いくわよー！」

(リ、リイナ……！！)

レンヌは愛しい人の名を心の中で叫んだ。

「退くぞー！」

この時、ウフェイトウの声が聞こえた。

「何よ？ これからつて時に」

そうは言っても頭目の言葉は絶対で、逆らえる筈も無かった。

「じゃあ、ボウヤ。また、今度ね」

イラはそう言つてレンヌの前から去つて行った。

シユンマはレトウに対し、決定的な一撃を与えられずに、苛々としていた。

「あまねく炎、火の精霊よ。

汝ら、我が命に従い、

集いて、我が敵を焼き滅ぼすべし。

放て、その手で。

ファイヤーボール!!」

シユンマは魔法を駆使しながら、レトウに対し迫っていた。しかし、なんとレトウも、

「風切る翼、銀翼よ。

気高き心、天かける。

汝に問おうその心

風切る翼、剣とならん

サイクロンスラッシュャー!!」

と、魔法を行使してきた。

「ち!!」

シユンマは魔法を避けるのに精一杯で、敵に近づけないでいた。

これが、シユンマが苛々としている原因だった。

ともすれば、こちらが魔法でやられかねないこの状況で、敵に近付いて一太刀浴びせなければならぬ。

そう、シユンマも皆と同じく焦っていたのだ。

「幾千筋の天駆ける、神の罰たる雷鳴よ

汝の顔に笑みは無し、

未来永劫繰り返される
神の罰をその身に知らん。
サンダーストライク!!」

シユンマが魔法を唱えた。

「ふん！ 甘いわ！」

レトウは自前の武器、大鎌を手前に出すと、稲妻は全てその刃に
吸い込まれて行った。

「なっ！」

シユンマは驚いた。

何と、魔法を吸い込むとは、思ってもいなかったからである。

「さあ、行くぞ。シユンマとやら」

「退くぞ！」

その時、ウフェイトウの声が聞こえてきた。

「ち！ いい時に！」

レトウは悪態をついた。

「小僧！ これまでのようだ。次に会えるときを待っているぞ！」

ビツシュはナトイゲフルと互角に戦っていた。

お互いが切り結んでいた。

果敢にもビツシュは、長い棒の間合いの内側に入り込んで、戦っ
ていた。

相手のナトイゲフルも、小器用に棒を巧みに操って、戦っていた。
双方とも、右に左に、武器を操り、相手に細かく、傷や打撲を与
えていた。

しかし、相手に決定打を与えられずにいた。

双方、苛々としている時に、

「退くぞ！」

と、ウフェイトウの声が聞こえてきた。

「これまでのようだ」

ナトイゲフルが言う。

「さて！ ナトイゲフル！ 逃げるのか！？」

ビッシュが叫ぶ。

「逃げる？ 助かったのはお前の方だよ！」

ウフェイトウの急な下知だった。

かといって、直ぐに「はい」と言える物ではなかった。

誇り高い彼らである。

素直に従えなかった。

が、最後にウフェイトウが

「我に従え！！」

と、下知を下すと皆渋々退いていく。

「皆！ こちらも退くぞ！」

アシユマが叫ぶ。

アシユマも敵が退いてくれてホッと一息を付いていたのである。

アシユマの秘剣・流星も万能ではない。

あの時相抜けをされていたならば、敵はともかく、自分も只ではすまなかつただろう。

そういう点では、ホッと一息、と、言うわけだ。

「おう！」

オルバニアンが応ずる。

以下、余人はそれぞれ隙を突いて退いて行く。

帰りはそれ程抵抗らしい抵抗は無かった。

そしてサイコ・フライヤー青龍号に乗り込んでいく。

全員が乗り込んだところで急発進していく。

急ぎアールヌーの戦闘可能圏内から離脱していく。

「マスクドか。厄介な」
アシュマは誰にも気付かれる事無く呟いた。

第二節 動乱の世界

「アシユマ達はどうなった？」

オロは代官府に来ていた。

まだ神人を発掘している現場に来ていたのだ。

「逃げられたか」

「『逃がし』ました」

「『逃がし』た？ ……だと？」

オロは苛付き、振り向いた。

「はい」

ウフエイトウは悪びれずもせずに言った。

「何故だ？」

「あの、アシユマと言う男、余りにも危険と存じましたもので」

「当たり前だ。その為の貴様らだ。それを忘れるな」

「は」

「それとな。ディーヌ・アデュニ王子を取り逃がした罪、決して軽

くは無いぞ？」

「……」

「分かったなら下がれ。私は忙しい」

「は」

ウフエイトウは気配も無く消えた。

オロは発掘現場の司令室からモニタでその様子をつぶさに見ていた。

もう、既に百数十メートルは掘っているだろう。

こつも何も出てこないとなると不安になってくる。

オロは、

「ここで本当にあっているのか？」

等とスタッフに訊いてみる。

しかし、スタッフに聞いても分かる筈が無い。

何故ならスタッフも神人を見た事が無いから。
現地スタッフなのだ。

ただ、この付近から発信されている電波を頼りに掘り進めているに過ぎないからだ。

そして、この現地スタッフがオロに反感を持っている。

それがモチベーションに直結している。

それはそうだろう、人の家に土足で入り込んで、部屋の中を荒らして、そして強引にその家の主に納まってしまう。

そんな事が許されるだろうか？

が、オロはそれをやつてのけた。

オロは、その事を、分かっているのだろうか？

それとも、分かっている、やっているのだろうか？

だとしたら、質の悪い冗談よりも、笑えないだろう。

さて、神人だが、発掘は進んでいた。

電波が段々と強くなる。

そしてついに掘り当てた。

「やった……」

「やりましたわね！」

オロよりも、ナナルのほうが、興奮をしていた。

オロには、何の高揚感も、感動も無かった。

ただ、

(また、でたか)

と、言う程度の『感想』しか持てなかった。

「これで無限の知恵が持てるでしょう」

ナナルが興奮して言う。

「そんなものか？ 以前、この『箱』を発掘した時、何の恩恵にも預かれなかったぞ？」

「今度はそういうことは無いですわ。何せバヴェルを作って頂くもの。それには大量の魔導石が必要だわ。何とかして頂戴」

「何と！ バヴェルをか！」

「ええ」

オロにとっては、こちらの方に興味があつたらしく、早速飛びついてきた。

「おお……」

と、後ろから複数の、感嘆の声が聞こえる。

七賢人だ。

神人の復活劇を見に来たのだ。

何と、アールヌー国には、オロもいれば、七賢人も来ていたのだ。ここで彼らに気付いて、一網打尽にすれば、これ以後の戦いも無かつたのだ。

しかし、それも分かるはずも無く、アシユマ等は、この国を離れざるを得なかつた。

仕方の無い事である。

神人^{かみびと}を奉ずる七賢人とは、神人の下、全人類を粛清し神人に蓄えられた新生人類のデータを実体化し、地球を新生人類の元に返す事。また、七賢人の眼鏡に適った現生人類を『携拳』と称し、全人類の粛清から隔離する事をその使命としている。

又、七賢人がバツクについている企業には、イーチャイルド社を始め、軍事企業、電脳関連、銀行、不動産、証券など世界の叢叢^{そうそう}たる企業が名を連ねている。

七賢人の、力の底と言うモノが、見えない。

それだけに、不気味なモノが拭えない。

組織は、表面上、宗教法人いうことになっている。

人材の裾野は広がった。

その神人を、オロは、アヘイピア大陸にある、オロ・エバス国のオロ・エバス社・本社に移送した。

オロは早速バヴェルの建造を自邸の庭で始めるよう命じた。

自国本社にある力の全て、イーチャイルド社・軍事部門、関係国

の企業・軍、イーサ教国圏の豊富な魔導石、全ての技術、全ての資産、全ての資源、全ての人的資源。

文字通り、全ての力を注ぎ込んで、バヴェルを建造し始めた。

時間は少し遡る。

そう、丁度アシュマ等がアールヌーと呼ばれていた国を脱出した辺りだろうか。

「殿下、大丈夫ですか？」

アーチエルが、ディーヌ王子のところに来て様子を聞く。

青龍号は戦艦に積めるクラスの魔導石を三基置き、それぞれに六人念士が就いていた。

なので、アーチエルがことさら魔導石に触れている必要はないのである。

（が、いざとなれば、アーチエルが魔導石に触れることもある）

「ええ。大丈夫です」

風呂上りのディーヌが言った。

「冷たいものでもいかがですか？」

「有難う。アーチエル様。頂きましようか」

「はい」

「兄上、大丈夫でしたか？」

レンヌが兄を気遣ってやって来た。

「レンヌ。大丈夫だ」

「いえ、拷問とか……」

「大丈夫だ。それにしても大人びたな？ レンヌ」

「いえ、それ程でも」

「大丈夫ですか？ ディーヌ様」

「お美しくなられましたね。リイナ。レンヌと仲良くしてましたか？」

「美しくだなんて。嫌ですわ」

リイナは照れて去ってしまった。

この様子なら大丈夫だな。

デイー又はそう思う。

「はあ。良いお湯でした。有難う御座います」

「大丈夫かな？ あゝ……」

アシユマが気遣うが……

「アルルマ・サンファと申しました。先程」

「どうやら、機嫌が悪いらしい。

「どう致しました？ アルルマ様」

「アーチエルがご機嫌伺いをする。

「貴女様が、アーチエル様に御座いますわね？」

「？ なぜ、わたくしの名を？」

「いえ、何となく……」

「テレパシストなのですよ。アーチエル様」

「デイー又王子が言う。

「デイー又様！」

「アルルマは怒った。

「アルルマ様。そうお怒りにならずに……」

「そうですね。御免なさい」

「あの、お二人はどういったご関係で？」

「縁戚ですわ。従兄妹です」

「え？ そんな話、僕は知りませんよ？ 兄上」

「レン又が困惑して言う。

「それはそうだ。父上と私の間での秘密だからな」

「何故!？」

「それはわたくしがテレパシストだからです」

「テレパシスト……それが何故？」

「政争の具に使われるのを怖れるあまりに、貴方の父王……叔父上様がわたくしを修道院に……」

「そうでしたか」

レン又は同情した。

「あら、同情は不要ですよ？ それに、あまりわたくしとお話してますと、あのお方がお怒りになられますわよ？ 下心は無い事をちゃんと仰って」

アルルマが指し示した先には、怒り顔のリーナがいた。

「り、リーナ！ ち、違うんだ……これは」

「ま、許して差し上げましょ？ 下心は無いみただし」

リーナが半ば怒りながらレン又を許した。

そうして、アシユマ達は機体をノリトレアに滑り込ませていく。

アルステイーンは不機嫌だった。

しぶしぶ承知したとはいえ、やはり、自分が除け者になったことを、不機嫌に思ったのだ。

玉座に、斜めに座り、ぷい、と横を向き拗ねている。

「可愛い方ですねアルステイーン様って」

アルルマが思わず口を滑らす。

「可愛いって何よ……って、キミ、誰？」

「これは申し送れました。わたくしはアルルマ・サンファ。アール又一の眷族けんぞくに御座います」

「そうですか。ご苦労をなさったようだ。ゆっくりなさって下さい」

「有難う存じます。陛下」

「さて、デイー又王子。貴方もお辛かったですよね。大丈夫ですか？」

「これは、陛下。お気遣い、恐悦至極に存じます」

「いえ。恐悦しなくて良いですから。貴方もゆっくり休んでください」

「有り難き幸せ」

「カタイですよディー又王子……ま、しょうがないでしょうけど」
「それもそうですね」

ディー又が突然態度を豹変させた。

「そうそう、それぞれ。もう、やれば出来るじゃん」

「貴方、それは崩れすぎ」

玉座の隣にある、王妃の座に座るその人。

エファール・ノリトレアが言う。

「崩れすぎかな？」

「そうよ。崩れすぎ」

それはさて置き、と、言った感じで、

「ところでアシユマ君、何かご報告、ある？」

そうアルステインは言う。

「マスケドが現れた。多分バヴェルも発掘しているかもしれない。

…… 神人もな」

「マスケドですか……それは厄介な」

「厄介だがフェアな戦い方をしていたな。俺達で捌いていたのは8人のマスケド。それに対しまだ向うには4〜5人余裕があった。あの戦力を投入されていたら、先ず間違いなくこっちが、やられていたろうな」

オルバニアンがそう言った。

「武器が必要だな」

アシユマがぼそりと言う。

「武器？」

「ああ。イツテツの親父さんに幾つか打ってもらおう」

「来てるんかい!!」

「ああ。駄目か？」

「駄目じゃねえケドよ……あのオッサン、苦手なんだよなあ……」
皆が湧く。

「冗談ではなく、武器を新しくした方が良い者がいるな」

アシユマが言った。

「それで、俺ンとこに来たわけだ」

「まあ、オヤツサン。面倒を見てやってくれないか？」

「『面倒』、『面倒』っておめえの場合は、本当に『面倒』なんだよなあ……………」

「まあ、まあ、オヤツサン。そんな細かい事を。こんど、いいサケ持って行くから」

アシユマはそう囁いた。

「まあ、しょうがねえなあ……………で、何をしてもらいてえんだ？」

「それじゃ、注文としては……………」

「暗殺の真似事をしろと仰るのか！ マスター！」

「真似事ではない。そのものだ」

オロの政務室でオロと、マスクド、エルファの騎士団団長、ウフエイトウが話し合っていた。

いや、オロが命令を下していた。

「出来ません！ そのような卑しい仕事は。われらは誇り高きマスクド、エルファの騎士団です！」

「マスターの命は従えないと？」

「うっ！ くっ……………」

ウフエイトウは唇を噛み、握りこぶしを作って、この屈辱に耐えていた。

オロはそんな事にはお構いなく、

「やるのか？ やらないのか？ どっちなんだ」

と、迫った。

オロが、ウフエイトウに迫っている仕事は、レボトミノ連邦共和国の、テオドル大統領の暗殺だ。

オロは、マスクドの事を、まるで鳥の雛だな、と思っていた。

カプセルを開けてみて、始めに見たものをマスターとみなす。
これが善人ならまだ良し。

しかし、これは善き人でない場合は？

オロはそんなたわいも無い事を考えながら、ウフェイトウの答えを待っていた。

「分かりました」

ウフェイトウは、従わざるを得なかった。

それがマスクドの掟だからである。

マスクドにとって、マスターの命は、絶対であった。

いや、それよりも絶対的なのは、マスクドの掟なのだ。

それに、背く訳には行かなかった。

何故ならば、それがマスクドの存在意義だからである。

ウフェイトウはオロに訊く。

「必要な情報を教えていただきたい」

オロは

「それはこちらから、後で必要な情報を提供しよう。今日は、まずそのことだけを頭の片隅においておけば良い。部下の説得にも、時間が掛かるだろうしな」

「いえ、それはありませんが……」

「まあ、良い。下がれ」

「ははっ」

ウフェイトウは屈辱を胸に秘め、その場を立ち去った。

オロは、レボトミノのテオドルを、小賢しく思っていた。

自分の意にそぐわないものは、全て気に入らなかった。

その全てを潰したかった。

レボトミノ連邦を力に任せて、征服しても良かったが、しかしい
ずれこの国を、この手に入れて戦力になるものを、わざわざ削ると
言うのも愚かしい。

問題なのはその国にいる頂点、テオドールなのだ。
テオドールさえ殺せば良い。

オロはそういう結論に達した。

だが、テオドールだけを殺すと言うのは、一般の兵には難しい。
そこで、エルファの騎士団の出番となる訳だ。

多少の銃弾は勿論、魔導機兵クラスの攻撃なら、意にも介さない
だろう。

攻撃力は勿論、問題は無かろう。

そう言う事だった。

黒いサイコ・フライヤーにエルファの騎士団が乗り込む。

黒いと言う事はステルス仕様なのか。

ハッチが閉まる。

嫌な静けさが漂う中、一人が口を開く。

「なあ、ウフェイトウ兄貴よう。何で俺らがこんな、糞仕事をしな
きゃ、なんねえ？」

ウシャトウが訊く。

「今更聞くな。弟よ。マスターの指示だ」

「そっかい」

「みな、今回の目標の顔は覚えたか？」

「ああ」

皆が頷く。

「抵抗する奴はどうするんだ？ 兄貴？」

ウシャトウが訊く

「なるべくなら殺すな。ただし作戦は迅速を極めなければならない。
その為の障害となり得る様なら斬って捨てて構わん」

ウフェイトウはここでエルファの騎士団……マスターとしての、
非情な部分の顔を見せた。

黒いサイコ・フライヤーは、夜陰に溶け込み静かに空を滑空していく。

黒いサイコ・フライヤーは、レボトミノの警戒網をすり抜け、大統領府に降り立った。

エルファの騎士団が素早く展開していく。

すぐさま、防御の兵達が展開してくるが、すぐさまエルファの騎士団の連中は、敵兵を両断して大統領官邸へ、そして中枢へと向かう。

「大統領起きてください！ 敵です！」

「敵だと？」

テオドル・ブルツクドルフ大統領は、ベッドから飛び起きながら服を着替えた。

「はい。もう、もう無茶苦茶です。やたらめったら斬りまくってます」

(アシュマ・アトーか?)

大統領は始め、アシュマがやって来たのかと思った。そしてスタッフに訊いてみる。

「どこの国のものか？」

「分かりません。どこの国の者かも、何もかも」

(もしかして、オロか?)

テオドルはそうとも考えた。

寧ろ、そちらのほうが合理的だと思った。

しかし、こうも行き成り登場して、部隊を展開させ、あっさり中枢にまで侵入できる敵とは一体何者か？

「さあ、大統領こちらへ」

テオドルが脱出口へ誘われる。

その時、轟音と共に壁が崩れ、テオドルの行く手に立ちはだかる男が一人。

「貴様あ！！」

テオドールの側近が斬りかかって行く。

だが、側近はその男に一刀両断にされてしまった。

それは鮮烈な光景だった。

テオドールの様な素人目にさえ、剣の達人と分かるほどだった。

「君は誰かね？」

「私はエルファの騎士団団長、ウフェイトウと言う。テオドール・

ブルックドルフ大統領とお見受けいたす。如何？」

「如何にも私がテオドールだ」

「意外と動じていないな。我が主に、楯突くだけの事はある」

「オロか？」

「如何にも」

「ここへ来た目的は、私の命か？」

「そうだ」

「分かった。私の命はくれてやる。その代わり、もうこれ以上、無駄な血は流さんでくれ」

「ほう、自分の命と引き換えに、部下の命を守れと言うのか。中々肝が据わっているな。気に入った！ その申し出、引き受けよう」

そして、ウフェイトウが指笛を、ひゅっ、と吹いた。

人が動いて行く気配がする。

「約束は守った。今度はお前の命を頂こうか」

「分かった。好きにするが良い」

「益々以って気に入った。殺すには惜しい」

「最早これまで。後は頼む。アシユマ・アトー！」

ウフェイトウの剣は、鈍く肉を断つ音を残して振り下ろされた。

一夜経って、レボトミノ連邦共和国のテオドール・ブルックドルフ大統領が暗殺されたニュースが世界中を駆け巡った。

まさにシヨックが世界中を回ったと言える。

が、どの勢力が、この暴拳を行ったか、分からずじまいだった。

この中、ノリトレア王国とレキシタニア王国が、被疑者不明のまま遺憾の意を表す抗議声明を出した。

そのレボトミノ連邦共和国では、ベンノ・アードラーズヘルム副大統領が、臨時に大統領に格上げされた。

そのベンノ大統領には七賢人の後ろ盾があった。

勿論、秘密裏に。

「なあ、アルステイーン。やったのはあの、ナントか騎士団の奴らに決まっているんだ！ オロんとこの！ 何でそれを言わないんだよ！」

オルバニアンが、口角泡を飛ばして訴えていた。

ここは、ノリトレアの王宮市の、王宮、王の執務室である。

アルステイーンが困ったような鬱陶しそうなそんな顔をしてオルバニアンの話聞いていた。

「おい、聞いているのかよ！ アルス……」

この時点でアルステイーンは、物憂げに右手を上げて、

「オルバニアン、静かにしなさい」

と、言った。

「……」

オルバニアンは一瞬言葉を失った。

アルステイーンが、これ程、思い悩んでいる光景を見るのは、久しぶりだったからである。

それはそうであろう。

国交を封じられ、経済を封じられ、物流を封じられ、ノリトレアは国全体が疲弊し精神的にも物質的にも耐えうる限界が来ていた。

そのような話の中、おとないを入れてきた者がいた。

ヨナルト・リングと言う。

防衛庁長官だ。

「陛下。この間の話は、考えておいて、頂けましたかな？」
「話？」

オルバニアンが言う。

「陛下。誰ですか？ この胡乱な輩は？」

「ウロン？ ウロンってなんだ？ メロンの仲間か？」

「胡乱と言うのはですね、アヤシイって事ですよ」

「あ、怪しい？ この俺が？ お前の方こそ怪しいじゃねえかよ！
！」

「陛下。この男は誰なんですか？」

「一応僕の義弟おとこと言う事になりますかね？」

「……では、ルーラン殿下で？」

「おうよ。ルーランでい！」

「こ、これは失礼をば。ところで陛下二人きりでお話を」

「俺は邪魔者かい！」

「まあ、一寸席を外してください。オルバニアン」

アルステインが、申し訳なさに言う。

「ちっ！」

オルバニアンは、渋々執務室を後にする。

「アルステイン陛下。ヨナルト・リング、ここにオロ・エバス国
に戦端を開く事を、具申致しまする」

「却下」

「へ、陛下、まだ話の内容も何もお話しては……」

「却下」

「な、何故？」

「我が国はあくまで平和的な外交と対話で、話の解決を図る事を旨
とします。戦争等とは以ての外。今回、この話は私の胸にしまって
おく故、今日はこのまま帰るが良い」

「しかし！」

「くどい」

アルステインの低いが、良く通る声に、ヨナルトは寒気を覚えた。

そういえば、確かこの男は、曲がりなりにも、イルドリアの武道大会で次席を治めた、強者。

気迫で、相手を追い詰める等、造作も無いはず。

ヨナルトは、そんな事を考えながら、震える手足を、何とか気力で押さえつけていた。

「……は。分かりました。今日のところは下がります」

「おんなじ内容だったら、明日も明後日もありませんよ。防衛庁長官殿。我が国は専守防衛。攻撃されない限り武力を行使する事はありませんよ？」

「……」

ヨナルト・リングは無言のまま部屋を出た。

次の日アシユマはイッテツの工房を訪れた。

イッテツに打って貰った武器を受け取りに来たのだ。

「オヤツサン、いるかい？」

「ああ、ヒヨッコか。入って来い」

「御免。どうだい出来ているかい？」

「つたりめーよ。おめえ、俺を誰だと思ってやがる？ イッテツ様だぞ？」

「そうか。じゃあ、貰っていくよ」

「まった！ 代金は？」

「おっと、そうだった」

「合計、金一億八千万！ 耳を揃えて置いて行きな。行っておくが一分もまからないぞ」

「じゃあ、代金として金二億を置いていく。二千万分は俺の謝意と

酒代だ。いつも済まん。オヤツサン」

「そうか。じゃあ、その分は遠慮なく貰っておく」

アシユマは金二億の入ったアタツシユケースを置いた。

「じゃあ、武器は貰っていく」

「ああ」

アシユマは武器を持って帰った。

王宮に戻ってきたアシユマは王宮の庭で武器を広げた。

まずオルバニアンが来て、

「おお！ 俺の大逸鉄！ ちゃんとメンテされて帰ってきたかあ？」
手に取った。

次にアルミナがやって来て、

「ああ、私のロンリーストライフ。別れていて寂しかったのよ？」
と、頬擦りを始めた。

ガンロクがやって来て、自分の武器を手を取った。

三尺もある大鉈だ。

その大鉈は更に尺が伸びて三尺半となった。

「ん！ これなら使い易いべ」
満足顔だ。

ビツシュ・ノマンも自分の刀を見て満足げだ。

ジークフリートは自分の剣、シルベルン・シュトウルムを無言で見つめている。

「どうしたの？ ジーク君」

ミカが訊く。

「いや、使い易いものなのかと思ってな」

「振ってみたら？」

「……そうしてみる」

ジークは庭を少し入り込み周りに人がいないことを確かめると、自分の身長より少し低い豪剣を振り始めた。

「……悪くない」

「そう。良かった」

「……」

「どうしたのジーク君？」

「ミカのは？」

「ああ、私のレイピアは守りみたいなもの。役には立たないわ
向こうではシユンマとキュポアが会話をしていた。

「どうなのじゃ？ シユンマ。その刀の具合は？」

キュポアが訊く。

「ええ。とても良い刀だと思います。手に吸い付きます。重さも丁

度良い具合で」

「斬れ味はどうなのじゃ？」

「そればかりは試し斬りをしないと……」

「さよか……」

夜。

自邸で、ヨナルト・リングは、部下と思われる男と話をした。

「如何でしたか？」

「駄目だ。話しにならん」

「では？」

「各部隊の部隊長を私の私邸に集める。私邸に来られない者には箝
口令を敷き監視を付ける！ 各省庁に睨みを利かせる！ 各大臣は
至急私の私邸に連行して来い」

「ではいよいよ？ 私は待っております！ あの能天気な王が…

……

「言葉は要らぬ！ 行動しろ！」

「はっ！」

「……おのれアルスティーンめ！」

「……私の施政が間違っているのか……」

王宮、アルステイーンの居間。

アルステイーンが思い悩んでいる頃、軍部が暗躍している事を、彼は知らなかった。

闇の胎動。

軍部が蠢いていた。

密かに放送局を占拠し、各省庁を占拠した。

この頃になって、やっとアルステイーンに一報が入る。

ヨナルト・リングに謀反の疑いあり、と。

「しまった！　そこまで考えていたか。僕としたことが迂闊うかつだった」
そしてオルバニアンが、アルステイーンの元にやってくる。

「大丈夫か？　アルステイーン？」

「オルバニアンですか。やられました。まさかヨナルトが、クーデターまで考えていたとは」

「そんな事はどうでも良いよ！　どうするんだよ!？」

「逃げます」

「はあ？」

「ここまで用意周到にやられているとなれば、逃げるしか手はありません。悪戯に兵を動かし血を流したくはありません」

「だけどよお」

「今、動いても、勝ち目は無い、と言っているのです!」

「うっ!」

「私はエファさんのところに行つてきます。あなたはアシユマ君のところに行つて……」

その時、

「取り急ぎご報告申し上げます！　ヨナルト・リング、宮殿を取り囲み攻撃の構え!」

伝令がやって来てそう言った。

「急ぎなさい。オルバニアン」

「分かった」

「アルステイーンは大丈夫か？」

アシュマが宮殿の廊下を歩きながら訊く。

「ああ、今の所はな」

オルバニアンが答える。

アシュマと、オルバニアンの後ろには、アーチエル以下、ガンロクやミカ、アルミナ等が付き従っていた。

勿論スコラの移転についてきた、サクラコ・セタの事も忘れてはいない。

アシュマ・ファミリー勢ぞろいである。

「アルステイーンは今、何処に居るんだ？」

アシュマが訊く。

「おい、アシュマよう。お前さんが持っている、その文明の利器は一体何でい？」

「ん？ 携帯端末？」

「だろ？」

「そうか」

アシュマは携帯端末を開き、アルステイーンに連絡を付けてみる。

『はい。アルステイーン』

「アシュマだ」

『はい。何でしょう？』

「今、何処だ？」

『もう直ぐ青龍号に着きます』

「そうか。分かった。こちらも直ぐに着く。そうしたら脱出だ」
『では』

「どうだった？ アルステイーンは」

オルバニアンが訊く。

「うむ。もう直ぐ青龍号に着くそうだ」

「アシュマ君」

「アルステイーン！」

アルステイーンとアシュマはお互いを確認した。

アシュマは他のエファール、アシュオン、サーナリア、フェリア、モ二八も確認した。

「さあ、逃げましょうか」

アルステイーンが言う。

「でもヨデイ。何処へ？」

エファールが訊く。

「とりあえず、王宮市からは脱出しましょう」

サイコ・フライヤー青龍号は、王宮から飛び出し、夜の闇の中へ消えて行った。

ヨナルト・リングは、王宮を包囲はしたものの、突入するタイミングを逸してしまったようだった。

アルステイーンは笑っていた。

アルステイーンは、今頃になって悔しがる、ヨナルトの顔を想像すると、可笑しくて堪らなかったのだ。

「まさか宮廷内にサイコ・フライヤーを隠しているとは、用意周到な奴。流石は剃刀アルステイーンと言ったところか」

ヨナルト・リングはそう言った。

アルステイーンにしてみれば、別に隠していたわけでも何でもない。

ただ、いつでも飛べる様に、側に置いていただけだ。

整備のメカニックマンや、補給帳簿等を、注意深く観察してみれば、すぐさま分かる事である。

要はヨナルトの注意力不足と言う奴で、別にアルステイーンがそ

のことで、『剃刀』の異名を持ってこられても、本人にとっては甚だ迷惑と言うモノだった。

その後の王宮市には戒厳令が布かれ、一時的に統治権が軍に移行された。

その為、民間人などは、夜間の外出が禁止される等、不便な生活を強いられる事になった。

勿論それは、スコラにまで及び、潜在的戦力を奪われた。

七賢人は、今回のノリトレアのクーデターに関して、概ね好感触を得ているようだ。

これで、幾らでも突っつき易くなったと思っている。

ヨナルト・リングは経済的封鎖の首魁として、これを行っていたオロ・エバス国に対し宣戦布告を用意しているという。

これには、七賢人やオロは逆に小躍りして喜んだ。

わざわざこちらから、大層な大義名分を考えて攻め込む必要がなくなっただからである。

向こうが勝手に攻めてくるのだ。

こちらは、それを迎え撃てばよい。

しかし、国民が今ひとつ、戦争に関して興味を引かない。

多少の厭戦気分も、湧いているようだ。

「……成る程。国民が戦争に関しては過敏になっているというわけか。何かよい策は無いか？ ナナル」

「相手から、仕掛けさせるといふのは、如何でしょうか？」

「それは簡単だが……ただ仕掛けさせると言っても……」

「妙案が御座います」

「妙案？」

ヨナルトは何とアルステイーンも見も知らずのアイル・ノリトレア（三歳・女）なる幼子を王位に就け、臨時に新しい内閣を組閣。

首相はアルプト・エイブス。

自らは統合幕僚長となり、又、アイル・ノリトレアの後見人として治まった。

皮肉にもこのアルプト・エイブスなる人物がノリトレアの初代首相と言ふ事になった。

これで、一応文民統制の形を取った。

勿論、ヨナルトの傀儡政権である。

これには七賢人は多少驚いたが、それはそれで、それまでだった。責めどころは幾らでもあるのだ。

それも『これから』……。

そんな中、レキソタニア王国のエステイー・イーニア・アップルトンは、ノリトレアのクーデターを強く非難し、直ちにアルステイーンに、政権を返上する事を強く求めた。

また、それを国際社会の中で強く訴えた。

ノリトレア軍の空母、ングーイがレイフ諸島ウング島のオロ・エバス軍基地を目指していた。

ウング島の軍事基地には、オロ・エバス軍の艦船・魔導機兵群が多数駐留していた。

そこへ、ノリトレア王国よりオロ・エバス国へ一報が入る。

それはオロ・エバス国への、宣戦布告だった。

それと同時に、一斉にオロ・エバス軍の軍港へ、魔導機兵軍によ

る奇襲攻撃が開始された。

機体は全てステルス仕様だったので、事前に作戦行動を察知する事は不可能だった。

ノリトレア軍は爆撃のし放題だった。

結果は大成功。

オロ・エバス軍は壊滅的な打撃を受けた。

表面的には。

このノリトレアの奇襲攻撃は、実は、オロ・エバス側は事前に察知していた。

その上で、ノリトレアに奇襲させた。

奇襲を受けたのは全て、老朽艦・旧型魔導機兵だ。

だが、オロ・エバス国の軍にとっては、打撃には違いなかった。

この卑怯なる事件によって、オロ・エバス国の国民は厭戦気味だった国論が、徹底抗戦へと振れるのは当然の帰結だった。

勿論、国内世論を厭戦から徹底抗戦へと誘導したのは、イーチャイルドを筆頭とする七賢人の息の掛かった企業の、プロパガンダが功を奏したのは、言うまでも無い。

オロ・エバス社を含めて。

オロ・エバス国軍は速やかに軍の再編を進めた。

ところで一方、クーロン共和国。

こちらの国も、経済的、物資的、国交的に遮断をされて、かなり逼迫された状況に置かれてきた。

何とか、内需喚起で経済を成長させてきたが、矢張り苦しいことには、変わりがなかった。

そしてとうとう追い詰められて、クーロン政府はオロ・エバス国と対話するようにと、何とか道筋を求めた来た。

しかしそれも叶わずとうとう追い詰められて、クーロン政府もオロ・エバス国に宣戦を布告するに至った。

ちなみに、ここに至るまでに、リン・シャオリン国家主席は、
「もう駄目よ！ やってられないわ！」

と、切れたとか、切れなかったとか、まことしやかに囁かれています。

ただ、クーロン共和国のリン・シャオリン以下、首脳部はアルステイーンが首脳部にいないノリトレア王国とは距離を置いた。

ノリトレアの隣国イーハンに不穏な空気が流れる。

軍部がなにやら暗躍しているのだ。

イーハンを治める、シヨウマ・イーハニアが気付いた時には、もう遅かった。

イーハンにもクーデターの波が襲ったのである。

王宮に兵が押し寄せ、シヨウマを取り囲み捕らえた。

カオルコ王女は辛うじて脱出に成功する。

シヨウマが、注意を自分に向けさせようと、派手な動きを見せたからだ。

いかにも脱出する気配を、見せたのである。

勿論、シヨウマは逃げるつもり等、全く無かった。

娘を逃がすが為の、手であった。

そしてシヨウマは、捕らえられた。

その後、シヨウマはある政治犯が捕えられている獄へと連れてこられた。

その人物とは、シュニク・インジャ、その人であった。

「久しぶりよの。シヨウマ・イーハニア。安心するが良い。これからのイーハンはこのワシが治めるに。くはっ！ くはははははっ！」

「お前が治めるとなれば、民が泣くだらうよ」

シヨウマが言い返す。

「そうなるかどうかは、これからのワシの施政を、見てからにしてもらおうかの？ くふふ」

「くっ……」

「シヨウマ・イーハニアを獄に入れよ！」

シュニク・インジャは、その信奉者により、助け出されたのだ。

このとき、シヨウマは自分の身柄が、シュンマを封じる為利用されるのを嫌い、隠し持っていた短刀で自らの腹を掻き斬った。

シュニク・インジャはすぐさま王位に就き、ノリトレアの施政を支持、ノリトレアとの同盟を模索した。

そうしたイーハンの動きを、ノリトレアは好感。

すぐさま、軍事同盟を結ぶ事になった。

シュニク・インジャは前回クーデターの時にはオロ・エバスの後ろ盾があったが、今回は敵。

しかし、その代わりと言っては何だが今回はノリトレアのヨナルト・リングが後ろ盾につく格好となった。

すぐさまシュニク、ノリトレア陣営で参戦を表明する。

七賢人に見れば、してやったり、願ったり叶ったりだった。

すぐさま、二人は会って会談をする。

会談が漏れ聞こえてきた所によると……。

「これで安泰ですな」

「そうですな」

「あっはっはっ」

と、話していた様だ。

本当にそう思っているのなら、アルステインなら

「馬鹿」

と、言っただろう。

だが、シュニクには一つの切り札があった。

前回の事変の時に、シュニクはある古文書を手に入れていた。

それは……

シュニクはいま、イーハンのとある山中に居た。
墳墓のようにも見える。

その山に横穴を掘って中に進んでいた。

「本当にここなのか？」

シュニクは側近の者に、訊いた。

「はい。確かにここで御座います」

「その書物、信用なるのか」

「分かりません」

「なっ……」

シュニクは、言葉を失った。

「ただ、シヨウマの書庫の奥深くに、封印されていた物ですから、
あながち偽りとも思えませぬ」

「そうか」

「部屋が出てきましたあ！」

「！」

「シュニク様」

「分かっておる！ 行つて見る」

シュニク・インジヤは通路の奥、突き当りの小部屋へと向かった。
そこには六つのカプセルが並べてあった。

「これか！ これが真素劍奴^{マスケド}！！」

これが、正にシュニクの、切り札だったのだ。

ぷしゅっ、と、空気の抜けるような音がして、カプセルが開いて
ゆく。

「おお！」

髯面のシュニクが歓喜の声をあげる。

蓋が開ききる。

中には男五人の女一人であった。

皆裸だった。

一人男が目覚める。

「お前がマスターなのか？」

シュニクが、

「そうだ。ワシがお前たちの新しい主ぞ！」

そう、言っていた。

「そうですか。我等はクロダの六人衆。マスターの手となり脚となり粉骨砕身働く事を誓います」

「うむ、うむ」

シュニクは満足げだ。

シュニクはこの事を、ヨナルトに言うつもりは無かった。

何故ならこのマスクド、『クロダの六人衆』を世界制覇の手駒にしようと考えていたのである。

イーハンから、辛くも脱出したカオルコ・イーハニア。

カオルコは何処に行ったのか？

カオルコは密かに、シュンマと携帯端末を通じて、ノリトレアのある場所で、待ち合わせた。

王宮市の外れだ。

道の両側に街路樹が植えられている。

護衛としてアシユマ、オルバニアン、アルミナ、ガンロクがついて来た。

こちら側はフードを頭から被っていた。

革製で黒いフードだった。

そして向こう側から、矢張り黒いフードを着ている女性らしき人が、こちら側に歩いてきた。

「今日は良い日和ですね。ピクニックに最適だ」

「でも、午後からは天気が崩れるみたいですよ？」

「ね、姉さんかい？」

「シュ・シュンマ……？」

お互いは被っていたフードを外した。

「ね、姉さん！」

「シユンマ！」

二人の姉弟は人目も憚らず抱き合った。

「良かったね。シユンマ王子、カオルコ王女」

アルミナが感無量となった。

「本当に良かったのかな？」

何処からか声が響いてくる。

「誰だ！」

オルバニアンが叫ぶ。

「われ等か……」

矢張り黒いフードを着けた者が六人木々の間から現れた。

「姉さん、これは？」

シユンマが驚き思わず尋ねる。

「し、知らないわ……わ、わたくしは」

「付けられた。そういうことか」

アシユマがぼそりと呟く。

「お前ら、一体何者だ！」

オルバニアンが叫ぶ。

フードの男らしき人間が、

「我等か……我等は！」

フードを着た者達が一斉にそれを脱ぎ捨てる。

「我等はクロダの六人衆……マスクドだ！」

「また、マスクドかつ！ いい加減にして欲しいぜ！」

オルバニアンが再び叫ぶ。

「お前たちの事は知っている。ザザのところのマスクドと、戦った

そっちな？」

「今はエルファの騎士団つて所とも、戦っているけどな……！」

「ほう、ウフェイトウのところとも、戦っているのか？」

「ああ」

「ところでアシユマつてのは、どいつだ？」

別の男が話す。

「俺だが？ 何か用か？」

アシユマが返す。

「一手、手合わせ願いたい」

「……よかるう」

男達は向き合った。

「お前の名は？」

アシユマが問うた。

「俺か？ 俺は火餓鬼のオクナフ。と、言っても無駄だがな……もう直ぐ……」

「お前が死ぬからか？」

「何！？」

そう言っただけオクナフは大刀を振り回し取り出した。

「見りゃ、まだ青二才じゃねえか。ザザは何でこいつにやられたんだ？ ロシもいただろうに」

「……」

「なんでい、びびって声もでねえか？」

アシユマは既に居合に腰を落とし、左手の親指で鯉口を切って、鬼虎の柄に軽く右手を置いた。

「能書きはもう済んだか？」

「……この、若造が……」

「落ち着け！ オクナフ！ 奴の手だ！」

「お、おう……そ、そうだなシシオウ……」

アシユマはシシオウと呼ばれた男に注目した。

アシユマはそのシシオウが、このマスクドの集団の頭目と見た。

「おら！ 注意がこっちに向いていないぜ！」

オクナフの大刀が頭上から襲う。

（殺った！）

オクナフは勝利を確信した。

ザザのところのマスクドを、壊滅に追い込んだ男、アシユマ・ア

トー。

その男を殺つたとなれば、格が上がる。

一瞬その思いがオクナフの頭によぎる。

だがアシユマはその大剣の軌道を紙一重でかわす。

直後、アシユマは鬼虎を鞘走らせ、閃光を生んだ。

オクナフは首根を斬られ、刎ね飛んだ。

「……………！！！」

そこにいるマスクド全員が驚いた。

まさか、マスクドたる者が、こうまであっさりと敗北するとは、

思わなかったからだ。

「まだ、やるか？」

アシユマが言う。

「シシオウ！　こうまで子馬鹿にされて、戦わないなんてそれは無いぜ！」

「言うな！」

「シシオウ！」

「……………分かった。お前たちがそこまで言うのなら、戦ってもよい。

ただし、アシユマは俺が当たる。お前たちは他の者の殲滅に当たれ

！！」

「シシオウ！」

「反問は許さん！！！」

シシオウと呼ばれる、頭目はアシユマの眼の前にゆっくりと進み出た。

「さて、尋常に勝負と行こうか？　アシユマ・アトー」

「シシオウ……………と、言ったか？」

「ああ。クロダの六人衆の頭を張っている」

シシオウと呼ばれるマスクドが言う。

「もう、五人衆だがな」

アシユマが揶揄する。

「そつだな」

シシオウが応ずる。

「俺はエヴユ。お前は？」

鎖鎌を持った男が分銅を回しながらオルバニアンに訊く。

「俺の名前はオルバニアン。オルバニアン・マグマイヤー！ 覚えておきな！」

「ふん！ 直ぐに忘れる事になるだろうよ」

「言ったな？ 直ぐに後悔する事になるぜ？」

「そうかい？」

エヴユはそういうと同時に、分銅を投げてきた。

「ち！」

オルバニアンは逸鉄を引き抜き、分銅を跳ね除けた。

と、同時にエヴユは、オルバニアンに鎌で斬りかかって来た。

オルバニアンは返す刀で上段から斬りかかった。

エヴユは、何とか鎌で、オルバニアンの逸鉄を受け止めた。

「なかなかやるじゃないか？ 小僧」

「そうかい？ この間合いじゃ分銅は使えまい」

「しかしこの間合いはこっちの鎌に有利な間合いだが？」

「くっ……」

「お前の相手はこの俺だ」

その男はアルミナと対峙しそう言った。

「あ、そう」

「けっ！ 只の人間が！」

「只の人間だなんていわないですよ！ アタシだって名前があるんだから！」

「そうかい。じゃあ、俺も名乗らなきゃならんな。俺はアジャオ。水餓鬼のアジャオ」

アジャオはそう言っつて長槍を構えた。

「アタシはアルミナ。アルミナ・ラ・シア。じゃあ、行くよ？」

アルミナは右目の眼帯をむしり取り戦利眼を開いた。

そして、ロンリーストライフを構えた。

アジャオは長槍を構えて、隙を伺っていた。

しかし、隙は見出せなかった。

アジャオは長槍を繰り出し、誘いを掛けてみた。

長槍は軽く弾かれて軌道を曲げられた。

アジャオに僅かな隙が出来る。

そこをすかさず、アルミナが剣を振り下ろした。

それをアジャオが避ける。

「この戦利眼から逃れる術は無いよ！」

「そうか、戦利眼を持っているのか」

「！ 戦利眼を知っているのかい？」

「ああ」

その後二人は膠着状態に陥る。

ガンロクとマスクドが睨み合っていた。

ガンロクは三尺半の大銃、相手のマスクドは大振りの鉤爪。

お互いに隙を見出せないでいた。

マスクドが口を開く。

「お前の名は？」

マスクドがガンロクに名を訊いた。

「ガンロクだべ」

「ガンロクと言うのか。俺はナイシー。お前程の腕の持ち主はそうはいない。それはこの睨みあいでも良く分かる。どうだ？ 我等の仲間にならんか？ さすれば、今よりも強くなれるぞ？」

「御免だべ」

「そうか。それは残念」

ナイシーはその言葉が終わると同時に、ガンロクに斬り掛かった。

女のマスクドが鞭を撓らせながら言葉を発し始めた。

「あら、中々美形。私好み。どう？　ボウヤ。私の愛人にならない？」

「済みません。美しい方のお誘いに乗りたいたいのには山々ですが、わたしには大切なお方が御座いますゆえ、そのお方を裏切るわけには参りません」

シユンマも言い返す。

「あら、そう。なら、死になさい。勿体無いけど。最後に名前を覚えて頂戴な」

「シユンマといます。貴女は？」

「キエラ」

「そうですか。では参ります」

アシユマは鬼虎を納刀し腰を落とした。

居合いで勝負を決しようとした。

その佇まいは、ゆらゆらとたなびく、柳の枝のようで、相手には、どこか実体が見えない。

「う……む……」

シシオウは攻めあぐねていた。

隙があるようで、それが無く、実体の無いアシユマは、どこか別世界の住人のように思われた。

（これはいかん。成る程、ザザとロシが破れる筈だ）

シシオウはそう思った。

（しかし、この私の念導境界面が破れるかな？）

シシオウは直刀の二刀を振りかぶって、アシユマに迫った。

アシユマは迷わず刀を抜き、シシオウの胴を撫で斬った。

が、アシユマの鬼虎は、シシオウの念導境界面を通らず、逆に隙を作ってしまった。

シシオウは迷わずアシユマの背に直刀を送り込んだ。が、シシオウの直刀は空を斬った。

間違いなくそこにアシユマの体があるのに。

その直後、背に衝撃が疾る。

アシユマだ。

「秘剣・空蟬……」

アシユマはぼそりと呟いた。

「見事な技だ」

「邪険だがな。が、俺にはそれが相応しいらしい。だが斬れなんだ」

「ふ、未恐ろしい奴。どうだ、我等の仲間にならんか？」

「御免蒙る」

「そうか……では又来る。者供！ 退くぞ！」

「ち！ 退くんかい！」

エヴユが叫ぶ。

「小僧、命拾いしたな。又来るぞ」

「もう来なくて良いぜ」

オルバニアンが叫ぶ。

そしてそれぞれのマスクドも去って行った。

「まるで嵐だな」

オルバニアンが言う。

「全くね」

アルミナが相槌を打つ。

「今日は、顔見せ程度だったって、訳ね」

アシユマ一行は、カオルコを連れてアジトへと帰って行った。

勿論、尾行に気を配って。

オロはいよいよ、ノーツ連邦にまでその魔の手を伸ばしてきた。
ノーツ連邦に対して、経済的圧力を掛けて来た。

ノーツ連邦はすぐさま追い詰められた。

ノーツ連邦内では直ぐに物資が底を付き政情が不安定になった。

かといって、ノリトレアやイーハン、そしてクーロンとは手を結ぶ気は無いらしい。

そして、オロはリスパダハル共和国にも、その手を伸ばしてきた。
リスパダハルの潤沢な地下資源、即ち魔導石をどうしても必要としたからだ。

いよいよオロは世界に対してその手を伸ばしてきた。

第三節 奪回

アルステイーン達はファソーイ家の別邸……と、言っても、民家と変わりないが、その別邸の地下に潜んでいた。

まさに、地下に潜むと言う表現が、的を得ていた。

地下には居住施設があり、かつまた、大規模な軍事施設が有った。アルステイーンはここで反撃のチャンスを窺っていた。

先ずは、ヨナルトを倒し、国政に返り咲く事。

そして、世界各国と、和平交渉をする事。

この二点を目標としていた。

しかし、アルステイーンには、危惧する点があった。

つい先日の奇襲作戦が成功したといっても、今の政府の軍司令部では国力の差も考えずに、遮二無二戦う事ばかりを考えているようだ。

(これではノリトレアは滅んでしまう)

アルステイーンは焦っていた。

アルステイーンはカオルコの脱出を喜んだ。

「兄上……」

「カオルコ……」

「お久しゅう御座います」

「うむ。苦勞をしたようだな」

「いえ。そのような事は……」

実妹である。

喜ばないはずがない。

「姉上。よくぞご無事で……」

シユンマが姉を気遣う。

「有難う。シユンマ」

カオルコが返す。

そして、同時に父であるシヨウマの悲報ももたらされた。

「父上が……」

これには、アルステインも大層悲しい思いをした。

「父上……」

勿論、シユンマも悲しい思いをした。

「シユンマよ。カオルコよ。今は嘆く時ではない。民の為に動く時だ。父上もそう願っているはずだ」

「はい。兄上……」

ある夜、アルステインは、一人、戦装束に身を固め、ファソイ家を後にしようとしていた。

それを親衛隊隊長オフヴが見咎める。

「ア、アルステイン様！ こんな夜更けに、そのような格好で、何処へ御行きになられるのですか！？」

「放せ！ オフヴ！ 余には行かなければならぬ所がある！」

「なりません！ 誰か！ 誰か、アルステイン様をお止め下さい！」

オフヴの声は『邸』内に響き渡る。

外に漏れる事は心配ないが、『邸』内は俄かに騒がしくなる。

「どうした？」

アシユマがその場にやって来る。

「あっ、アシユマ様！ どうかアルステイン様をお止め下さい！ オフヴが叫ぶ。

「アルステイン。どうせ、一人で、王宮に行こうとしているのだろが、それは自殺行為だ。止めておけ」

アシユマが言う。

「止めるな！ このままではノリトレアは滅びる！ そうなる前にヨナルトを止める……」

アルステインが珍しく激昂していた。

「アルステイン。その手の事は俺達がする。お前は王なのだから、後方より指揮を取っていてくれ」

「そんな事は出来ない！ 他人を犠牲にして、その血の上に築いた玉座に等、僕は座れない」

「お前の事だから、そんなことを言うと思ったよ」

「だったら、僕を行かせてくれ！」

「焦るな」

「しかし！」

「今出て行っても、無駄に命を散らすだけだぞ！」

「……………」

「ちゃんと作戦を立てろ！ 動くのは俺達だけで良い。まずは落ち着け」

「……………分かった。済まなかった」

幾ら潜んでいるとはいえ、アジトの維持費等は発生する。

これを、回避する為に、時々散発的に、ノリトレアの軍事基地より物資を盗んできた。

そして、今夜も補給物資を奪う為、王宮市外れの、軍事基地の倉庫を、襲おうといていた。

作戦の企画立案は、アルステインだった。

が、実際には作戦に加わる事は無かった。

そこで、アルステインはこう言った。

「また、僕だけのけ者かい？ いい加減にしておくれよ！」

結局、アルステインは後方に控えて、指揮を取る役に徹する事に。

「市民には被害は及ぼさない事」

これは、アルステインの言葉である。

「アシュマさま気をつけてね？ マスケドがいるんでしょ？ 危ないと思ったら、逃げて帰ってきてね？」

アーチエルがアシュマを気遣う。

「俺だけ？」

アシュマが少し意地悪を言ってみる。

「勿論、他の人も。もう、アシュマさまの意地悪。皆さんもどうかご無事に帰ってきてくださいね？」

皆は頷く。

「シュンマ、無事に帰ってくるのじゃぞ？ 今回わらわ達は作戦に参加出来ないが、心はいつもシュンマと共にあるからな。わかったな」

キュポアがシュンマにそう言う。

「ちゃんと、帰ってきますよ。今まで、ちゃんと帰ってきましたし、これからもちゃんと帰ってきますよ」

シュンマがキュポアに言葉を返す。

「レンヌ。私は……。私はお前を前線に立たせたくはない」
リイナが言う。

「大丈夫だよ。リイナ。僕はちゃんと帰ってきますよ」
レンヌが返す。

「あなた。ちゃんと帰ってきてね。おなかの中の子供の為に」
ビツシュの妻となったフィナ・ノマンがビツシュに言う。

「ああ、分かっているさ。必ず帰ってくる。おなかの子供の為に」
ビツシュがそう言う。

「ガンロクさん。お願い。行かないで……」

アンがガンロクを引き止める。

「大丈夫だべ。おらだけ行かないわけには行かないべ」
ガンロクがアンを抱き寄せる。

「ガンロクさん……」

「ジーク君。必ず戻ってきてね？ 死んじゃ駄目よ！ わかった？ 約束よ？」

「分かってる」

「死んだら一生恨むからね？」

「言ってる事が支離滅裂だぞ？ ミカ」

「好きよ。ジーク君」

「分かってる……」

二人は口付けをした。

皆が皆それぞれの別れをした。

補給物資強奪班が、王宮市外れの、軍事基地に来た。

現場指揮者は、王直属親衛隊隊長のオフヴ。

アシユマ達は、その配下となった。

アシユマが現場指揮者になるかと思いきや、アシユマはオフヴの配下になった。

アシユマは元々一剣士としての才はある。

が、それが現場指揮能力に直結しているかといえば、必ずしもそういう訳ではない。

現場指揮官として才のある者が、部隊を率いる。

それがオフヴと言うわけだ。

合理的な帰結である。

そして、皆、配置に着く。

アシユマとジーク、オルバニアンとアルミナ、レンヌとシュンマ、ガンロクとビツシュ。

そして、一般の兵士達。

オフヴの連絡を待って突入をするところだった。

「よし……そろそろ頃合だな……全班突入！」

各班で壁を爆破したり、鉄格子を切ったりして突入口が出来た。

兵たちが突入していく。

だが、様子がおかしかった。

反撃が全く無かった。

疑問に思いながら、軍基地の中央へ進んでいく。

「オフヴ殿。おかしい。どうも誘われているような気がする」

アシユマが、オフヴに言う。

「アシユマ殿。あなたもそう思うか」

「ああ」

「ここは、撤退したほうが。良さそうですね」

オフヴがそう言う。

その時だった。

「動くな！」

その声が響き渡ったのは。

「しまった！ 罠か！」

オフヴが叫ぶ。

多数の敵兵が、アシユマ達を取り囲む。

そして彼らが現れる。

「一瞥以来だなアシユマ」

「シシオウ……クロダの六人衆か！」

「如何にも」

「クロダの六人衆はノリトレアのマスクドなのか？」

「少し違うな。元々はイーハンの出自よ。おっと喋りすぎだな。さ

て、ここらで死んでもらうとするか」

そう言っつて、シシオウは手を上げた。

合図を受けて、敵兵が雪崩を打って、攻めて来た。

アシユマは敵兵とて、元は同じノリトレアの兵、それを傷付けた

なく、鬼虎を峰に返し、ばしりばしりと打ち据え始めた。

「流石は鬼を持つもの。他の者とは一枚も二枚も腕が違う」

シシオウがアシユマに、向けて言葉を発した。

「……」

アシユマは無言を決める。

「では、この間の遺恨、晴らさせて貰おうか」
シシオウが、アシユマに斬り掛かる。

他のマスケドも、それぞれ前回因縁のあった者に、斬り掛かって行く。

シシオウが、アシユマに、上から直刀を打ち下ろす。

アシユマはそれを紙一重でかわし、鬼虎を車に回す。

それをシシオウがもう片方の直刀で凌ぐ。

そう、シシオウは、直刀の二刀を操っているのだ。

動きを止められたアシユマに、シシオウの直刀が、頭上から見舞われる。

アシユマは少し下がり、寸余の見切りでそれをかわす。

「一寸の見切りか。達人でも中々出来ない事だぞ？ それは。この時代に蘇って、良かったぞ！ このような好敵手にめぐり合えるとはな！」

「そうか。『ありがたき幸せ』、とでも言えば良いのか？」

アシユマが揶揄する。

「そうよ！ そういうことよ！」

シシオウが二刀で左右の袈裟から斬り掛かってきた。

アシユマは尚もそれを避け、その間に素早く納刀する。

アシユマの周りでは、もう、乱戦模様だ。敵味方入り混じって、

斬り合いをしている。

だが、流石にアルステインの親衛隊で構成された者達だ。

数で圧して来た敵兵を、モノともせず、圧倒し始めた。

いままで、直刀を振り回してきたシシオウもその動きを止めた。

アシユマのその佇まいに、隙を見出すことが出来なかったからである。

下手には動けない。

「むう……」

シシオウは唸った。

間合いは十分に取られていた。

だが、シシオウは攻めあぐねていた。
その時だった。

「アシユマは不意に跳ぶ様に間合いを詰め、鬼虎を横に薙いで来た。
「！！！」

シシオウは虚を突かれ驚いた。

その攻撃を何とか凌いだのも、シシオウも非凡な腕の持ち主であることを、示していた。

「アシユマ殿大丈夫か!?」
オフヴが尋ねる。

「大丈夫だが、手が離せん！」

「撤退します！ 大丈夫ですか？」

「俺は構わん。他の奴らに聞いてくれ」

「皆、大丈夫です。後はアシユマ殿だけです」

「そうか。分かった！」

アシユマは隙を見せずに後ろへはね跳んだ。

「！ 逃げるか、アシユマ！」

シシオウが叫ぶ。

「勝負は預ける！ シシオウ！」

アシユマは徐々に後退り、そして走り去った。

「シシオウ。お前も仕留めし切れなかったか」

「お前もか。エヴユ」

「ああ。他の者もそうだ。奴ら普通の人間のくせして戦闘能力が物凄く高い。始末に終えないぜ、全く」

「そうか……」

アシユマ達は上手く脱出した。

この事態は、ノリトレアのヨナルト・リングが、テロリストとして非難をした。

それに対して、アルステイン王は、

「クーデターを起こして、不当な政権を取った者に、言われる筋合いは無い」

と、声明を出した。

が、アルステイーンは苦悩した。

あながち間違いでは、ないのである。

同じ国民、同じ民族、同胞はらからなのである。

それが、血を流しあう。

これ程悲しい事があるうか。

アルステイーンは、これからの戦略を考えさせられた。

「アルステイーン、もう、圧して出るしかない！」

オルバニアンが作戦会議の場で叫ぶ。

「待っていたって、ジリ貧だ！ アルステイーン、ここはもう動かない！！」

「……………」

アルステイーンは黙ったままだ。

「アルステイーン！！」

「オルバニアン、少し黙りさい」

「これが黙っていられるか！！」

「黙りなさい。いま、考え中です」

「アルステイーン！」

「まで、オルバニアン。我等の暴発…………それが敵の手筋かも知れん。それに乗るわけにいくまい？」

アシュマが口を挟む。

「…………うん。敢えてその手に乗ってみるのも面白いかもしれませぬね？」

アルステイーンが何か閃いたようだ。

「では、今、戦いの狼煙を上げると？」

アシュマが訊く。

「そういうことですね。今はまだ僕達には少し余裕がある。それは敵も知っているでしょう。今、暴発するとは敵も考えません」

「成る程。上手くすれば、敵の裏をかけるかも知れないと？」

「ええ。ファソーイ公、今動かせる兵は幾つありますか？」

「はっ。我が軍魔導機兵七百、歩兵、二千五百。ミフシーヨ公の魔導機兵五百、歩兵、二千……」

……………

「魔導機兵八千に、剣士が三万二千人、兵士が約六万か。これは以前と変わらん」

「は」

「ただ現地戦力が魔導機兵二千に剣士が約八千。これも以前と変わらず……。そしてヨナルトの戦力と言えば魔導機兵三万二千……」

「はあ」

「さて。これでどのような作戦を立てるか……」

「アルステーン様……」

ファソーイ公は言葉を失いアルステーンを見る。

「陽動を掛けてみます」

アルステーンはぼそりと呟く。

「陽動？」

オルバニアンが聞き返す。

そしてアルステーンが口を開く。

「地方戦力を一箇所に集めて、王宮市を攻めるように見せかけます。敵兵の注意をそちらに逸らすわけですね。そして敵兵が居なくなつた所で……」

「成る程、そこで奇襲をかけるわけだ」

「そう言う事　さて、その上で細かい段取りですが……」

その夜。

ノリトレアの各地で反乱が起こった。

それらは一箇所に集まる気配を示し、その後、王宮市を目指すと
思われた。

王宮では、ヨナルト・リングが起きだし発令所に出向く。

「どうなっておる?」

「はっ。地方の各有力貴族が反乱を起こしまして、今一箇所に集結
中です」

側近がそう答える。

「ここに向かってくるな」

「は?」

「魔導機兵二万五千を以つてこれを討伐せよ!」

「はっ!」

魔導機兵は直接、敵地方部隊を目指して飛んだ。

「二万五千か……。少々少ないな」

アルステインが呟く。

「ここはアシユマ君の出番かな?」

その言葉を聞いたアーチエルが、

「アシユマさまですと、敵を全滅に追い込んでしまいます。明らか
に、大量殺戮になります。何とかしていただければ……」

と、言う。

「はあ。仕方ないですね。電撃作戦と行きますか。各部隊に通達。

これから所定の位置を速やかに抑えよ。行動開始!」

「了解。各部隊は……」

オペレーターが復唱し命令を伝えていく。

「さて、私も行きますか」

「アルステイン様も行きますので?」

アーチエルが驚く。

「アーチエル様も出るのに、私がつうつと、椅子に座っている訳
には、行きませんかからね」

「まあ！」

アシユマとアルステイン、エファール、ガンロクは王宮へ。
オルバニアンとアルミナは防衛省。

レン又は国营放送局。

シュンマは内務省。

ジークは外務省。

ビッシュは警視庁。

皆、兵を引き連れて、国の要所要所を押さえていく。

各魔導機兵も割り振りをされて、各要所の抑えに回った。

アーチェル、ミカ、キュポア、リイナは後方に回り、負傷兵の手当ての用意をしていた。

アシユマ達は兵を引き連れて王宮の正門へとやって来た。

正門には衛兵が居る。

「アシユマ君。あれを何とかしないとイケませんね」

アルステインが言う。

「任せろ」

アシユマが返す。

アシユマはゆっくりと正門に近付いて行った。

そして姿が闇夜に溶けていく。

「朧霞だ……」

アルステインが呟く。

正門ではアシユマが消えたその姿で、ばしりばしりと倒していく。
アシユマの姿が不意に現れ手招きをする。

アルステインを始め兵達が正門の中へ入っていく。

今回の作戦は迅速を以って旨とするので、皆、雪崩を打って王宮に攻め入っていく。

その先頭を切るのはアシユマである。
出てくる敵をことごとく倒していく。

「ヨナルト様！ 王宮内に敵多数。真っ直ぐこの発令所を目指して、向かってきます」

オペレーターが言う。

「何！？ 何故そんな事態になった!?!」

ヨナルトが驚く。

「わ、分かりません」

「王宮市内各地で、敵勢力が蜂起！ 国营放送局、内務省、外務省、防衛省、警視庁等、各要所が攻め落とされています」

別のオペレーターが、悲鳴を上げる。

「何？ 何故こうも、あつさりと落とされる?」

「どうやら、この蜂起を歓迎している、向きがあるようです」

「ぐぬぬ……」

ここに、いかにヨナルトのクーデターが、国民に支持されていないか、この面からも分かる。

「ワシは脱出する」

「は、はい?」

「まずはワシの護衛隊を呼び、脱出路を確保。脱出用サイコ・フレイヤーまで、ワシを誘導！ その間の時間は稼げよ！」

「は、はっ!」

「おのれアルステイン……地方蜂起は囷だったか！ こんな時にクロダの六人衆が居ないとは！ 何を考えておるのだ、シユニク殿は!」

ヨナルト・リングは、アシユマ達の追及の手を逃れて、逃げ去った。

「逃げ足の速い奴……」

アルステインが呟く。

「あら、それは人の事言えないんじゃない？ ダストモンキーさん？」

エファールが揶揄する。

「やだなあ。エファさん」

「あら、ホントの事じゃない？」

「たはは」

この数日間のクーデター劇は早くも崩れ去った。

アルステイーンは改めて、政権を奪取することに成功した。

早速アルステイーンは議会を開き、その場で声明を発表。

王政を国政から切り離す事とした。

ただし、王制は残す。

そして、議院内閣制は存続する。

その為の憲法も改正する。

国内外の政情が安定してから総選挙を行うと発表。

ただし、それまでは緊急の措置としてアルステイーンが国政をになう事も発表。

なう事も発表。

各大臣をアルステイーンが任命していく。

首相も任命した。

悪く言えば、アルステイーンの、傀儡政権だとも言える。

幸いな事に、国民は、アルステイーンの復権を、喜んでいる。

それだけは、不幸中の幸いだった。

「オロ・エバス国との戦端は開かれてしまったが、何とか打開の道を探って欲しい」

アルステイーンがロンギ・ターフリ首相に言った言葉である。

ノリトレアは何とか和平交渉を進めるべくあらゆる手を尽くした。

だが、オロ・エバス国、オロの言葉は……

「聞く耳を持たず。攻撃あるのみ」
だった。

加えてオロ・エバス国と西方州連合側は無条件降伏を迫ってくる。

これを飲んでしまうわけには行かない。

降伏すれば七賢人の息の掛かった各国軍隊が祖国の土を踏みにするようにやってくるだろう。

それだけは避けねばならなかった。

詰まる所、有利な条件で、戦争を終わらせられるよう、戦いを続けねばならなかった。

そして、それを終らせなければならなかった。

それは非常に困難な事であり、難しい事であった。
が、やらなければ、ならなかった。

和平交渉は引き続き暗中模索のまま続けられた。

リン・シャオリン率いるクーロン共和国政府は、今回のアルステインによる、政権奪回を好感し、ロンギ政権に接触を図ってきた。リンはノリトレアと軍事同盟を結ぶ為、使者をノリトレアに送ってきた。

ダ・アヒ外務次官の来訪である。

そしてロンギ・ターフリ首相との会談を持った。

後日、ダ・アヒ外務次官とロンギ・ターフリ首相は、

「ノリトレア王国、クーロン共和国は本日同盟関係に相成った」と発表。

正式に軍事同盟を結んだ。

その後、ダ・アヒ外務次官はアルステインとも会食。

その際に出た言葉が、

「これですます世界からは敵視されますね」
とは、アルステイン。

「は、はは……」

苦笑するダ・アヒ外務次官。

「しかし、これで良かったのかも知れませんね」

ロンギ首相は、

「ノリトレアは、現政権のイーハンとは軍事同盟を破棄する」と、一方的に通達。

イーハン国はこれに反発。

すぐさま、ノリトレアに対して宣戦を布告する。

しかし……。

「兄上。では、行って参ります」

シユンマが意気込む。

「あんまり、気負い込まぬよう。でないと失敗しますよ?」

アルステイーンがシユンマを諭す。

「ですが……」

「まあ、気持ちは分かります。行ってらっしゃい。魔導機兵二万を貸し与えましょう。これでシユニク・インジャを討伐してらっしゃい」

「はい!」

シユンマは、アルステイーンに魔導機兵二万を貸し与えられて、シユニク・インジャに反旗を翻した。

勿論、アシユマ達も一緒である。

「宜しくな。シユンマ」

アシユマがシユンマの肩を軽く叩く。

「わらわも一緒に行くぞえ。大船に乗った気で行くがよい」
キュポアもシユンマの肩を叩く。

「アシユマさん……キュポアさん……」

シユンマは感無量となった。

「さあ、行こうか」

アシユマが言う。

「はい！」

シユンマが応える。

そう、シユンマ・イーハニア王子が、クーデター政権に反旗を翻したのだ。

慌てたのはヨナルト・リングである。

アシユマ達が自分を追いかけて来たものと思ったからである。

サイコ・フライヤー青龍号に、魔導機兵二万がノリトレアとイーハンの国境を越えた。

迎えるはイーハンの魔導機兵二万二千。

数では互角である。

しかし、こちらには最終兵器、鬼虎を持つアシユマ・アトーが居る。

アーチエルへの必死の説得の後、アシユマはその力を行使する許しを得て、ゴンドラの上に乗った。

何故アシユマが、アーチエルへ説得を行ったかと言うと、極端なまでの平和主義であるアーチエルを前に、アシユマのその能力の^{ちから}行使を許されるが為である。

ともすれば、アシユマの能力は一人で敵艦隊を全滅させかねないそれはアーチエルにしてみればオーバーキル以上の何者でもない様に見えたのだ。

アシユマはイーハンの魔導機兵の前に立ちただかり鯉口を切った。その鯉口から眩い光りが漏れ出している。

アシユマは居合い腰に落とし一気に水平に鬼虎を引き抜いた。無数の光の条が魔導機兵に向かっていく。

が、その光の条は艦隊の直前で弾かれてしまった。

「！」

アシユマは驚いた。

こんな事は、神人が、アヘイビアの艦隊を守ったとき以来だからである。

こんな事が出来るのは他には、マスクドぐらいなモノである。

(クロダの六人衆か?)

アシユマは心の中で呟く。

「アシユマは居るか!?!」

誰かがアシユマの名を呼ぶ。

「その声はシシオウか!?!」

アシユマが叫ぶ。

「如何にも」

「俺の攻撃を弾いたのも、お前か!?!」

「如何にも。さあ、アシユマ。いざ戦わん!」

「今は、貴様に構っている暇は無い。次の機会にしてくれ」

「何を馬鹿な事を……」

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黑

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

ウイング!」

アシユマはウイングを唱えた。

「今は一人にしてくれ」

「どこに行く!?! アシユマよ」

「貴様の念導境界面を抜けて、魔導機兵を落す」

「無駄だな」

「何?」

「念導境界面を張っているのは我だけではないと言っ事よ」

「くっ！」

アシユマは唇を咬む

「飛べるのは、アシユマ一人だけか？」

シシオウが訊く。

「そうだが？」

アシユマが言う。

「ち！ 楽しめるのはシシオウ一人かい！」

キエラが言う。

「どういうことだ？」

アシユマが訊く。

「つまりは『飛ぶ』こともできない奴を倒しても、なんの称号も得られないってことさ」

「貴様らの『趣味』に付き合うつつもりはない」

「しゅ、『趣味』だと！？ 貴様！！ 我等の名誉を馬鹿にするかあ！！」

「くだらん！」

「おのれ！ そこへ直れ！ 叩き斬ってやらん！！」

「さてよ、キエラ。シシオウが居る限り、シシオウの獲物はアシユマだぜ」

エヴユが言う。

「俺は獲物なのか」

アシユマが言う。

「そうだ」

シシオウが言う。

「そんなものは御免蒙る」

「我と戦え、アシユマ・アトー！！」

「俺はこれでも忙しい」

「いくぞ！ いざ！」

「せっかちな奴」

アシユマは素早く納刀し、居合いの形を取った。

対するシシオウも何と、居合いの形を取った。

アシユマとシシオウの眼下では、魔導機兵が戦っていた。

「行くぞ!!!」

先に動いたのはシシオウだった。

アシユマは静かに佇んでいるだけだった。

そして、ゆっくり、ゆっくり動き出す。

だが実際には物凄いスピードだった。

動きが余りにも滑らかだった為ゆっくりに見えたのである。

先に抜いたのはシシオウである。

だが、抜いてからの刀速はアシユマの方が上だった。

アシユマはその閃光のごとき太刀筋で何とシシオウの右手首を刎

ね斬った。

「くっ!」

シシオウは右手首を押さえ、

「『天餓鬼』よ、汝の主が命ずる。汝の主の危難に際し、汝の力を

以って汝の主を癒すべし」

シシオウは千切れた右手が癒された。

「今回は私の負けだ。今回はこのまま帰る」

「シシオウ! それではマスターの命が果たせなくなる!」

エウユが叫ぶ。

「我がアシユマに勝てんでは、意味がない」

「では、去れ」

アシユマが言う。

「貴様も去ることになりそうだぞ?」

魔導機兵の戦いでは双方とも消耗戦の呈をあらわしていた。

「これはいかん」

アシユマは青龍号に立ち戻る。

「我らも帰るとするか」

シシオウが言った。

シユンマは泣く泣くノリトレアに戻り、祖国を奪還する事が敵わなかった。

キュポアがシユンマを慰めた。

「駄目だ。僕は。用兵の才能がない。せめて兄上かルー・ウィロン様位用兵が巧みなら、今頃は本殿本丸を落として、シュニク・インジャを追い詰められたものを」

「あれは誰がやっても、消耗戦にしかならんよ」

と、言ったのは、何と噂の人物ルー・ウィロンだった。

「ルー・ウィロン……！」

ルー・ウィロンは、油くさい青龍号の格納庫で、シユンマとキュポアで、二人で居る所へ、ひよっこりと現れた。

「お、おぬし……」

「オツと邪魔だったかな？ ま、老人の独り言だ。あれは仮にワシが戦っても同じ結果にしかならなかったろう」

「ルー・ウィロン……」

「ではな」

ルー・ウィロンは手をひらひらとさせ、格納庫から出て行った。

「あー、もう！ わらわがシユンマを慰めて、ポイントを挙げようと思ったのに！」

「いいえ。キュポアさん。あなたが居てくれて良かったです」

「少しくらいなら、甘えてもいいぞ」

「では、お言葉に甘えて」

シユンマはゆっくりとキュポアに抱きついた。

「それにしても、あの親父、何処から湧いて出たんじゃ？ 一体今まで何処に……？」

キュポアはそう呟いてみせる。

アルステーションはクーロンに魔導機兵用のステルス技術を提供し

た。

技術協力、技術提携、とか言う奴である。

勿論、見返りに、大量生産の暁には、ノリトレアの危機に際して無条件に救援に来てくれる事を約束させた。

約束させたと言うと語弊があるが、要は、

「危なくなつたら、助けに来てね」

と言う、アルステインのいつもの言葉である。

お茶目と言えばお茶目である。

それはアルステインと、リン・シャオリンの仲だから、出来る芸当でもあった。

勿論、暗にアシュマを、一晩自分の褥おんこに呼びつけることも、話し合われたが、そちらの方の合意は、どうなったかは定かではない。

それから、クーロンの軍需工場はフル稼働だ。

ラインの総取替えも加わって、正にクーロンの軍需工場は、蜂の巣を突付いたような騒ぎになった。

この事態を、オロ・エバス軍が、聞きつけられない訳が無い。

アルステインはそう認識した。

そこで、アルステインはアベニ・ローを呼んだ。

「若。何で御座るかな？」

「ああ、爺。オロ・エバス国に行ってくれないかな？」

「それは構わんで御座るが……」

「『御座るが』？ もう忍びとしては限界か？」

「誰がそんな事を！ ワシはまだまだ現役ですぞい！」

「もう、寄る年波には敵わないんだから」

「何を申す！ 若！」

「そろそろ現役をムラサキに渡したら？」

「何の！ 子娘ごときに後れを取るアベニでは御座いませんぞ？」

「わかった。わかった。じゃあ、爺に頼むよ。でも、ムラサキは使

うんだろ？」

「それはそれで御座る」

「では、オロ・エバス国の動向を……」

クーロンの軍需工場を狙って、オロ・エバス国軍と西方州連合軍の連合軍……以下これを連合軍と呼ぶ……が侵攻してきた。

先ずは、お得意のミサイル空爆だ。

巡航ミサイルでピンポイントに狙いを定めてくる。

その攻撃にレーザーのような正確さで反撃をする者が居た。

アシユマである。

アシユマは、これには苦勞をした。

アシユマは機械では無いのである。

例えば相手が、念導境界面を張る……即ち、念なり気なりを発するものであれば念じるだけで、アシユマの気弾の攻撃は当り易いのである。

だが、相手は只のミサイル。

念も気も発しない。

それを狙って、何発も当てるのである。

かなり気が消耗した。

しかし、何故アシユマが居るのか？

それは、アルステインが予め、それを察知していたからである。

その情報源は、勿論アベニ爺から、もたらされたものであった。

次にきたのは、魔導機兵の大群である。

荷物に爆弾を山と抱えている。

しかし、それを阻止せんが為、ノリトレアの部隊がやって来た。

勿論クーロンの魔導機兵もやってくる。

指揮をするのは『あの』ルー・ウィロンだ。

大群だ。

クーロン・ノリトレア軍は、爆弾を落とされる前に攻撃を始めた。

連合軍の魔導機兵の動きは鈍い。

次々と魔導機兵が落とされていく。

勿論、爆弾を抱えているので誘爆が酷い。

連合軍の魔導機兵は一発も爆弾を落さないまま帰投して行った。

何故、爆弾を落さなかったのか？

それは、そこが爆撃ポイントではないからだ。

クーロン・ノリトレア軍は追い討ちを掛けるべく、帰投して行った軍を追いかけて、敵の艦隊へとたどり着いた。

かなりの大艦隊だ。

しかしこちらでも大勢力。

連合軍が反撃の為魔導機兵を投入して来た。

そこへ到着する、クーロン・ノリトレア統合軍艦隊。

以下これを統合軍と呼ぶことにする。

乱戦模様になる。

そこへ投入される、アシュマ。

敵の気を察知して、気弾を放とうと言うものだ。

こちらのほうが、先程よりもはるかに楽で良い。

と、行っても、この万を超える敵味方の中から敵の気だけを察知して攻撃するのだから、その気の消耗と言うものは計り知れない。

ただ、アシュマの場合、気の変わりに平行宇宙からエネルギーを補給できる。

なので、アシュマは気の補給が容易だ。

主に相手は魔導機兵だ。

アシュマは鬼虎に気を集め始めた。

「アシュマ！ 待たれよ！」

そう言い、そこに現れたのは、ウフェイトウ率いるマスクド、エルファの騎士団である。

「邪魔をするな」

「お主にそれを放たれると、少々厄介な事になるぞ」

「それはそちらの都合。俺は放つぞ？」

「放つても良いが、意味は無いぞ？」

「お前と言い、シシオウと言い、どうしてこう……」

「ほう？ シシオウか。クロダの六人衆、蘇っていたか」

「もう、五人衆だな」

「それをやってのけたのは、貴様が、アシユマ」

「一応そういうことになるな」

「他の者はどうした。貴様みたいに飛べないのか？」

「ああ」

「ああ、情けなや。そんな奴らが我らの敵とは」

サイファイが嘆く。

「なあ、ウフェイトウ、アシユマと勝負させてはくれぬか？」

サイファイ直々にウフェイトウに懇願する。

「アシユマは強敵だぞ？ 我とて、手を出せなんだ。お前程度の腕ではアシユマの足元にも及ばん」

「なんといいい様。それは無かるう？ 頼む。アシユマと手合わせをさせてくれ」

「しかし……」

「頼む」

「死ぬぞ？」

「それも本望」

「ならば良かるう」

「兄者！」

何と、ワラシーが叫ぶ。

サイファイとワラシーは兄弟のようだ。

「兄者、それは無かるう！ 死ぬかも知れんのだぞ？」

「怖気づいたか、ワラシー。それもマスクドの本懐と知れ」

「しかし」

「話中すまんが、早くしてくれ。俺はこれでも忙しい」

アシユマが、気だるそうに言う。

「わかった。アシユマ、手合わせ願おう」

サイファイが言う。

そして大小の刀を抜き放った。

それに対してアシュマは、居合いの形を取る。

二人は空中で対峙した。

アシュマは秘剣・流星を使った。

サイファイは、

(これは……)

と、思った。

どう動いても斬られそうだと、思ったのである。

(ウフェイトウが一目置くわけだ)

とも思った。

アシュマは佇んだままだ。

「行くぞ！」

サイファイが、アシュマに二刀を左右に回しながら、アシュマに襲い掛かってきた。

アシュマは臆しもせずに、前にすべりた。

そして、秘剣・流星の名に恥じぬ、煌く光芒の中で、鞘から刀身が走り、サイファイの腹を存分に薙ぎ斬った。

そして二人は振り向く。

その際に、アシュマは振り向きざま、サイファイの首を切り落とした。

一瞬の早業だった。

(まさか、アシュマがここまでの腕とは……)

ウフェイトウは内心驚愕した。

連合軍の艦隊が引き上げていく。

それを見てウフェイトウが言う。

「アシュマ。これでは気が済まん。付き合え。お前の仲間と共に付いて来い」

「断わる」

「何だと？」

「何処に、自分の仲間が危険に晒されるのに、そんな目に合わせる馬鹿が何処に居る？」

その時、魔導機兵が二機近付いてきた。

『アシユマ！ 付き合っても良いぜ！』

オルバニアンの声だ。

『アシユマ！ アタシも良いわよ！』

こちらはアルミナの声だ。

「お前らには関係ない！ 来るな！！」

アシユマは叫んだ！

『関係なくは無いだろう？』

オルバニアンは、魔導機兵を地上に降ろしながら、拡声器で訴えてきた。

幸いにして艦隊戦は、統合軍艦隊が押しているようだ。

かなり優勢みたいだ。

続いて、アルミナも地上に降りてきた。

「お前らに敵う相手では無いぞ！？」

アシユマは叫びっぱなしだ。

「そんな事やって見なけりや、分かんねえだろう？」

オルバニアンが魔導機兵から降りてきた。

腰には逸鉄を佩びている。

アルミナも続いてきた。

アシユマも仕方なく地上に降りた。

「こんな空も飛べない奴らに……」

ウシャトウは、しぶしぶオルバニアンらに付き従って、地上に降りてきた。

マスクド達もそれに続く。

「確かあの男は俺の獲物だったな？」

マスクドのウシャトウが言う。

ウシャトウはエルファの騎士団の団長ウフェイトウの弟だ。

舎弟格なのか、実弟なのかは分からない。

「じゃあ、あの女は私の獲物ね」

「マールと呼ばれる女が言う。」

周りにいる者はニヤニヤ薄笑いを浮かべながら、その光景を眺めているばかりである。

「オルバン……」

アシユマがそう言いかけると、

「アシユマ、貴様の相手はこの俺だ」

ウフェイトウがアシユマの前に立ちはだかる。

「……ウフェイトウ」

アシユマは仕方なく構えをとる。

裏・閃光一刀・崩しの構えだ。

「ほう。その様な構えをとるか」

一方オルバンとアルミナはお互いを呼び合った。

「いくぜ。相棒」

「ほいな。相棒」

オルバンとアルミナはお互いを呼び合った。

その言葉が呼び水となってウシャトウとマールが飛び出した。

「紛う事なき汝らの」

「紛う事なき汝らの」

「誓いたてたる信条は」

「誓いたてたる信条は」

「天の神に伝わりたもう」

「天の神に伝わりたもう」

「悪鬼に対する天罰の」

「悪鬼に対する天罰の」

「怒りをそこに打ち秘めん」

「怒りをそこに打ち秘めん」

「聖なる光よ剣とならん」

「聖なる光よ剣とならん」

「マジックブレイド！」

「マジックブレイド！」

二人は同時にマジックブレイドを唱えた。

「マジックブレイドだと？ まさか？」

その呪文にウシャトウは怯んだ。

呪文の威力は知っているようだ。

まさか、こんな奴等が、マジックブレイドを使ってくるなんて、思ってもみなかったろう。

そこに隙が出来た。

オルバニアンはその隙を、見逃さなかった。

オルバニアン大得意の大上段の構えから一気に刀を振り下ろした。恐怖から、ウシャトウは剣を頭上に掲げて防御する。

が、オルバニアンの逸鉄は、ウシャトウの剣を叩き折って尚、ウシャトウの頭蓋を斬り割った。

頭蓋を縦に割り切られれば、たとえマスクドと言えども、自分を癒す言葉は発せないであろう。

「ウ、ウシャトウ！！」

ウフエイトウとマールールは同時に叫んだ。

まるで、アルミナの存在を忘れたかのように。

それは、マスクドにとつて、ありえない光景だった。

たった一人の人間が、マスクドを倒したのだ。

そこに油断と隙が出来た。

その時、一瞬の隙を突いて、アルミナのロンリーストライフがマールールの頭蓋を横に斬り割った。

マールールは脳漿のうじょうを撒き散らしながら倒れた。

「マールール！」

これは、その場を見ていた、他のマスクドの悲鳴だ。

オルバニアンとアルミナは、体力を使い果たして、その場にへた

り込んだ。

「ウフェイトウ！ コイツは俺にやらしてくれ！」

「いや、俺だ！」

「じゃあ、この女は俺にやらしてくれ！」

次々と名乗りを上げるマスクド達。

「そうはさせん！」

アシユマが前に立ちはだかる。

「おのれは何処を見ている？」

ウフェイトウが横一文字に斬ってきた。

アシユマはその攻撃を一寸の見切りで避ける。

ウフェイトウに隙ができる。

が、アシユマはそれを無視した。

今は周りのマスクド達に気を張っていた。

勿論、ウフェイトウに対してでもある。

「……仕方ない。者供、今回は我々の完敗だ。退くぞ」

ウフェイトウの言葉である。

「ウフェイトウ！」

ナトイゲフルが声をあげる。

「団長の命令は絶対である！」

ウフェイトウが断じる。

声をあげる者が居なくなった。

「では、また再戦の時まで」

「二度と来るな」

アシユマが言う。

「それは無理だ」

「無理か」

「無理だ」

「……………」

アシユマは沈黙を守った。

「では退散する。者供、行くぞ！」

皆、ウィングを唱えて飛んで去っていく。

「大丈夫か二人とも」

アシュマが言う。

「ああ。へろへろだがな」

オルバニアンが息も絶え絶えに言う。

「待っている。今、気を注入してやる」

アシュマは親指、人差し指、そして中指で形を作ると淡い光がそこに溜まる。

その気の塊をオルバニアン、アルミナの順に注入して行った。

「無茶な事を」

アシュマは二人に言う。

「……だが……良くやった」

アシュマが続けて言った。

「へへへ〜」

二人はにんまりする。

「さあ。帰ろう」

「ああ」

「うん」

統合軍艦隊は連合軍艦隊の追撃に入っているようだ。

三人は青龍号に帰って行った。

今回の対戦は統合軍が、連合軍に大勝した。

と、言う事は（当たり前だが）連合軍が、統合軍に大敗北を喫した事になる。

オロの館では、七賢人が膝詰め談判をするが如く、オロに話を聞きに来た。

「オロ殿。今回の戦はどうした事かな？」

七賢人の一人が詰め寄る。

「『どうした』とは？」

オロが訊く。

「我が軍の大敗の事である」

「責任は誰が取るのかな？」

「それよりも、この大敗の原因は何なのだ？」

「わかった、わかった。全て私が悪いのだろうか？ そう言いたければそう言え」

オロが辟易して言う。

「いや、そうは言っておらぬ」

「次に勝つにはどうしたらよいのかを、訊いておる」

「そうか。それには、アルステインと、ルー・ウィロンが、死ぬ事が大前提だがな」

オロは冗談のつもりでそういった。

「そうか。なら、マスケドにそう命令するが良い。必ずやその二名を倒してくるであろう」

「そうか。そういう手もあったか」

オロは感心して言う。

「まあ、それはそれとして、今回は小手調べ。大体の実力はわかった」

オロは続けて言う。

「なんと、そう言うか」

「ああ。言った。早く艦隊を再建して魔導機兵を補充しなければな」

「よし。我らも力を貸そうぞ。はよう、世界を平らげてくれ」

「分かった。安心せよ」

「ノリトレアに出向いて、アルステインとルー・ウィロンを暗殺してくるのだ」

オロはウフェイトウにそう言った。

だが、ウフェイトウは、あまり乗り気でない。

「どうした？ ウフェイトウ」

オロは乗り気では無い理由を訊こうとする。

「アシユマです。マイマスター。」

「アシユマ？ アシユマがどうかしたのか？」

「アシユマが強いのです」

「そんな事は当たり前だ。甘ったれた事を言うな」

「そういつつもりは無いが、アシユマは強い。強すぎる。奴は『鬼』を持つものとしては最強の部類に入るでしょう」

「そんな事も分かっている。だが、『鬼』を持つものに対しての、天敵たる存在がマスケドではなかったのか？」

「だが、マイマスター。奴は気弾を使ってくる」

「お主等も使えばよいではないか？」

「マスターよ。気弾は、我らは使えんだ。と、言うより気弾を使える者の方が、珍しいのだ。過去の大戦でも使えるものは、ほんの一握りだった」

「ふーむ。それでは使えんでは無いか」

「申し訳なく思っております。その代わりに魔法ならば使えます」

「魔法等スコラに通っている小僧、小娘でも使えるぞ？ 意味はな

さん

「……………」

「何とかならんか」

「マイ・マスター。私はアシユマと戦って見て、アシユマは並々ならぬ相手と見ました」

「少し、甘いのではないのか？ ウフエイトウ」

「そうかもしれない。アシユマを倒す為には、全員で掛からなければ駄目かもしれない」

「今頃、そんな事を言っているのか？ だから甘いといっているのだ」

「いざとなれば、マイ・マスター、艦隊と別行動を取らなければならぬかもしれない」

「当たり前だ。アシユマを何とかしなければ、我々の勝利は無い。」

全く手ぬるい」

アルステイーンの執務室。

シュンマがアルステイーンの前に居る。

「兄上、そろそろ祖国の民の事が、気になります。シュニクが国民を苦しめているかと思うと……」

シュンマがアルステイーンに相談を持ちかけた。

「焦るな……と、言う方が無理ですかね。確かにそろそろ、シュニクやヨナルトを討伐しないとイケませんね」

「兄上！ それでは……」

「うむ。兵を出しましょう。今回はクーロンの艦隊も手伝ってくれ
るのであるうから、以前よりは、楽な戦いが出来るでしょう。それに
今回は、あの親父が出張ってくるであろうから、頭を悩ます事は無
いと思いますよ?」

「あの親父?」

「ルー・ウィロンですよ」

「ああ……」

「はつくしよい!!」

ルー・ウィロンはくしゃみをした。

「どうしたい? オツちゃん」

オルバニアンだ。

アルミナと一緒に、ルー・ウィロンとサケを飲み交わしていた。

「大丈夫? ルーさん」

アルミナがルー・ウィロンに訊いた。

「うむ。また、誰かが噂をしているような……」

再びアルステイーンの執務室。

「でも作戦は練らないと、いけないかも知れないですね」
アルステイーンが言う。

「そうですね。前は正面から行き過ぎました。アシユマ様にも、頼りにすぎっていました」

シユンマが言う。

「成る程。今回は大丈夫だと思いますよ。用兵の天才ですからね。
ルー・ウィロンは」

アルステイーンが返事を返す。

「何が『今回は大丈夫』だ」

そこに現れたのは、ルー・ウィロンだ。

「げ！ ルーオツちゃん」

「何が、『げ！』だ。何が。やっぱりワシの噂をしておったか！

このペテン師め！」

「やだなあ。ペテン師だなんて」

「で、何の話をしている？」

「イーハンを攻略する話ですね」

「イーハンか。うむ。正面から行っては行かん。何とか各個撃破に持ち込まないと。あれを持ち出すか」

「『あれ』？」

シユンマが頭を捻る。

「そう。あれで敵を四つに分断する。アシユマ殿が居れば尚更なの
じやが、敵のマスクドがどう動くかわからんからの。あまり当てに
は出来ん」

「そうですね」

アルステイーンが頷く。

「では、早速動くことにしましょう。『陛下』」

「あ、難しい注文だけれど、なるべく敵の艦は落さないで。敵の旗
艦だけを狙って。イーハンの艦隊は丸々こちらの陣営に組み込みた
いから」

「出来る限り頑張ってみましょう？」

そして、クーロン、ノリトレア統合軍艦隊が出撃していく。空中要塞、イボラス、ビニラ、ビムラーの三要塞を引き連れて。その空中要塞だが、改修工事が行われていた。

脚の遅さを改良した。今まで、余りにも遅すぎたのはある意味、致命的になることもあった。

しかし、脚を速くしたといっても艦隊に付いて行くだけの速さは無い。

艦隊のほう要塞の方に脚を合わせた。

イーハンの警戒ラインに手が届く距離になってきた。艦隊の隊形を整える。

統合軍艦隊の最前線に要塞を並べて、統合軍艦隊自体は錐の隊形を取った。

イーハンは横一文字の隊形を取った。

どうやら、真ん中にイーハン艦隊の旗艦が居るものと思われる。

艦隊双方隊形を整えていよいよ戦端が開かれる。

イーハン艦隊が先ず一斉に魔導砲を放った。

だがそのエネルギーの束はその艦隊の前で電光に変換され、ある一点に向かって集まって行った。

その一点にはアシュマが居た。

そして、その事の実態がある者たちの指標となった。

ある者たちとはマスクド、クロダの六人衆である。

アシュマを見つけクロダの六人衆がそこに集まる。

アシュマの前に彼らが集まった。

「クロダの六人衆か」

「また会ったな」

クロダの六人衆、頭目のシシオウが言う。

「俺は会いたく無かったがな」

アシユマが応える。

「ではやるか」

「御免蒙る」ごめんまう

「何だと？ 怖気づいたか？」

「何故、我らは戦わねばならん？」

「今更何を言う！ オクナフを殺された！ 奴の仇を取らねばならん！」

「それはそちらの勝手。俺は身を守ったに過ぎん」

「男らしく無い奴。さあ、我と戦え！」

「……仕方ない……」

アシユマは鬼虎を抜き、右手にだらりと下げてシシオウに対峙した。

シシオウは肩に担ぐような八双崩しの構えをとった。

シシオウはアシユマの構えを見ても、侮るような態度は取らなかつた。

それは、アシユマが最も肉体の緊張が解れた自然体で、ここから繰り出させる技は、鋭い一撃を秘めていると判断したからだ。

「どうした？ シシオウ？ 敵は隙だらけだぞ？ 何故斬り付けない？」

ナイシーと言うマスクドが言った。

（何を言うか。これが奴の誘いだと何故分からん？）

シシオウはそのように考えていた。

「来ないのか？ ならばこちらから行くぞ？」

アシユマはそう言った。

同時にシシオウは、その言葉に緊張を覚えた。

アシユマは一瞬の内に、生死の間仕切りを切って、迫ってきた。そしてアシユマの右手一本による、鬼虎の下からの攻撃は鋭く、

軌跡が光芒となって現れた。

シシオウは直刀の二刀を以ってして、はさみ 鋏のように交差させ、アシユマの攻撃を防いだ。

「二刀と言うのは便利なものだな」

アシユマはシシオウを揶揄した。

「おのれ！ 愚弄するか！」

シシオウは片方の直刀で鬼虎を抑えながら、もう片方の直刀でアシユマを襲ってきた。

アシユマは鬼虎を引き抜くと同時に、その刀を弾き、シシオウは空いた直刀でアシユマの下半身を襲った。

弾いた鬼虎で、アシユマは下半身を襲ってきた直刀を、更に弾く。シシオウは二刀で攻撃し始めた。

無言で。

アシユマも無言で直刀を裁き始めた。

「シシオウ。調子良いじゃねーか！」

アジャオと呼ばれるマスクドが言う。

だが、何故かシシオウには、余裕が無かった。

彼は考えていた。

この連携攻撃が終わると同時に、アシユマは動き出す。

その隙を見逃さずに。

だから、シシオウは恐怖に駆られながら、攻撃を繰り返していた。アシユマは余裕で攻撃を凌いでいるようにも見える。

それがシシオウを焦らせた。

実際のアシユマはどうだったか。

アシユマも苦しかった。

いつかできる隙を見逃すまいと、必死に食らいつきながら、シシオウの獅子奮迅の攻撃をかわしていた。

余裕など無かったのだ。

この状態では秘剣・流星どころか、他の秘剣も使えなかった。その余裕も無かった。

シシオウは息が切れた。

ずっと無酸素運動で、動き続けてきたのである。

一瞬ではあるが呼吸をした。

アシユマは、その隙を、見逃さなかった。

呼吸で、シシオウの動きに、一瞬の遅滞が起こったのである。

アシユマはなるべく小さく、素早く、鬼虎を斬りつけた。

スピードを上げるためである。

その結果、シシオウの肩口を打ち据えた。

今度はアシユマの攻撃の番である。

滑らかで、遅滞の無い、舞う様な攻撃だ。

マスクドの誰もが、シシオウの敗北を感じた。

その時である。

キエラと呼ばれる女性のマスクドが、横合いから割って入った。

武器は鞭である。

アシユマはその鞭を、無意識の内に弾いていた。

次に割って入ったのは、アジャオである。

槍でアシユマを襲ってきた。

アシユマはやはり、それを弾いていた。

「皆、やめよ！ これは、マスクドの掟に則った、正式な試合であ

る！ 割って入るでない！」

シシオウが皆を叱る。

「シシオウ……」

アジャオが呟く。

「今回は我の負けだ。潔く去ろう」

シシオウが言う

「そんな事はどうでもいい。二度と来るな」

アシユマが言い放つ。

「また会おう」

シシオウはそっぴい残して、後を去った。

アシユマの居なくなつた、統合軍の艦隊はどうなつたか。
イーハン艦隊は皮肉にもノリトレアに接收されたイボラス、ビニラ、ビムラーに艦隊を四分割される。

イボラス、ビニラ、ビムラーの各移動要塞は元はイーハンの要塞だつたのだ。

そしてイーハンの艦隊旗艦はノリトレアの艦隊が取り巻いていた。イーハン艦隊は戦意を失つて降伏をした。

これで、このまま本国が降伏すれば、この艦隊は温存されたままクーロン、ノリトレア、統合軍に組み入れられる可能性が出てくる。

そしてアシユマは一旦青龍号に戻る。

イーハンの、政治の府を、攻め落とす為だ。
今回アシユマは陽動に回る。

シユンマ等本隊は『脱出路』からシュニク、ヨナルト両名に迫る。その『脱出路』はシユンマがよく知っている。

先ず先ず青龍号が『脱出路』の『脱出口』に降り、シユンマたちを吐き出す。

「皆さん！ 行きますす！」
シユンマは気合を入れた。

「あんまり気合入れすぎてポカするなよ？」
オルバニアンが、からかい半分で言う。

「そうですね。皆さん、リラックスして行きましょう」
シユンマがその態度を豹変させる。

「どっちなんだよ？ おい」

「じゃあ、気合半分、リラックス半分で」

「おいおい……」

結局苦笑したのは、オルバニアンの方だった。

そしてその後青龍号はアシユマを政治の府の前に降ろす。
アシユマは陽動なのだ。

「アシユマさま。お気を付けて……」
「ん」

別れ際にアーチエルが、アシユマに軽くキスをする。

「大丈夫。死にはしない」

アシユマが言う。

「はい。でも……」

「分かっている。無駄な血は、なるべく出さないようにしよう」

「済みません。我俣ばかり言いまして。有難う御座います」

「いや。では行って来る」

「ご自愛を」

「ん」

またキスをして、アシユマは出て行く。

そしてアシユマは、政治の府の前に降り立った。

そして雄叫びを上げる。

周りからは、ばらばらと兵士達が集まってくる。

アシユマは鬼虎を引き抜いて峰に返した。

「さあ！ 来い！」

アシユマは叫んだ。

その頃、施政府の執務室ではヨナルト・リングとシュニク・イン
ジャが居た。

そして、その前に居たのは、クロダの六人衆だった。

「アシユマが出張ってきた。もう駄目かも知れん」

そう言ったのは、ヨナルトである。

「何を言う。ここにはマスクド共が居るではないか！ …… シシオ

ウ！ お前達がアシユマを生かしておくからこんな事になる……！

お前達はここを死守するのだ。いいな!? ワシらはここを脱出する」

マスクド達に向かって非常な事を言うのはシュニクだ

「お言葉ですがマスター。あのアシユマと言う男……一筋縄ではない
きません」

その言葉を言ったのはナイシーだった。

「そんな事は分かっておる！ だが、お前らは、マスクドだろう？
アシユマを倒して来い」

「いや、我らもここまでだ。私はここで腹を斬る」

ヨナルトはそう言い放った。

「何を言いだす!? どうかしてしまっただのか!？」

シュニクは驚きうろたえる。

「シュニクよ。お前は逃げるがよい。私はここで果てる」

「分かった。ヨナルト。好きにするが良い。ワシは逃げてみようぞ。
これが、今生の別れぞ」

「うむ」

「マイ・マスター、シュニク。我らはヨナルト氏の気概に触れ、得
るモノがありました。我ら、もう一度アシユマと戦ってみせましょ
うぞ」

シシオウが言う。

「そうか。頼むぞ」

シュニクが言う。

「シシオウよ頼みたい事がある」

ヨナルトがシシオウに言う。

「何ですか？ ヨナルト殿」

「介錯を頼みたい」

「! ……拙者で良ければ」

「シシオウ殿しかおらぬ」

「嗚呼、この時を以って、なんと云う誉かな。分かりました。介錯
仕ります」

「では頼む」

「は」

シシオウは短く応えて直刀を抜く。

ヨナルトは腹を開く。

短刀を持ち、ヨナルトは腹に短刀を突き立てた。

「まだまだ……！！」

ヨナルトは腹を短刀で右に掻つ斬っていく。

「ま、まだまだ……」

ヨナルトは耐えている。

「お、お願い申す……」

ヨナルトは呻いた……

間髪いれずシシオウが直刀を振り下ろした。

ヨナルトの首は、皮一枚で繋がっており、ヨナルトの腕が抱え込むように、頭が垂れた。

シユンマたちは『脱出路』を順調に逆走していた。

途中、散発的に敵に遭遇するものの、その時はオルバニアンのパルカン砲が火を噴いた。

勿論脚を狙ってである。

『脱出路』の『入り口』にシユンマたちが出た。

それは丁度シユニクが脱出する寸前だった。

部屋は前面がガラス張りの割と開けた造りだった。

「シユニク！」

シユンマが叫ぶ。

「シユンマ！ このような時に限って！ マスケド達よ！ 今だ！
今こそ戦う時だ！」

「確かシユンマと言ったわね？ あなたの相手はこのアタシよ」
そう言ったのは、キエラと呼ばれる女性のマスケドだ。
鞭を持って、シユンマに対峙した。

「シユンマ！」

オルバニアンが叫ぶ。

「おっと。お前の相手はこの俺だ。忘れたとは言わせないぜ」

エヴユが、鎖鎌の分銅を振り回しながら、にやつく。

「女。お前の相手はこの俺だ。覚えているだろうな？」

アジャオは先程の槍を持ってアルミナに対峙した。

槍は先程のアシユマの攻撃から回復して今は直っていた。

それに対してアルミナは、

「アタシもこないだは消化不良だったんだ。決着を付けるぞ？」

そう言った。

「そうか。そうであつただか。一人に付き一人のマスケドが着いて
いるって訳だか」

ガンロクが言った。

「そういう訳だ」

ナイシーが鉤爪を持って言う。

「シユニクが逃げますよ！」

レンヌが言う。

「俺達で奴を追うんだ！」

ジークが叫ぶ。

「おう！」

ビツシュが受ける。

三人はシユニクを追った。

シシオウは手を出さなかった。

アシユマが居なかつたからである。

シシオウは腕を組んで動静を見守った

オルバニアンはエヴユと対峙していた。

オルバニアンの鞆の内には逸鉄があつた。

かつてアシユマとイツテツが打った逸品だ。

オルバニアンは柄に軽く手を置き腰を落とす、居合いの構えをとった。

エヴユは分銅を回し続けている。

（こ奴は、以前は上段の構えが得意だったな。と言うことは、刀を抜ききつても、攻撃する手段があるということだな？）

エヴユは回していた分銅をオルバニアンに投げつけた。

オルバニアンはそれを避ける

（に、しても居合いとは、鎖鎌にとって相性が悪かろうに）

エヴユは分銅を投げ続ける。

オルバニアンは避け続ける。

確かに相性は悪かった。

居合いと鎖鎌。

いわば静と動。

一度刀を抜けば居合いはその効力を失う。

それを防ぐには、一刀目で相手を屠るか、連続技を繋げて動き回るかしかないのである。

オルバニアンは何を思っているのか。

オルバニアンは何かをぶつぶつ呟いていた。

エヴユが分銅を引き寄せる。

エヴユは右手に持った鎌に、意識が行っていないかった。

分銅で相手を叩く事にしか、意識が行っていないだったのである。

オルバニアンは巧みに分銅を避け続ける。

エヴユは段々と、苛々とし始めていた。

正常な判断力を失いつつあった。

この若造が、と言う想いが、そうさせていたのである。

エヴユは分銅を思いつきり引いた。

その時、オルバニアンは突然飛び出した。

一気に間合いを詰めて、逸鉄を引き抜いた。

その時に

「マジックブレイド！」

と、叫んだ。

オルバニアンは首を狙ったが、エヴユが咄嗟に引いた鎖鎌の鎖で狙いはそれで、鎖は千切れて、切っ先はエヴユの胸板を斜めに斬り裂いた。

「く、くそ……だ、駄目だったか……」

オルバニアンは、がっくり膝を付き力尽きた。

「このガキ……くそ！ 危ねえじゃねえか！ 今の内に止めを……」

アルミナは少しやりにくそうだった。

相手は間合いのある槍。

アルミナは大剣を持つが故、動作が大きい。

それを遠間から素早い突きで攻撃してくる槍は大剣の天敵といえた。

アルミナは右目の眼帯をむしりとり、八双に剣を立てた。

そして何かをぶつぶつと唱え始めた。

アジャオは何かの気味悪さを覚えて、槍で突いて牽制をし始めた。

そこは戦利眼を持つアルミナである。

軽く槍をかわす。

アルミナの動きが止まった。

何かを覚悟したようにも見える。

アルミナは俄かに剣を振り下ろし

「マジックブレイド！！」

と、唱えた。

「！！」

アジャオは体を開いて剣をかわし、そして槍を突き上げた。

アルミナもそれは予想していたらしく、槍を叩き斬る。

が……

アルミナは力尽きたようにうづくまる

「う……」

「マジックブレイドか……あれは気を大量に使うからな。今の内に殺しておくか」

ガンロクとナイシーが激しく切り結んでいた。

お互い、二つの武器で戦い続けていた。

一瞬の隙を突いてガンロクがナイシーを袈裟に斬りつける。

が、ガンロクの鉈はナイシーを傷つけることは出来なかった。

「ちいいっ！」

ガンロクが悪態をついた。

「くくく。念導境界面で差がついたな」

互いに互角に見えても、傷は、明らかに、ガンロクの方に増え行った。

そしてシュンマである。

シュンマの相手キエラは、鞭で以ってシュンマを甚いたが振る様に、攻撃していた。

「ボウヤ、可愛いわねえ。どう？ もう一度言っわ。お姉さんの愛人にならない？ それなら、あなたの命を救ってあげてもよくてよ？」

キエラがシュンマを誘う。

「済みません。重ねて言います。僕の愛する人は、一人と決めていますので」

シュンマも言う。

「別に愛なんて無くてもいいのよ？」

「御免蒙ります」

「あら、そう！」

キエラの鞭がレンヌの顔を襲う。

「あ、危ないですねえ。止めてください」

「あら、御免なさい？ あなたが、言う事を聞かないものだから、つい顔に鞭が行ってしまっただけだ」

「そうですか」

そう言つて、シユンマは呪文を唱え始めた。

「我は禁忌を見た者、犯したもの。

我が憎しみは、汝の快樂。

我の癒しは、汝の死のみ。

黒く塗りこめ我が魂。

今、その力を汝らに示せん。

全てを吸い込め。

ブラックホール！！」

「！！」

キエラが、今の今まで居た所に、黒い塊が現れた。

「なんて恐ろしい子。危ない事を」

キエラが再び鞭を振るう。

「くっ！」

シユンマが窮地に陥る。

皆、窮地に陥った。

万事休すかと思われたその時に、空から、窓ガラスを割って、飛び込んで来た者がいた。

皆が視線をそちらに持つて行くと、アシユマが居た。

アシユマはその場を一瞥しただけで、状況が分かった

「俺の仲間に、何をするかあっ！！」

アシユマが咆哮した！！

窓ガラスが悉く割れて、カーテンが千切れた。

「アシユマよ！ 来たか！ 我との勝負をつけるか？」

「今の俺は機嫌が悪い。死ぬぞ。良いのか？」

「行かねばなるまい？ 会ってしまったのだから」

シシオウは八双の構えを、アシユマは居合いの構えをとっていた。アシユマがいつに無い圧力をシシオウに掛けていた。

シシオウはその圧力に耐え切れず、アシユマに突っ込んで行った。その時何かが煌いて、吹っ飛んだモノがあった。

吹っ飛んだのはシシオウの腕だった。

煌いたのはアシユマの鬼虎である。

「次は無いぞ？」

アシユマが凄んで言った。

「うっ……！！」

「仲間を引き連れて帰れ！！」

今まで優勢だったのである。

それを帰れなどとはリーダーとしては言えない事だった。

「言えぬか？ ならば皆、斬って棄てるまで。それでも良いか！？」
鬼の天敵と呼ばれたマスクドが、鬼を持つアシユマの剣幕に圧されて、何も出来ないで居た。

「三度は言わぬぞ？ 帰れ！！」

帰るところなど何処にも無かった。

ここが、クロダの六人衆の本拠地だったからである。

しかし、

「……皆のもの。退散するぞ」

そう、言わざるを得なかった。

シシオウが斬り飛ばされた自分の腕を拾って、皆を促す。

他の者も、アシユマに気圧されて、その場を立ち去る。

「皆、大丈夫か？」

見ると、オルバニアンとアルミナの消耗が激しい。

「また、お前らか」

アシユマは呆れ顔だがどこか優しい。

オルバニアンとアルミナに気を注入すると、レンヌ、ジーク、そ

してビツシユが居ない事に気が付く。

「レンヌは？」

アシユマが誰とも無く訊いた。

「いま、レンヌさん達はシュニクを追っています」

と、シュンマが言う。

「そうか。ならば、俺はそれを追う」

「アシユマ、俺達も行くぜ……」

オルバニアンが立ち上がる。

「よせ。無茶をするな。シュンマ。どの道を行けば良い？」

「あそこの暖炉の中です」

「そうか。分かった」

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

ウイングー！」

アシユマは魔法ウイングを唱え、暖炉の穴から通路を進んだ。

レンヌの気を追い右へ左へ。

そして『出口』へとたどり着いた。

だが、そこでは戦闘は、行われていなかった。

「どうした？ 逃げられたのか？」

アシユマはレンヌに訊く。

「サイコ・フライヤーが隠してあった」

変わりにジークが答える。

「そうか」

アシユマも短く応える。

「よし。帰ろう」

「え？　しかし……」

レンヌが言い淀む。

「言いたい事は分かる。が、落ち着いて考える事もたまには必要だ」

「……はい」

レンヌは何か釈然としない様だ。

全員が無事に青龍号に戻ってきた。

アーチエルが

「本当によくもまあ、戻っていらっしやいました。善き事です。アーチエルは嬉しゅう御座います」

皆に言った。

シユンマが第一声でアーチエルに、

「間接的にはありますが、ヨナルトを討ち果たすしか仕方ありませんでした」

そう釈明。

「分かっております。お気になさらずに」

と、言い、レンヌが、

「シユニクには逃げられてしまいました」

そう言うのと、

「それも仕方ありません」

そう言った。

アーチエルは二人に寛容で、ただただ皆の帰艦と無事を喜んだ。

それを見ていて、キュポアとリイナは多少悋気を覚えた。

が、嬉しい事には、変わり無い。

すぐさまそれぞれ腕を組んで、話を始めた。

ミカもジークの腕を取って話し始める。

「大丈夫だった？」

「ああ」

「怪我は無い？」

「ああ」

「辛い事は無い？」

「ああ」

「もう！ 折角人が心配しているのに、それじゃ分からないじゃない！？」

「大丈夫だ。これで良いか？」

「もう……」

とりあえず、戦闘は終結したようだ。

第四節 混戦

シユンマはすぐさま即位し、亡くなった父王の代わりに政権をシユニク・インジャから奪還した。

シユンマは王となった。

シユンマは国家体制を改めるべく、識者を集めて会議を連日のようにした。

その時に先ず、シユンマが行ったことは、ノリトレアとの同盟だった。

アシユマは国勢が、一段楽したと見たのか、オルバニアン、アルミナ、ジーク、ガンロク、レンヌ、ビツシユ、そしてシユンマ王に禁呪ウイングとブースト、マジックブレイドを教えた。

ただ、シユンマに関しては問題が幾つか。

その一、シユンマは王になり、前線で戦う事に差し障りがあること。

その二、差し障りがあるにも拘らず、実は既に、ブーストとウイングを習得済みであったこと。

この事だった。

だが、意外と好戦的なこの王は、これらの禁呪を覚えるのに貪欲だった。

ところで、この事に関してアーチェルは『ご立腹』だった。

烈火のごとく、と言う表現を使ってもよい。

これ以上皆を、危険な目に合わせて、どうするのか？

と、言う事だった。

しかし、アシユマは、こうでもしないと、却って危ないと言った。これが原因で二人にしては喧嘩をし、暫くお互い口を利かない日々が続いたが、意外な事でアーチェルとアシユマは仲違いが治った。

アシユマが、

「アーチエル。腹がすいた。何か欲しい」

そう言い、アーチエルも、その時は何も考えずに、つい、

「はい。今何か作ります故、暫しお待ちを」

そう、言ってしまったことである。

二人ともそこで、喧嘩していたのを思い出し、妙な雰囲気になったが、どちらとも無く笑い出したので、この戦いは立ち消えとなった。

ただし、アーチエルは、魔法を覚えさせるのは良いが、安全を必ず確保させる事を、アシユマに確約させた。

オロ・エバス連合軍が進軍していた。

勿論目標はノリトレアだ。

多数の巨艦を引き連れて、一際大きな艦には、オロ・エバス総統が乗っていた。

旗艦アプラスである。

そしてそれ以上に大きいのが、空中要塞である。

オロの旗艦アプラスが全長一キロメートルほどなのに対して直径は三キロメートル。

かつてのリスパダハルの巨艦、ヘルガギルテと同等の規模である。攻撃力もほぼ同等だ。

規模はバヴェルには遠く及ばないが。

それでもオロはそれを六基も連れて来た。

名前は一番艦から順にコール、ンアール、プット、ガドラ、ブラ、ポガツサ、と、それぞれ言う。

ノリトレアが接収したイボラス・ビニラ・ビムラーの各要塞とほぼ同じ規模である。

勿論、これらの要塞を牽制する為に連合軍の六要塞を引き連れてきたわけである。

だけでなく、牽制を通り抜けてノリトレア軍に圧力を掛けられる。それに加えてこの大艦隊。

これだけでもノリトレア統合軍には相当の圧力のはずだった。

ここまでしておいて、オロは、

「まずは小手調べと行こうじゃないか」

と、言ったという。

この、ノリトレア軍に、クーロン軍、イーハン軍が加わって、ノリトレア統合軍となった。

それでも、艦隊数ではやや劣り、魔導機兵数でも劣った。

「アシユマ・アトーを如何に抑えるかが鍵だな」

オロは、そう呟くと、

「その辺は大丈夫なのだろうな？ ウフエイトウ」

と、振り向いて言った。

「はい。マスター」

ウフエイトウがそこに跪いていた。

「頼むぞ。この戦い、勝つかどうかはおまえ達に掛かっている……」

と、行っても小手調べだがな。くくく」

小手調べと言っても、オロは勝つ気でいた。

「は」

ウフエイトウが頭を垂れた。

今回もノリトレア統合軍の指揮を取るのは、ルー・ウィロンである。

また、イーハン軍のシュンマ王が前線に立って、出撃する事になった。

意外と勝気な王である。

艦隊戦が始まる。

今回は双方とも最初から魔導砲を打ち合うような愚はしなかった。魔導砲は大量の念を使う。

双方とも強大で強力な念導境界面を張れる者がいるのだ。無駄なことはしない方が良かった。

案の定、双方とも砲撃が通じなかった。

アシユマは、青龍号のゴンドラの上で鬼虎の柄に右手を乗せながら、気を錬っていた。

鯉口が切られ、光があふれ出す。

もしかして、敵方の念導境界面を貫き通せるかもしれないと思ったからだ。

アシユマが鬼虎を引き抜こうとしたその時、

「それを放たれる訳にはいかんな」

頭上から声が聞こえてきた。

ウフェイトウである。

「それでも放つ」

アシユマも言う。

「放つても無駄だと思っがな」

「ならば、マスクドを全て倒し放つまで」

「我らに向かつてよく言う」

周りにはウフェイトウを中心にマスクド達が宙に浮かんでいた。

「ちよつとまつたあ！！」

アシユマの背後から声が聞こえた。

オルバニアンを筆頭に七人の勇士が現れた。

皆、魔法ウイングで宙に浮いている。

王になったシユンマもいる。

この頃になって、双方砲撃が当たる様になる。

「ウフェイトウ！ アシユマの野郎は俺に殺らせてくれ！！」

ワラシーが言った。

「駄目だ。お前では敵わんだらう」

「やらせてくれ！ 兄者の仇を討たせてくれ！！」

「駄目だ！！」

「殺らせてくれ！ 頼む！！」

「……………」

ウフェイトウは暫し沈黙した。

「どうした？ 来ないのか？」

アシユマが挑発する。

「！ もう我慢ならん！ 俺は行くぞ」

ワラシーが突っ込む。

それが戦いの合図だった。

それぞれ、オルバニアンにはナイゲルが、アルミナにはシャケルウが、ガンロクにはウゴグロフが、ジークにはウデイガアが、レンヌにはイラが、シユンマにはレトウが、ビツシュにはナトイゲフルが戦いに臨んだ。

皆、それぞれ以前に遺恨があつた者が戦った。

だが、オルバニアンとアルミナは…………。

「確か、オルバニアンと言つたな？」

ナイゲルと呼ばれるマスクドが声を掛ける。

「ああ、それがどうした？」

「ウシャトウの仇を討たせてもらおうか…………と、言っても元来これはウフェイトウの台詞だな」

「？ 何故？」

「ウフェイトウはウシャトウの兄者だからな」

「ふん…………」

「ちなみに我はナイゲル。人馬鬼のナイゲル」

「どつちでも言いや。早く来いよ」

「ふん！ 今に吠え面かくなよ？」

そして、アルミナはシャケルウと呼ばれるマスクドと対峙していた。

「貴様の相手はこの俺がする」

「ふん！ アンタが二番手かい。ま、いいさ。おいで」
アルミナがロンリーストライフを八双に構える。

「アシユマ！ 行くぞー！」

ワラシーが叫ぶ。

が、叫んだは良いが、その場でびたりと動きを止めた。
攻めどころが見付からないのだ。

力を抜いて自然体。

隙があるようで隙が無い。

何処にどう攻めても返し技が来る気がする。

完璧にアシユマに飲み込まれている。

ワラシーは全く動けなくなった。

「どうした？ 来ないのか？ 最初の勢いは何処へ行った？」

アシユマが挑発する。

「う……」

ワラシーが呻く。

「奴の挑発だ！ 乗るな、ワラシーー！！」

ウフェイトウが叫ぶ。

「どうした？ 兄の仇を討つんじゃないのか？」

「くそっー！！」

ワラシーが叫びながらアシユマに向かって突っ込んだ。

「ば、馬鹿者！」

再びウフェイトウが叫び声をあげる。

間合いを詰めワラシーが迫る。

二刀を振り下ろし、アシユマに詰める。

アシユマは体を右にかわし居合いから左腕を飛ばし、そして鬼虎
を返す刀宜しく振り下ろし、右腕を斬り飛ばした。

「ああっ！」

ワラシーは驚いたようで、両腕から自慢の双児鬼が落ちて行くのを、ただただ、見ていた。

「ワラシー!!! 次が来るぞ!!!」

ウフェイトウが注意を喚起する。

しかし、今の攻撃で、ワラシーは呆けた様になって、ゆっくりウフェイトウに振り向いた。

「馬鹿!」

ウフェイトウが叫ぶ。

アシユマはその隙を見逃さず、ワラシーの首を刎ねてしまった。

「ワラシー!!! ……おのれ、アシユマ」

ウフェイトウは、アシユマを憎しみのこもった目で見た。

他を見ると、皆善戦している。

ウフェイトウが怒っている最中に、アシユマは一瞬の内に気の塊を鬼虎に作った。

ワラシーとの戦いの間に、気を錬っていたのだ。

これには、迂闊にも、ウフェイトウは驚いた。

その隙にアシユマは鬼虎を振りきった。

幾線條の光の条が、オロ・エバス連合軍の艦隊へと、吸い込まれて行った。

「しまった!」

ウフェイトウが嘆いても、遅かった。

光の条は、連合軍の艦艇を、幾つも沈めて行った。

流石に、アシユマの気の錬り方が不十分だったのか、敵艦艇の三分の二ほどは無傷だった。

また、連合軍の各要塞、コール、ンアール、プット、ガドラ、ブラ、ポガツサ、六要塞は落ちる事は無かった。

「ち! 不十分だったか!」

アシユマは悪態をつく。

「皆の者、退くぞ! ここにいてもアシユマの気弾に、艦隊が危険に晒されるだけだ!」

ウフェイトウが配下の者に下知を下す。

「ウフェイトウ！ そりゃ無いぜ！」

ナイゲルと呼ばれるマスクドが不満をぶつける。

「退くのだ！！」

ウフェイトウが怒る。

他の者は、隙を見せないようにゆつくりとオルバニアン等から離れていく。

「おい！ 帰って来いよ！ 斬ってやるぜ！？」

オルバニアンがナイゲルを挑発する。

「貴様こそこっちへ来い！ すぐさま斬り刻んでやるぞ？ それとも、怖くて来られないか？ たすけてー、たすけてー、ままー………つてか？」

ナイゲルが逆襲する。

「何だと!？」

オルバニアンの頭に血が上る。

「止めとけ。オルバニアン。奴の手だ」

アシユマが止める。

「お、おう……」

アシユマはウフェイトウ達が飛び去った方向を眺めていた。

「が、いつまでもそうしているわけにも行かないので、アシユマ達は青龍号へと戻って行った。」

アシユマはそこから、定期的に気弾を撃って、ウフェイトウ達の念導境界面を弱くしてやらなければならぬ。

「そうしなければ、こちらの艦隊の攻撃は出来ない。」

「思ったとおり、念導境界面をオーバーフローしてやれば、こちらの攻撃は通用するようだ。」

「だが、それも数える程度で、中々決定打と言うモノが出なかった。それでもオロは、」

「多少被害が出たな。今日のところは、これまでにしておくかと、言い、徐々に艦隊を後退させた。」

「助かった……のか？」

珍しくルー・ウィロンは、弱気な事を呟いた。

「助かれれば、それで良いでは、ありませぬか？」

アーチエルがにっこり微笑む。

「そうでありますな。アーチエル様」

「その『様』はいりませぬ。わたくしは最早人妻。レキシタリアの王族ではありませんぬ」

「いや、あなたには、人をそうさせる、何かを持っておられる」

「それを言うなら、ルー様も、人を動かすカリスマを、持っておられますよ？」

「いやはや。ワシの場合は……」

その時ゴンドラからアシュマが降りてきた。

「あ、アシュマさま！ お疲れ様で御座いました」

「アーチエル」

アシュマが自分の妻を認めてそう言う。

ルー・ウィロンは、自分の話よりも、矢張り、アシュマの方が良いのだなど、改めて思い至った。

連合軍は、コール、ンアール、プット、ガドラ、ブラ、ポガツサの六要塞を、ノリトレアの牽制の為に置いていった。

修理はそこで行われながら。

オロは、

「まだ、決戦の時ではない」

と、言いながら、オロ・エバス国へ帰って行った。

他の国々の艦隊も自国へと帰って行った。

オロは館に着いて、自室で寛いでいた。

ナナル・エコリコがやって来て、こういった。

「このような中途半端な戦い様で、大丈夫なのですか？ サバンナ大統領の二の舞になりはしないのですか？」

それに対し、オロは
「まだ決戦の時ではない」
そう言ったと言う。

オロ・エバス国では今、軍需景気で湧いていた。
国内が潤っている。
次々に軍艦、魔導機兵、各種兵器群が造られて、配備されていく。
これにより、オロの人気は鰻上りだ。

この事は、アベニによりアルステインの知る所となった。
アルステインは

「このままでは、幾ら同盟のクローンの、人海戦術があるとしても、オロは恐らく次々と要所要所に軍を配備させていくだろう。そうなるのは厄介な事になるな」と、言ったという。

再び話をオロの視点に戻そう。

「安心しろ。ただ今超高空爆撃部隊を用意してある。これ程超高空かつ超高精度の爆撃を出来る艦は、我がオロ・エバス国にしかない。宮殿に一発お見舞いして見せよう」

「そう？ それならいいけれど？」
ナナルが言う。

「疑うのか？」
「いいえ」

これも、アベニにより、アルステインの耳に入った。

超高空爆撃部隊はレイフ諸島ウング島のオロ・エバス軍基地を後

にした。

その超高空爆撃機はその名をドラゴンフライ（トンボ）と言った。そして、一路、ノリトレアへ。

この事はアベニによって、アルステイーンの知り所となる。

「どうするんだよ！ アルステイーン！」

オルバニアンがうるたえ喚く。

「どうにかしましょうか。オルバニアン」

アルステイーンは、いたって平穏だ。

「どうにかしましょうかって、だから、どうするんだよ!？」

「だから、ここはオルバニアン、君に何とかしてもらいましょう」

「はあ？」

「だから、オルバニアンに魔導機兵に乗ってもらい、その爆撃機を粉碎してもらいましょう」

「はあ？ アルステイーン。寝言は寝てから言ってくれ。魔導機兵がそんな超高空からやって来る爆撃機に、対処できるわけ無いだろう？」

「まあ、まあ。ここは専門家に来てもらいましょう」

「専門家？」

「アリシアナ・コクレト技術少尉をここへ」

アルステイーンはあのアリシアナを呼んだ。

階級は上がって少尉になった。

「そうだ、アルミナさんも呼ばないと」

アルステイーンは続けて言った。

「アリシアナ・コクレト少尉、出頭致しました」

程なくアリシアナがやって来た。

「お久しぶりで御座います。オルバニアン様」

「おお！ アリシアナさん！ アシユマじゃねえが『様』付けされるとこそばゆいな」

オルバニアンが照れて言う。

「何、鼻の下を、だらしなく伸ばしているのよ!！」

アルミナだ。

呼ばれて早々、何をするのかと思えばこの光景。
少し^{りんき}恠気を起こしているようだ。

「おお、アルミナ！」

「『おお、アルミナ』じゃ無いわよ！ この唐変木」

アルミナはオルバニアンの言葉に、ご立腹のようだ。

「で、なに？」

「アルミナさん。これからオルバニアンと共に、オロの超高空爆撃部隊を撃破してください」

アルステインが言う。

「超高空ってどの位なのよ？」

「超高空です」

「約五万フィートです」

そう言ったのはアリシアナだ。

「五万！」

アルミナは驚いた。

が……

「五万フィートって何メートル？」

と、オルバニアン。

「一フィートが三十、四八センチメートルだから……」

「約一万五千メートルですね」

アリシアナが言う。

「冷静に言うな！ 十五キロだろ！ それ！ 空気あんのか！？」

「空気……！」

オルバニアンが絶叫する。

「今度の機体はコクピット内は与圧されています。パイロットスーツもありません。大丈夫です」

「俺はパイロットスーツは着ない主義なの！」

「そうなんですよね。いままで、どうやって、Gに耐えていたのか不思議なんですよね」

「根性だ！ 根性！」

「ああは言ってますけどね、念導境界面の能力ちからなんですよ」
アルステインが言う。

「そーなの？ アタシも今まで、根性だと思ってた」
アルミナもそう言う。

「何？ 俺達に魔導機兵に乗って、その超高空爆撃機とやらを、落として来いってか」

オルバニアンが確認する。

「さつきからそう言っています」

「あたしは、聞いていない」

アルミナは不機嫌そうだ。

「なんでプラズマキャノンやレールガンで迎撃しないんだよ？」

「相手もステルス化されていて、良く照準が合わないのですよ」

「ち！ 技術の進歩って奴にも、困ったもんだぜ」

「まあ、それとして、アリシアさん。二人に魔導機兵の仕様に関して、教えてあげてください」

「はい」

その、魔導機兵の名前はリカインジュと言った。

ステルス機能も付いている。

勿論高高度まで昇る事も出来る。

早速、オルバニアンとアルミナは、リカインジュに乗り、迎撃に向かった。

アシユマがアルステインの元にやってくる。

「オルバニアンとアルミナが出かけたそうだな」

アシユマが言う。

「ええ。今ははるか遠くの空ですよ」

アルステインが応える。

「流石に俺でもそんな高くは上れないからな。……上空五万フィー

トか……」

「相手のマスクドもそうでしょう」

「その点では安心だな」

「ええ」

今、オルバニアンとアルミナは上空五万フィートの空にいた。

そろそろ、オロ・エバス国のドラゴンフライ部隊と、接触の筈だ。オルバニアンはアルミナと会話する。

「そろそろ、接触の予定時刻だな」

「そうね。でもリーダーには、何も映らないわよ？」

「ステルスだろ？ 全く技術の進歩つてのには、恐れ入るぜ」

「そうね。結局は目視しか無いのよね？」

それは相手も同じだった。

敵の存在を知るには、目視しかないのである。

そして敵の見張りが、オルバニアン等を見つける。

「てっ、敵機発見！ 一時の方向！ あれは……ま、魔導機兵だ！」

「なに？ 寝言を言うな。こんな高空に魔導機兵が上れる訳が……」

もう一人の見張りもオルバニアンたちを見つけた様である。

それからドラゴンフライ部隊は、蜂の巣を突付いたような状態になる。

迎撃の砲台が競り上がり、オルバニアン達に、照準を付ける。

そして、発砲。

狙いはめちやくちや。

とにかく、弾幕を張って、オルバニアン達を近付くのを、防いでいるようだ。

が、量産型と違って、オルバニアン達の機体は、カスタム機である。装甲はぶ厚く出来ている。

その上、オルバニアンとアルミナ機は、魔法シールドで守られて

いた。

ちよつとやそつとの攻撃ではビクともしないだろう

「オルバニアン！ もう、落として良いの？」

「ああ！ 行きたきや行きな！ 俺も行かして貰うぜ！」

オルバニアンはお馴染み三十三ミリバルカン砲を手に持ち、斉射し始めた。

相手は大物だ。

面白いように的に弾が当たっていく。

「我々は聞いていないぞ！ こんな高度を飛べる魔導機兵がいるなんて！」

忽ちドラゴンフライは爆発して炎上、そして墮ちていく。

アルミナも大剣を持って、ドラゴンフライの翼を、斬って行く。

ドラゴンフライは、次々と墮とされて行く。

まさにオルバニアンとアルミナの独壇場だった。

ドラゴンフライは、悉く墮とされて部隊は全滅した。

「やったね！ オルバニアン！」

「ああ。さあ！ 帰投しようぜ！」

「ええ！」

二人は、皆の待つ、ノリトレアの宮殿へと帰投した。

二機のリカインジユを整備班に引渡し、二人は王宮に帰ってきた。
「オルバニアン様、アルミナさん、お帰りなさいまし。ようこそ無事で」

二人をアーチェルが出迎えた。

「まずはアルステイン様へ、ご報告下さい。その上で大広間においで下さいまし」

「あ、ああ」

オルバニアンは、何が待っているのかと思いつながら、アルステインに報告の為、政務室へと向かった。

「何！？ 失敗したと!？」

オロは驚きを隠せなかった。

絶対に破られる事は無いと思っただからだ。

「どうしてやられた？ アシユマか？」

オロが訊く。

「は。それが魔導機兵によるもので……」

「魔導機兵か……おのれアルステインめ！ 恐るべしノリトレア

の技術力。矢張り、倒すべきはノリトレア、そしてアルステイン

か！」

「は

「よくやりましたね。オルバニアン。そして、アルミンさん。細かい報告は後回しにして戦勝祝いの祝賀会に出ましよう」

アルステインが会話の口火を切る。

「祝賀会か。何かこそばゆいな」

「まあ、いいじゃない。祝ってくれるんだからサ」

「ま、そりゃそーだ」

先程アーチエルに言われた通り、大広間に通された二人。

既にパーティーの準備は整っており、後は音頭を取って開始するだけだった。

アルステインがグラスを手に傾ける。

そこからアルステインのスピーチが長かった。

かれこれ十五分は立っただろうか。

オルバニアンはじりじりとし、

「アルステイン！ もういいからさあ！ 早く食わしてくれよ！」
そして切れた。

「わ、分かりました。では、細かいことは抜きにして、乾杯！」

「乾杯！」

今回は立食パーティーだ。

皆、皿に各々、好きな食べ物、盛り付けていく。

オルバニアンは飲んで食って、飲んで食ってと、大忙しだった。アルミナも負けていなかった。

彼女も負けじと食べていた。

数日後、クーロンのリン・シャオリンが、アルステインに、連絡を入れてくる。

「どうやら、昨今のオロ・エバス国の隆盛について、アルステインと話をしているようだ。」

クーロンの人海戦術を上回る勢いで、軍備を増強している。

これに関して意見を交換する為、電話で会話をしていた。

「仕方ありませんね。一つ手が無くは、無いです」

アルステインがそう言う。

「本当ネ？ そんな手があるネ？」

「時間稼ぎにしかありませんがね」

「この際それはどうでもいいネ！ その手に乗るネ！ 教えるネ、その手を！」

「オロ・エバス国の西部の海岸近くに工業地帯がありますよね？」

「うん、あるネ」

「このオロ・エバス国の、集積回路の軍需工場を、破壊するんですよ。ここを叩けばいわばオロ・エバスは、頭脳を破壊されたのと同じ事。暫くは何も出来ないでしょう」

「成程ネ！」

「ここを叩けば、オロ・エバス国は立ち直るのに、数年は掛かるでしょう。その間に和平工作が出来れば……」

「まだ、そんな甘い事を言ってるネ！？ 叩く時には徹底的に叩く

！ 兵法の極意ネ！」

「誰の兵法ですか？」
「私のネ！」

「と、言うわけで、隠密的意味合いもあるので、今回は青龍号一機のみでの、行動となります。何か質問はありますか？」

アルステインが言う。

アルステインの前にはアシュマ以下、皆が揃っていた。

「徹底的に破壊しても構いませんよね？ 兄上」

シユンマが珍しく過激な事を訊く。

「いや、必要最低限にして下さい」

アルステインが答える。

ここでアルステインとシユンマが意見を違える。

「しかし兄上、ここで徹底的に叩けば、和平交渉も有利に運ぶのではないのでしょうか？」

「それでは、オロ・エバスの、罪の無い人々の生活にまで、被害が及びます」

「兄上、そんな甘い事では、勝てる戦も勝てませんぞ？ 必要最低限などと言っては、敵の回復は早くなります」

「うゝむ。駄目ですね認められません」

「兄上……アシュマさん！ アシュマさんも何か言ってやって下さい」
シユンマがアシュマに意見を求めてきた。

「俺か？」

「はい！」

「ま、俺は徹底的に叩くのも悪くないとは思いますが……」

「思うが？」

「アルステインの意向に沿おうと思っている」

「アシュマさん！」

「決まりだ」

アシユマが断じた。

「……………」
シユンマも黙ってしまった。

青龍号が発進した。

オロ・エバス国の工業地帯……特に集積回路の工場を破壊する為
に。

青龍号がオロ・エバス国の工業地帯にやって来た。

青龍号がその腹に溜め込んだ大量の爆弾を吐き出していく。

オルバニアンとアルミナも魔導機兵で工場を破壊していく。

この光景を見て、アーチエルは泣いた。

こここの工場員たちは、何の罪も無い人達である。

その民間人が、なんの謂われなく、死んでいく。

その光景に涙するのである。

アシユマも破壊に一役買った。

気弾をあたり一面に放ったのである。

「全滅ではありませんが……全滅ではありませんが……惨過ぎます」
この攻撃でオロ・エバス国は大層打撃を受けた。

「アシユマさま。こう言う戦の世が無くなれば良いのですが……」
アーチエルはそう言っつて涙を落とした。

「おのれ！ アルステイン！ やってくれたな！ 者供準備せい
！ ノリトレアに攻め込むのだ！」

オロはそう吼えた。

ここはオロの政務室だ。

周りのものはびっくりして振り返る。

「オ口様。そう興奮なさっては」

ナナルがオ口を抑える。

「興奮等は、してはおらん！」

そういうオ口は、明らかに怒り心頭となっていた。

「ここは起死回生を図って、ノリトレアに……！！」

「オ口様！」

ナナルは、オ口の口を塞ぐように、キスをした。

オ口は、これで少し、落ち着きを取り戻した。

「ナナル……」

「オ口様……落ち着きまして？」

「ああ。だが、ノリトレアに攻め込む事には、変わりが無いぞ？」

「それはそれで、よう御座います。でも今は、落ち着きなさってください」

「うむ。よかろう……そうだ！ エルファの騎士団を使おう。」

「それがよう御座います」

「誰ぞ？ 誰ぞある？」

「はっ！ 何か御用で？」

側近の者が、すぐさま寄って来て、用を聞く。

「ウフェイトウを呼べ」

「ははっ」

暫くしてウフェイトウがやって来る。

「お呼びですか？ マイ・マスター」

「うむ。ノリトレアに、行って貰いたい」

「ノリトレアに……」

「そうだ。そして、アルスティーンの命を取って来るのだ」
「……………」

「嫌か？ 又このような汚れ仕事は、嫌か？」

「いえ……………」

「ならば良い。今度も期待しているぞ？ ウフェイトウ」
オ口はウフェイトウにそう言った。

「ははっ。必ずやご期待に沿えるよう致します」

「マスケドは期待を裏切るのが得意だからな。前のザザやロシがそうだった」

「ザザとは違います。マイ・マスター」

「言葉ではなく行動で示せ」

「は……」

その夜、全く気配を出さずに、黒いサイコ・フライヤーが、ノリトレアの王宮広場の真ん中へ、滑るようにして降り立った。

中から人が出てくる。

そいつらは、迷うことなく王宮へと、向かって行った。

この異変に、最初に気付いたのは、アシュマだった。

彼は寝ていたのだが、気配の無い気配……言うなれば不自然な無の気配を察知して、起き上がったのだ。

「アシュマさま。如何なされました？」

「アーチエル、アルステインの所へ行け。そしてこう言え。マスケドが来た。オルバニアンもたたき起こせ！ 事態は急を要する！ 急げ！」

「はっ、はい！」

アシュマは簡潔に要点をアーチエルに述べると、自身はズボンを穿き靴を履き、上半身は裸のまま、鬼虎を左手に持ち外へ出た。

ウフェイトウ達はギョツとした。

こんなにも早く、アシュマ・アトーに出会うとは、思っていなかったからである。

まさに意中の外の事であった。

「ここから先は誰も通さん！」

アシュマが言い放った。

それは、アシュマの殺気そのもので、八人の内七人いるエルファの騎士団の団員を震え上がらせるには、充分なほどであった。

除外されたマスクドは、勿論エルファの騎士団団長のウフェイトウだった。

彼のみが、アシユマの恐怖の洗礼から、逃れ得た。

「皆の者！ 怯むな！ 怯んだら負けぞ！」

ウフェイトウが、皆を鼓舞する。

「ここへ来るとは、不埒千万！ さあ、誰から俺に斬られたい？

名乗りを上げて、出るが良い！」

「おのれ！ アシユマめ！ 何という傲岸不遜な言い様！ 許すわけには参らぬぞ！」

ウフェイトウが怒りを顔おもてにして言う。

「ウフェイトウか。頭目自ら名乗り出るとはお前の部下たちも不甲斐なし。マスクドの名を棄てよ！」

「何！？」

ナトイゲフルが怒りの色をなす。

そこにいるマスクド達が皆、色めきたつ。

これをアシユマはワザとしていた。

マスクドの目をアシユマに向けさせる為だ。

その間に、アルステインらが逃げうる時間を稼ぐ為だ。

そして、遅れてオルバニアン等が王宮広場に出てきた。

「どうだ？ オルバニアン。アルステインは逃げたか？」

「ああ。今、逃げた所だ」

「そうか。よくやった」

ここで初めてウフェイトウは、アシユマの真意に気付く。

「おのれえ！ アシユマめ！ 謀ったなあ！！」

「多少は俺も知恵を出す。悪いか？」

「おのれ！ すでに言葉も無いわ！ 潔くここで死ね！」

「さて？ そう、上手く行くかな？」

ここで、アシユマは一つの誤算をしていた。

普段の者ならば、怒りに我を忘れて、正常な判断力を失い、そして自滅するのだが、ウフェイトウは違った。

怒ることにより、却って頭の芯が冷え、怒っていても冷静になり、又、怒ることによって、いつもより高い戦闘能力を持つことになった。

「いくぞー！アシユマー！」

ウフェイトウは剣を振るって来た。

「ぬー！」

ウフェイトウの鋭い打ち込みに、アシユマは思わず受け止めた。

「うむむ……」

思わずアシユマが唸る。

他の者も苦戦を強いられているようだ。

アシユマは鬼虎でウフェイトウをいなし、ウフェイトウの背を打つ。

ウフェイトウは背を割られた。

が、ウフェイトウも剣を車に回しアシユマの腹部を斬り割った。

「くっ！」

「『天餓鬼』よ、汝の主が命ずる。汝の主の危難に際し、汝の力を以って汝の主を癒すべし」

ウフェイトウが呪文のように言葉を発すると背中中の傷が塞がっていく。

そしてアシユマは……。

「聖なる契約を交わし者達よ、

聴けよ、汝らの魂は救われん。

見よ、汝らの肉体は癒されん。

聖なる癒し、神の御手。

ヒーリングオール！！」

と、傷を癒していた。

「なんだ、貴様。癒しの手を、他人に渡しているのか？」

ウフェイトウが言う。

「大きなお世話だ」

アシユマは大きく気を落としていた。

無限に供給できるはずの気は、ウフェイトウを斬る為に使っていた。

流石にマスクド達の頭目だけあって、斬るには相当の気が要った。

その上でのヒーリングオールである。

それなりの気が、必要なはずである。

ウフェイトウは、勝ったと思った。

ウフェイトウの気はまだ充溢しており、相手を威圧するのに、充分な程だったからである。

それに対し、アシユマは構えを下段に取った。

ウフェイトウはその時、一気呵成に攻め込むのをやめた。

例のアシユマの秘剣・流星をそこに見たからである。

秘剣・流星は何も居合いの技ではない。

そのときの心の有り様、即ち『位』なのだ。

じりとした時間が流れる。

ウフェイトウに焦りが生じる。

が、相手に回復させる時間を、与えてはならない。

ウフェイトウは前へ出た。

そう、相抜け覚悟で。

アシユマも、ウフェイトウが、その覚悟で迫ってきているのを承知で、前へ出た。

生死の間仕切りを越える。

アシユマは、ウフェイトウの股下から斬り上げる。

ウフェイトウは、アシユマの心臓を真っ直ぐに貫いた。

ウフェイトウはアシユマの鬼虎に股下から下腹部までを斬り割られていた。

「『天餓鬼』よ……汝の主が命ずる。汝の主の危難に際し、汝の力を以って汝の主を癒すべし……」

最後の力を振り絞ってウフェイトウが呟く。

それに対しアシユマは、心臓を貫かれ、
「かはっ！ ぐっ！ がっ！」
と、もがき苦しんでいた。

「聖なる契約を交わし者達よ、
聴けよ、汝らの魂は救われん。
見よ、汝らの肉体は癒されん。
聖なる癒し、神の御手。
ヒーリングオール……」

ウフェイトウは大分アシユマの気力が落ちてきていると判断した。
(勝てる！ これならば勝てる)

ウフェイトウはその勝利を確信した。
ウフェイトウが勝利を確信し、一歩前へ進んだその時、周りの空
気が一変した事にウフェイトウは気づいた。

気が……周りにあるありとあらゆる物の気が、アシユマに向かっ
て流れ込んでいる。
そんな気がした。

今までの秘剣・流星とも違う何か。
それが、アシユマを包み込んでいる。
そんな気がした。

そして、ウフェイトウの剣士としての勘が、危険を告げていた。
アシユマは今、周りの物の……森羅万象全ての物と一体化してい
た。

一剣が万剣になり万剣が一剣に帰る。
アシユマは無想活殺を発現せんとしていた。
「み、皆の者！ てっ、撤退じゃあー！」
ウフェイトウが叫ぶ。

「何！？」
「何故だ、ウフェイトウ！」

中には戦いを有利に進めている者もいたのだろう。
不満の声が上がる。

「いいから退くのだ！ 全滅するぞ!？」

「どうしたのだ？ ウフエイトウよ!」

ウフエイトウの異様な様子に皆が驚く。

「いいから退くぞ!」

ウフエイトウの命令は絶対だ。

逆らう者等誰もいない。

ウフエイトウ達は去って行った。

「うぐっ！ かはっ！ げほっ！ げほげほっ!」

ウフエイトウが居なくなつた途端、アシユマは咳き込んだ。

そこまで、アシユマは追い込まれていた。

また、弱つてもいた。

「アシユマさま!」

アーチエルが駆け寄る。

「大丈夫に御座いますか？」

「俺は大丈夫だ。他の皆を見てやってくれ」

「まずはアシユマさまです」

アーチエルが鬼虎に手をかざす。

アシユマが淡い燐光に包まれる。

アシユマが癒えた証拠だ。

皆は肩で息をしている。

幸いにも重傷者はいないようだ。

アーチエルやミカ等が手当てをしていく。

アシユマが呟く。

「ウフエイトウ……油断ならない奴
と。」

「こんな暗殺めいた事を許しておくのかよ？ アルステイン!」

オルバニアンが居間で声高に言った。

皆は手当てを受けて、居間で一息ついている所で、オルバニアンが言った言葉である。

「別に許すわけでは……」

「歯切れ悪いなあ……」

「仕方ないですよ。証拠じみた物が無い以上、オロを糾弾する事は、事実上無理ですからね」

「んな事言ったってよオ……」

「私も納得できぬ物がありますがね。まあ、出来うる限りの事はやってみましょう」

アルステイーンは自ら、国元連へと赴いた。

外務大臣などを差し向けてもよかつたが、護衛が居る。

そのときにアシユマが護衛に就いた時、アルステイーンの身边が危うくなる。

なので、アルステイーンが国元連へ赴いた方が良かろうという事で、アルステイーンはアシユマ等と共にこの地へ赴いた。

そこでアルステイーンは、オロ・エバス国による暗殺事件について、遺憾の意を表し、その上で、ノリトレアに対する経済封鎖、経済制裁を解除する事を表明。

その上で、和平交渉のテーブルに着く事を訴えた。

それに対してオロ・エバス国は、そのことに関しては、全くの事実無根であるとし、逆に我が国を貶める謀略だと決め付けた。

そしてその上で、形ばかりの民主政治、その実、独裁国家のノリトレアとでは、話にならないとして、交渉のテーブルにも着こうとしなかった。

アルステイーンは、国元連本部近くのホテルに、泊まった。

アシユマ達は、護衛として、外務大臣の泊まったホテルと、同じホテルに泊まった。

護衛としてだった。

黒い一団は、闇夜がまぎれてやってきた。

それがアルステインを狙っているのは、容易に想像できた。

今度も最初に気付いたのは、アシユマだった。

一種異様な気配を感じたからだ。

このどす黒く、血の臭いのする気配は……。

素早くアシユマは、皆を起こした。

「なんだよう。アシユマあ。まだ眠いよう」

「何を言っている！ アルステインの危機だぞ！」

アシユマは皆を引っ張るようにして、自らは、アルステインの寝室に入って、陣取った。

「アシユマ君、何もここまで……」

アルステインが言いかけた所で、敵が窓からガラスを破って、入ってきた。

「待たせたな！ アシユマ！」

「シシオウ！ クロダの六人衆か！」

クロダの六人衆が、その場から展開する。

「アシユマ！ 勝負！」

シシオウが叫ぶ。

その一言が呼び水となって、皆が一斉に乱戦となった。

シシオウにはアシユマ一人で良いが、エヴュにはオルバニアン、アジャオにはアルミナとジーク、ナイシーにはガンロクとビツシユが、キエラにはシユンマとレンヌがそれぞれついた。

「おのれ！ 卑怯だぞ！？ 二人がかりで！」

そう叫んだのはキエラだった。

彼女は鞭を振るおうとすると、レンヌのヘブンスソードが唸り、動きを止めるとシユンマの魔法が襲ってくる。

上手い連携攻撃の見本といえた。

「二人がかりは許してください。これもハンデです」
シュンマが言う。

「それにしてもちょっと厳しいわね！」

キエラが返す。

そして鞭を唸らせる。

そこへレンヌのヘブンスソードが襲い掛かる

「コマンド、オールソード！ 六剣乱舞！！」

「おのれ小癩な！」

襲い掛かる剣を弾く為、動きを止めたキエラに、シュンマが

「我は禁忌を見た者、犯したもの。

我が憎しみは、汝の快樂。

我の癒しは、汝の死のみ。

黒く塗りこめ我が魂。

今、その力を汝らに示せん。

全てを吸い込め。

ブラックホール！！」

魔法、ブラックホールをお見舞いした。

それは見事に決まり、彼女を重力の坩堝へ落す。

そして止めはレンヌの、

「コマンド、オールソード！ 孤剣静寂！」

だった。

一本の剣が目にも留まらぬ早業で、キエラの首を刎ねてしまった。

「キエラ！」

シシオウが叫ぶ。

「おのれ、アシュマ卑怯なり！」

「済まん。ハンデだと思ってくれ」

アシュマが言う。

そして、シュンマとレンヌの二人はそれぞれオルバニアンとアル

ミナの援護に回る。

多勢に無勢。

マスクド達はたまらず、及び腰になる。

そしてマスクド達が次々と細かく切り刻まれる所を見てシシオウが、

「者供！ 今宵はここまでとする！ 退くぞ！」

と、言うまでになった。

「アシユマよ、これからは我らも戦い方を変えるぞ！ そのつもりでいる！？」

シシオウは捨て台詞を吐いて出て行った。

「僕も見ていただけでなく、戦えばよかった……」

アルステイーンはぼろりと本音を口に出してしまった。

「アナタっ！ 何を言い出すのよ、もう！ 貴方は王なのよ？ みんなの頭脳なのよ？ 貴方が倒れたら何にもならないじゃない！！

もう、バカ！」

エファールは言葉遣いなど気にもせず、アルステイーンを罵倒していた。

「もう、ばかあ。貴方が死んだら誰が悲しむと思っているのよう……」

そして、エファールは泣き出してしまった。

「済みませんでした。エファールさん。貴女を悲しませてしまったようだ」

「ほんとに全くそうよ！ ばか」

「僕はエファールさんのおかげで『ばか』になってしまったようです。すね……」

「あたしの所為じゃないでしょう！？」

エファールは怒りから、周りにあるものを、アルステイーンに、投げつけ始めた。

「アルステイーン。部屋を変えるぞ。この部屋では寝られまい？」
アシユマが言う。

「ああ、そうですね。もう、こう言うことを想定して部屋を取つて
ます」

色んな物をぶつけられながら、アルステインが言う。

「流石だな。手回しが早い」

「いえいえ。常識ですよ」

「ふむ」

アシユマが頷く。

今、アルステインが国元連にいて、ノリトレアにはルー・ウィ
ロンがいる。

オロは、この事に機会を見た。

二人の連携が見られないからである。

一般にアルステインとルーは、犬猿の仲だと言われているが（
事実そういう面はあるが）こと戦時に関してはお互いを認め合い、
お互いを信じ、お互いを尊敬した関係であった。

作戦作りについてもそうである。

ルーが作戦の素案を作りアルステインが意見を言い煮詰めて、
最終的な物を作り上げて戦いに臨む。

そういう関係を続けてきた。

が、今はそれが出来ない。

距離が、アルステインと、ルー・ウィロンを分断していた。

このことが、オロを突き動かした。

起死回生とばかりに、ノリトレアに攻め込もうと言うのである。

しかし、これが軽率だった事に、思い知らされる事になる。

アルステインはこの事を予期し、青龍号に乗りつけ、オロ艦隊
が通るであろうコースに、予め待つて伏せていた。

そして、ノリトレア統合軍艦隊が、オロの連合軍艦隊を待ち伏せ
た。

まさに、アルステインの読み勝ちである。

それはオロ連合艦隊が、戦線が延びきった状態で、その合流地点にきたのと、待ち伏せて十分な鶴翼の陣で、戦いに臨むノリトレア統合軍とでは、勝負が見えていた。

戦いが始まる。

久しぶりに艦隊を指揮するのは、あのアルステインである。

だが、砲撃をしてもこちらの攻撃が相手の艦隊に届いていない。

「こりゃ、アシュマ君の出番かな？」

アルステインが呟く。

「アルステイン様！」

アーチエルが耳ざとく、聞き咎める。

「ああ、済みません。アーチエル様。でもアシュマ君は出る気です

よ??」

「！ あっ、アシュマさま！」

「アーチエル。大丈夫だよ。直ぐ戻ってくる」

ゴンドラで、キスを交わす二人。

もう何回目だろう。

こうやって、愛しい人を送り出すのは。

その度にアーチエルは泣きたい様な感情に、胸を掻きむしられる。

アシュマはその度に、申し訳ない様な気持ちになる。

「行って来る」

アシュマが言う。

「行ってらっしゃいまし」

アーチエルは、切なくも愛する夫を見送る。

アシュマは、ゴンドラに乗って、機上の人になった。

アシュマは鬼虎に気を集め、一気に引き抜く。

幾線条もの光の条が、オロの艦隊に向けて放たれる。

艦隊の直前で、アシュマの気弾が弾かれる。

矢張りアシュマの攻撃も通じない。

が、そこで敵の念導境界面の、キャパシティがオーバーフローするのか、ノリトレア統合軍の砲撃があたるようになる。

徐々に落ち始めるオロ艦隊。

アシユマが再び刀身に気を集め始める。

「まさにお前がいると厄介だな」

頭の上から、言葉が浴びせかけられる。

ウフエイトウだ。

他の団員たちもいる。

「良いのか？ こんな所にいて？」

「艦隊の護衛か？ 構わん」

「オロの命令は絶対なんだろう？」

「オロ様自体は、途中で帰られた。艦隊も随時撤退する。こんな所で無駄に戦力を削られるのも癪に障られる様だ。だから私は、お前と十分に決着を付けられる。この間見せられた、剣の正体も気になるしな」

ウフエイトウの言った剣の正体。

それは、

(無想活殺の事だな?)

アシユマはそう思った。

だが、秘奥義をそう何度も見せるわけには行かない。

アシユマは秘剣・流星で対峙する事に決めた。

他の七人のマスクド達はアシユマとウフエイトウの戦いを見ていた。

が、オルバニアン、アルミナ、シユンマ、レンヌ、ジーク、ピツシユ、ガンロクらが魔法、ウイングで飛んできた。

「おお！ やって来たか我が好敵手よ」

ナイゲルと呼ばれるマスクドが、オルバニアンに向けて吐いた言葉だ。

「何を言ってやがる。天敵の間違いだろ？」

「人間風情が何を言ってやがる」

「その人間風情に苦労しているのは何処の誰だよ？」

「何を言うか！ この小童こわっばが！」

その言葉をを合図に、各所で戦いが始まった。あたりは正に、乱撃の様相を見せていた。

その中で、一つの組が、静けさを保っていた。アシユマとウフェイトウである。

ウフェイトウが、剣を抜いているのに対して、アシユマの鬼虎はまだ、鞘のうちにあつた。

ウフェイトウは、前回の戦いで、自らは傷つきつつも、秘剣・流星に関して恐れを抱かなくなっていた。

相打ち覚悟で戦えば、こちらの方が有利なのだと、悟ったからだ。もう、ウフェイトウは、脳天からの真つ向唐竹割しか、頭に無かつた。

アシユマは秘剣・流星でその事が分かったが、よけられる物ではない事を悟った。

その上で、秘剣・流星を使ってウフェイトウの首根を断つか。しかし、アシユマはこの場で死ぬ訳にはいかない。

ここに、アーチエルが居ないから、復活ができないからだ。アシユマは迷った。

それが剣に現れる。

「どうした？ 迷いが見えるぞ？ 死に臆したかアシユマ・アトー」
「臆する事もあるうよ。人ならばな」

「人というか。自分をして、人というか。笑い話にもならん」
「笑わば、笑え」

そして、依然アシユマは迷っていた。
秘奥義、無想活殺を使うかどうか。

いまは、秘剣・流星を見切られかけている。
そして以前は秘奥義を使って逃げられた。

そして、もし秘奥義まで見切られたならば、アシユマに勝ちは無くなるのではないか？

そのような事が頭をよぎる。

「参るぞ」

アシユマはその言葉で迷いを捨てた。

今ここで、秘奥義を使わねば命が断たれる。

アシユマは秘奥義、無想活殺を使った。

一剣が万剣となり万剣が一剣に帰る。

明鏡止水、無想剣。

周りの物と一体となり自らを同化させる。

無想の一刀が相手を屠る。

故にアシユマ最強の技と言えた。

最早、位と言っていいだろう。

この境地に達する者は中々居ない。

一瞬にして周りの雰囲気が変わる。

ウフェイトウはそう思った。

回りの様子が変わると分かっただけ、それだけでも達人級だ。

普通の者にはそれが分からない。

ウフェイトウは、何かが起こると直感した。

ウフェイトウの勘が、何か危険だと察知させた。

見方の艦艇は全て安全圏に逃げた。

これ以上ここに居る意味もない。

「皆の者！ 引き上げじゃあー！」

今日も今日とて、ウフェイトウが叫ぶ。

「何だ！ ウフェイトウ！ あと少しだったのに！」

ナイゲルが愚痴を言う。

ナイゲルはオルバニアンと対戦していた。

「ここに居れば、アシユマが皆を食らうてしまう」

「それは言いすぎだ。ウフェイトウよ！」

ギバが言う。

「嘘だと思つる者はアシユマと戦ってみよ」

「いいのか？」

「冗談だ。本気にとるな。だが、アシユマが皆を食らうてしまつのは、間違いない」

「冗談では済まされねえぜ！ マスクドが、一度言った言葉だ！！
引っ込みはつかねえぜ！！」

「ギバ……死ぬぞ!?」

「それも悪くねえ！ 太く短く！ それもまた人生！
かなり豪快な性格のようだ。」

「さあ、いざ戦わん！ アシユマとやら」

「ウフェイトウの言った通りだ。死ぬぞ？」

「口より腕を動かせ！ もう戦いは始まっている」
そう言っつてギバはウォーハンマーを振り回す。

かなりの強力ちからのようだ。

アシユマは秘剣・流星を使った。

ギバは途端に動けなくなった。

アシユマはただそこに佇んでいた。

隙があるようで隙が無い。

動けば斬られる。

そんな錯覚に囚われた。

だが、事実には思えた。

(アシユマと言う者は、ここまで使う奴なのか)

ギバはそう思った。

「どうした？ そのハンマーは飾りか？」

アシユマはギバを挑発する。

「待て、ギバ！ 奴の誘いだ」

「おのれ！ 小僧！ 言わせておけば!!」

今の一言で、ギバは冷静な判断力を失った。

ギバは突進した

アシユマは居合いから鬼虎を抜いた。

ギバは胴を存分に撫で斬られ、激痛に歪んだ顔をこちらに振り向かせ、そして頭蓋を水平に斬り割られた。

「ギバ……」

ウフェイトウは残念そうに呟いた。

皆暫く無言のままだった。

「ウフェイトウの言う事だ。あの通り嘘ではない。ギバの事は残念だが、帰ろう」

レトウというマスクドが声を出す。

そして、マスクドたちは去って行った。

「本当に恐ろしい奴らだぜ。まったく、もう。途中でアシユマと戦っているような錯覚に陥るぜ。強すぎて」

オルバニアンがぼやいた。

「そろそろ封印を解くときかな？」

続けてオルバニアンが言う。

「それは任せるが、死ぬなよ？」

アシユマが真顔で言う。

「おいおい、死なねえ為にする事じゃねえか。勘違いをしないでくれよ」

オルバニアンが、困った顔で言う。

「そうだな。そう言う事だな」

アシユマは、マスクドの飛び去った方向を、見ていた。

第五節 迷いのアシユマ

オロは、バヴェルが出来上がるまでの『繋ぎ』として、殻兵器の製造に乗り出した。

長らくオロは、殻兵器を製造できないで居たが、アヘイビア崩壊後、その技術者が大量に入植してきた。

これが為に、オロ・エバス国は殻兵器の実現化に成功した。だが、これを兵器とするのには、致命的な弱点が露呈した。殻兵器には脳核を必要とする。

それが、人間の生身の脳でも、クローンの脳でも。

その脳核がミサイルなり、砲弾なりに詰め込まれたとする。問題はここからだ。

その、脳核が詰め込まれた砲弾なり、ミサイルの発射のときの加速度に耐えられないのだ。

それが故、只の爆弾を作る事になった。

だが、それが馬鹿にならない。

一旦、空港なり港なりが検閲をすり抜けるとこれはもう大変だ。

少し大きめの電子ジャーのような物が、都市を一つ丸ごと、ハイジャック出来るのだ。

こう言う事態になると大変だろう。

きっと、街はパニックになり、大混乱に陥るだろう。

それがもし、^{クリスタルパレス}王宮市で起こったなら？

都市機能は麻痺し、それは全国へと波及するだろう。

いざとなったら爆発させても良い。

これを受けて、オロは殻兵器の量産化を始めた。

ほぼ全て、爆弾型の殻兵器だ。

出来上がりのほやほやの殻兵器を持って、海原に行く事になった。行く事になったのは、勿論マスクド……エルファの騎士団を率いるウフェイトウ、そして以下七名のマスクド達だった。

途中までは船で、そこから先はボートで海岸線を目指す、エルフアの騎士団。

夜の闇に隠れるように、ノリトレアの浜に近付いて行った。そして殻兵器を持って、浜から上がった。

「誰かに見られてるって事はねえよな？」

シャケルウが周りを見ながら言う。

「何ビビッてんのさ！ 男だろ？」

紅一点、イラが言う。

「別にビビッてなんかねえよ！」

シャケルウが返す。

「無駄口を叩いてないで行くぞ！」

ウフエイトウが皆を引き締めた。

時間は少し遡る。さかのぼる。

そのことを感知した人間がいた。

デイーヌ・アデュニ王子である。

それを、アルステインに、忠告しに王宮にやって来た。

デイーヌは直ぐに通された。

そして、アルステインの前で言う。

「ノリトレアに殻兵器が持ち込まれた」と。

「それは本当ですか？ アデュニ王子」

「おそらくは。東の浜……そうですね……マクルイナの浜辺りに上陸するでしょう」

「刻限は？」

「もつそろそろ」

「そ、それでは間に合わないのでは？」

「済みません。使えない予知で」

アデュニ王子は自らに嘆息した。

「いえ、それはそれで重要な情報ですから」

アルステイーンは慰める。

「済みません」

「で、王子、その者達は何者ですか？ まさか……」

「ええ。そのまさかです。エルファの騎士団……マスクドです」

「その目的は？」

「この王宮の破壊です」

「ふわあああつ。まだ眠みーぜ」

オルバニアンは眠そうだ。

「あんだよ、こんな時間に呼び出しやがって」

「殻兵器を持って、エルファの騎士団が来ます」

アルステイーンが言う。

「あん？」

「だから、殻兵器を持って、エルファの騎士団が来ます」

「……………」

「……………」

「あんだって!?!」

「だから、エルファの騎士団ですよ」

「あんだって!?!」

「だからエルファの……………」

「んなことあ分かっているよ!! 最近あいつらとばっか戦ってねえか!?! 命がけなんだぜ!?! こちとら!!」

「オルバニアン、とり合えず話の先を聞きましょう?」

アルミナが言う。

「うんな事、言っただってよう……………」

「いいから!!」

「お、おう……」

「では行きます。エルファの騎士団は今から二時間程前、マクルイナの砂浜からこの国に侵入。殻兵器を持って、この宮殿を目指しています」

アルステインが言う。

「その情報は、何処から出たのじゃ？」

キュポアが訊く。

「デイーヌ・アデュニ王子の予知です。

「成程。で、その先の予知はどうなっておるのじゃ？」

「見えないそうです」

「なんじゃ！ それでは駄目ではないか？」

「そんな事は無いと思いますよ？ キュポアさん」

「何故じゃ？ シュンマ」

「この国に殻兵器が持ち込まれたか、持ち込まれていないか。敵は誰だかが分かっているだけでも、その分だけこちらに有益に、事が働きます」

「そうなのかのう？」

「まあ、いい。どうしたらいい？ アルステイン」

アシユマが質問をする。

「もう直ぐ、宮殿の大広間にマスクド達が来ます。そこを拠点にする為にです」

「バカか？ 何で拠点なんか作る必要があるんだ？」

オルバニアンが頭を捻る。

「攻め手の中心を、決めなかったんでしょね。殻兵器を置く場所の」

「はん！ 何が攻め手の中心だい！ 賊のくせして」

「じゃあ、早速待ち伏せしましょうか？」

シュンマが言う。

「あんだ、良いのかい？ 王族のくせして……」

オルバニアンが言う。

「ああ、そうだった。僕はもう、手出しできなかったんだ。ああ、あのレトウとか言う人と決着が付けられなかった事が心残りです」

「シユンマ！ お主はそんな事を言っ……！」

「キユ、キユポアさん！」

座がどつと沸く。

「それを言うなら、レンヌも王族だぞ？ しかも次期王位を継ぐ嫡流だ」

リイナが言う。

「リ、リイナ！ いま、そんな事を言わなくても……」

レンヌが慌てる。

「そうだなあ。レンヌも戦線に引つ張り出すのは危険と言うわけか」
アシユマが言う。

「そ、そんなアシユマさん……」

その時シユンマが、

「僕の役目、引き継いでくれませんか？ アシユマ様？」

と、願いだした。

「うむ。仕方なかる」

と、アシユマが言う。

すると仕方なさげに

「アシユマさん僕の分も宜しくお願いします」

と、レンヌも言う。

「二人とも殊勝で宜しい」

すると今度はアーチェルが

「また、アシユマさまは、危ない事を背負い込んで！」

と、怒る。

また、座がどつと沸く。

「まあ、リラックスするのはここまでとして、ここからは気を引き締めていくぞ？」

アシユマが場を引き締める。

ここでは、皆が忘れていてる。
本人ですら忘れてる。
そう。

オルバニアンもまた王族である事を。

エルファの騎士団が王宮の前に現れた。
マスクド達だ。
人気は無い。

王宮の大広間までは道筋が多少複雑になる。
が、マスクドたちには関係ない。
魔法ウィングでひとつ飛びだ。
だがおかしいのは、その反応だ。

いや、言葉を変えよう。
反応がなさ過ぎるのだ。
ウフエイトウは、嫌な予感がした。
が、ここまで来た以上やるしか無いのである。
何せこちらは、殻兵器を持っているのである。
下手に手出しは出来ないはずである。
そうこうしているうちに、宮殿の大広間がある建物の前に来た。
扉が大きい。

その扉を開いて大広間の中心に進む。
妙な気配がする。

「どうした？ ウフエイトウ？」

「いや、何か妙な気配がする……………」

「臆病風に吹かれたか？ ウフエイトウ？」

「そうでは無い。お前たちは感じぬのか？ この気配」

「いや…………？」

「そうか、それならば……………」

「いんや、その感じ、間違っちゃアいねエぜ」

「何だと？」

今、入ってきた扉と、マスクド達を遮るように立ちはだかったのは、オルバニアンとアルミナだった。

「き、貴様ら……」

一斉に注目が集まる。

「自分達が強いと思つて、気配に気付かねえたあ、ちつたあ、甘くはねえか？」

「おのれ、言いたいだけ言いおつて……」

「もつと言つて欲しいか？」

「人間風情が……」

「その人間に、いつも退散させられている奴らの、言つて何か？」

「お前に追いつ返されているわけじゃあねえぜ？ あのアシユマとが言つ『鬼を持つ者』に追いつ返されているだけだ！」

「んだとう？」

オルバニアンは憤つた。

その時アシユマ以下全員が揃つた。

シユンマとレンヌはいなかったが

「オルバニアン、冷静になれ」

アシユマが言つ。

「おや？ 今日は、あの小僧がいないな？」

と、レトウ。

「『あの小僧』？ シユンマのことか？」

オルバニアンが言つ。

「そういう名前だったか？ それならそうだ」

「随分と投げやりだなあ」

「そういえばこっちの、坊やもないよ？」

イラも言つ。

「こつちの坊や？ レンヌの事か？」

オルバニアンがわざわざ応えてやる。

「ああ。そうそう。その坊やよ」

「今日は二人とも欠席だぜ？」

「け、欠席？」

「ああ。欠席」

「なんで？」

「そりゃあ……」

「オルバニアン！ 言わなくて言いの！」

アルミナが注意する。

「あ、そうか。ま、俺一人いれば、大丈夫だったことさ。」

「ウフェイトウ。この通りだ。相手がいなくなった。アシユマと戦わせてくれ」

「それは駄目だ。レトウ。掟に反する。今回は見学でもしている」

「俺は無視かい!!！」

オルバニアンが怒る。

「ギバ等は戦ったではないか」

「だからこそだ。もうこれ以上優秀なマスクドを、失うわけにはいかん！」

「もう終わったか？」

アシユマが問う。

「ああ。終わった」

ウフェイトウが答える。

「では、始めるか……」

アシユマが気だるそうに言う。

「待て。今回お前たちは手が出せない。何故なら……」

「殻兵器があるからか……」

「我々とアシユマ、お前は平気だろうが、他の者は一たまりもあるまい。」

「卑怯だぞ！ マスクドは正々堂々と戦う事を、旨とするんじゃないやなかつたのかよ!?!？」

オルバニアンが叫ぶ。

「これは戦略だ。卑怯等と言うものではない」

ウフエイトウはさも当然のように言う。

「それでも、マスクドかよっ！」

「……………」

「正々堂々と戦えッ！！」

「よかるう」

ウフエイトウが応える。

「ではお前との戦いは我とだな」

オルバニアンの前にナイゲルが剣を抜き、立ちほだかる。

「確かオルバニアンと言ったな」

「そっちこそ、確かナイゲルと言ったな。もうそろそろ、お前との

対戦も飽きたぜ」

「それはこちらの台詞よっ！」

ナイゲルは剣を上から振り上げてきた。

それをオルバニアンが逸鉄で受け止める。

そのまま鏢迫り合いを行う二人。

「いつもながら見事な刀だ。その刀でなければ、刀ごとへし折って、

我が『人馬鬼』をお前の頭蓋に、叩き込めるものを」

「おいおい、見事なのは刀だけかよ？ ……俺の腕も認めてくれよ」

「……………そうだな。それは否定はせん！」

そう言っつてナイゲルは脚でオルバニアンの腹部を蹴ってきた。

「ぐっっ！」

よろけたオルバニアンに上段からの攻撃が迫ってきた。

「舐める……………なあっ！！」

オルバニアンは上段からのナイゲル斬撃をかわして胴を抜いた。

だが、ナイゲルの強力な念導境界面に阻まれて、ナイゲルを斬る

事は出来なかった。

「ち！」

オルバニアンは悪態をついた。

二人は振り向いて対峙した。

距離は遠間。

徐々に間合いを詰める

「俺の胸を抜くとはな……初めてだ。このような相手に出会うのは嬉しいぞ、オルバニアンとやら」

「へん！ 上段から物を言うような事しやがって、今にほえずらくなよ」

「既に、負け犬の遠吠えの様な事を言う」

「負け犬の遠吠えかどうかは、直ぐに分かるぜ」

そしてオルバニアンは何事かをぶつぶつと呟き始めた。

「マジックブレイドか？ 俺には効かんぞ？」

オルバニアンは呟きを終えた。

「一体何を出すのやら」

ナイゲルはじりと間合いを詰めた。

オルバニアンも間合いを爪先で刻むように詰める。

構えはナイゲルが八双、オルバニアンが上段の構え。

「天刀稲妻斬……！」

オルバニアンはそう呟いた。

「それがお前の必殺の技か」

ナイゲルが言う。

そしてゆっくりと剣を右の脇構えに移して行った。

間合いが一足一刀の間合いになったとき……。

「ブースト！」

オルバニアンが叫んだ。

「ブーストだと……！」

ナイゲルが矢張り叫ぶ。

「マジックブレイド……！」

「……！」

オルバニアンは二つの呪文を唱えていて、最後のトリガーキーワードを止めていたのだ。

超高速のマジックブレイド。

咄嗟の事で幾らマスケドでも対応できなかった。

「うがあっ!!」

ナイゲルは袈裟に斬られた。

「うっ、ぐっ……見事だ……」

「はあ、はあ、はあ……」

「……気力を使い果たしたか……俺も……」

そう言っただけでナイゲルが回復しようとしたその時、オルバニアンが馬乗りになってナイゲルの首をねじ斬ろうとした。

まだマジックブレイドの効力が少し残っていたのである。

「ぐひゆる！　ぐぶっ！　やめ……ごぶっ!!」

オルバニアンは返り血を真っ赤に浴びながらナイゲルの首を取った！

「首、取ったりい!!」

オルバニアンが叫ぶ。

一瞬皆の動きが止まる。

が、次の瞬間から又斬り合いが始まった。

周りは混戦模様だ。

「ええい！　これでは埒があかん！　殻兵器用意!!」

ウフェイトウが叫ぶ。

「アンタ卑怯よ！　自分が負けそうになると、殻兵器なんか取り出して!!」

今度はアルミナが叫ぶ。

「今回の我々の任務は殻兵器の使用だ。お前たちと戦う事ではない」

「な・な・な、ぬわんですってえ!!」

「俺も失望したぞ。ウフェイトウ……」

アシユマが言う。

「何とでも言え。マスターの命令は絶対なのだ。レトウ。殻兵器を起動させる」

「は」

「もう、その殻兵器は使えません」

その言葉が大広間に響いた。

「なに？」
ウフェイトウが言葉を発する。
「あなたは、確か、アルルマ・サンファと言ったわね？」
「ええ。アルミナさん。その殻兵器はもう使えません。私がおのうに致しました」
「馬鹿な！ レトウ！」
「駄目だ！ ウフェイトウ！ 起動しない！ うんともすんとも言わないぞ！」
「何だと！？ 貸してみる」
「おっと動くな。ウフェイトウ。俺の鬼虎が貴様の首を狙っているぞ」
「う……」
「大人しく帰ればよし。さもなければ……」
「……」
「どうする？ ウフェイトウ」
「皆の者、退くぞ！」
「……」
「どうした！？」
「ナイゲルをそのままにして退くのですか？ ウフェイトウ」
「安心しろウフェイトウ。お前の仲間の亡骸はちゃんと俺が埋葬してやる」
アシユマがそう言った。
「わかった。者供、退くぞ！」
そうして、マスクド、エルファの騎士団は去って行った。
アシユマがオルバニアの側に来て、
「よくやったな」
と、言った。

アルステイーンは国元連を通して、オロ・エバス国以下連合国側

に対して、ドメル条約を根拠とする殻査察を要求した。

オロ・エバス国は、ドメル条約に加盟していないから査察を受け入れる根拠は無いが、連合国側は条約の下査察団を受け入れる必要がある。

が、これを嫌った連合国側は、次々と国元連を脱退。

理由は、

「国元連は最早、国家間の平等の話し合いの場で無くなった」

からだと言う。

当然査察は無視された。

逆に言えば殻兵器、若しくはそれに準じる兵器を持っている、と、言うことになる。

しかし、レキシタニア、ノリトレア以下、オロの魔手に関わっていない国々からの激しい非難の中、オロは殻兵器を使うことを控える事となる。

さて。

アルルマ・サンファである。

この間のマスクドによる殻兵器テロだが、何故殻兵器が無効化されたか。

彼女はこう話す。

「殻兵器に対して語りかけた」と。

つまりは殻兵器自身に語りかけて、殻兵器を発動しないで欲しい。こう言うことらしいのである。

流石はテレパシストと言った所か。

不思議な少女だった。

雰囲気は、どこか、アーチェルに似ていた。

そして、レンヌとシュンマ。

彼らは今まで当たり前のように戦ってきたのだが、それぞれ王位を継ぐ嫡流、嫡子なのだ。

一つ間違えば国が危うくなる。

そういう意味合いでレンヌとシュンマは今度から戦いから外される事になった。

「何か釈然としないなあ」

そう言ったのはレンヌだ。

「僕もそうなんですよ」

と、シュンマも言う。

「くふふふ。こつちにいらっしやうい」

アルステーンが手招きする。

「僕の気持ちが嫌と言う程分かりますよ？」

オロは暫らくノリトレアにこだわるのを止めた。

オロ流に言えば、コストに見合った成果が出ていないとの事。

なので、ノリトレア以外で未だ手付かずの国々を、平らげる事にした。

つまりはオロは、ノリトレア統合軍を無視して、他の諸国を征服するのに専念する訳だ。

暫らくは。

オロが先ず攻めるは、リスパダハル共和国。

ここは天然資源、鉱物、魔導石をよく産出する。

言わば、天然資源の宝庫だった。

これを奪い取らない訳がない。

オロの魔手は、リスパダハルを鷲掴んだ。

オロの艦隊・魔導騎兵が雲霞の如く沸き起こる。

嵐が孕む黒雲のようだ。
魔導騎兵に至っては、数は二十万を下るまい。
最初は艦対戦だ。
お互い砲を打ち合う。
届くのは専らオ口の艦だ。
すでに緒戦で負けが見える。
段々砲撃が激しくなる。
リスパダハルの艦艇は髑られ者だ。
徐々に攻撃力を奪われていく。
意図的に。
見せたいのだ。
圧倒的な力を。
オ口は。
リスパダハルに。
そして、屈服させたいのだ。
リスパダハルの民を。
心を。
身体を。
精神を。
折ってしまいたいのだ。
残酷な遊戯だった。
権力を持つ物だけが許される血の遊戯。
オ口は自らの艦隊の行動に愉悦し酔っていた。
自分の手が動く。
その通りに艦が動く。
その通りに敵を葬る。
これほど愉快的なゲームがあるうか。
もう一度言っつ。
オ口は酔っていた。

リスパダハル共和国は落ちた。
民も落ちた。

オロの手に。

オロはリスパダハルの支配者となった。

血の粛清が始まった。

それも、オロの遊戯でしかなかった。

リスパダハルの潤沢な地下資源が次々と湯水の如くオロ・エバス
国に流れていく。

そしてその資源はバヴェル建造に使われるのだ。

オロはリスパダハルに代官（監察官）を置いた。

オロは益々栄えた

例えば一体幾人の人間がバヴェルを建造していると想像できるだ
らう？

間近にバヴェルを見た者が何人いるだろう？

バヴェルは地中深くで建造されているのだ。

全容を知る者など誰もいない。

そう、オロでさえ全容を見ることが出来ないのだ。

ただ、自分の机の上にある立体映像の出来かけのバヴェルしか。

バヴェルは実の所、六割方〜七割方が出来ていた。

稼働自体なら問題は無いだろう。

だが完璧主義者のオロは、勿論完成を待った。

オロは次に目標を決めた。

東南海洋連合国家群である。

それを知った東南海洋連合国家群は恐怖した。リスパダハルの惨状を見て恐怖したのだ。多くの血が流されたわけではない。

国民の威厳と誇りを踏みにじられた事に、恐怖したのだ。東南海洋連合国家群は、ノリトレア以下統合軍に救援を求めてきた。

ノリトレアはこの事を直ぐに承諾。艦隊派遣をすぐさま決めた。

東南海洋連合国家群の東の海で、会戦が行われようとしていた。ノリトレアはクーロン共和国、イーハン国、との統合軍。東南海洋連合国家群の軍も加わった。

軍勢凡そ千。

魔導機兵は十万。

対するオロ連合軍。

艦艇は三千。

魔導機兵に至っては三十万。

「これだけで負けそうだ」

ルー・ウィロン自らが、ポロリと言葉に出してしまった。

まあ、側近には聞かれなかったが。

しかし、この後衝撃の事実が。

なんと、ノリトレア陣営に止めを刺すがべく、コール、ンアール、プット、ガドラ、ブラ、ポガツサ、の六要塞を引っ張ってきた。

オロ陣営は、ノリトレア近海に居るはずの六要塞を、引っ張ってきたのだった。

加えてノリトレア陣営は、この六要塞を牽制する為、三要塞を残してきたのだ。

今となつては、こちらの陣営の三要塞を呼ぼうにも、間に合うまい。

「しまった！ その手があつたか」
嘆くのは、ルー・ウィロン。

肺腑の底から、搾り出すような声で呟いた。
額には、脂汗が流れ出る。

ノリトレアの総旗艦である、ハーティアー三世号から無電が入る。
主はもちろんアルステーンだ。

『よ！ おっちゃん元氣してる？』

「アルステーンか。この状況で元氣に出来ていたら、それこそ名将じゃわい！」

『じゃあ、名將にさして上げましょう』

『どうやって？』

『まずは全艦でオロ一点に、特攻を掛けます。その時におっちゃんには、そのカリスマで必ず勝てるよ、皆を鼓舞してください』

「アルステーンお得意の、錐の戦法か！」

『その氣になつた兵は強いです。是非そちらの方、お任せしましたよっ。』

そういつて無線は勝手に切れてしまった。

「ペテン師め！」

そう吐き捨てると、続いて、

「ペテン師の片棒でも担いでやろうじゃないか！」

と、まず自らを鼓舞して、それから

「ノリトレア統合軍の諸君に告ぐ。私は総司令官のルー・ウィロンである！！」

これだけで戦士の士氣は昂ぶつた。

「統合軍の諸君。われわれは勝てる！ 嘘を言っているのではない！ 合理的な根拠があるのだ！！ 一見すれば敵の数のほうが何倍も居るように見える。が、しかし！！ 敵はその数が多い故に、分散せざるをえなかつた！ 対して我々は、まるで、そう……錐の如く密集し、彼のオロ・エバス一点だけを落せばよいのである！！ これは何を意味しているか？ 局地的に言えば我らの状況の方が有

利な事この上ない！！ 大将を失った兵はどうなるか？ 右往左往するだけで何も出来はしない！！ 故に我らはこの戦に勝つ事が出来るだろう！！ 如何か？ 諸君！！」

『おおっ！！』
すでに士気は最高潮に高まり、勝鬨からどきの声を挙げるところすらあった。

「貴方つて、ホント口八丁手八丁で生きてきたのね？ アルステイン」

エファールが熱い吐息で、アルステインの耳元に囁いた。

「そんな事ないですよ。現にこうして兵の士気を上げたのは、ルーのおっちゃんじゃないですか」

「そのルー・ウィロンを乗せたのは一体誰よ？」

「あれは、おっちゃんが勝手に乗せられただけで、僕は何もしていませんよ？」

「またあ。この策士」

外ではすでに散発的な戦闘は行われていたが、本格的にノリトレア統合軍が動き出すと加速度的に戦闘の頻度が高まっていく。

その中をこれもまたノリトレア統合軍が加速度を付けて、一気にオ口の居る旗艦アプラスへと突っ込んで行った。

傷ついた僚機や僚艦はそのままに、生き残っている艦艇だけで特攻を掛けていく。

傍から見れば、非人道的な作戦だろう。

アルステインが最も嫌う、戦法に違いない。

が、しかしこのままでは、数に頼んで押し潰されてしまうだろう。だから、敢えてこの戦法を取った。

死中に活を、見出したのだ。

猛スピードで、オ口の旗艦を目指す、ノリトレア統合軍。

それは正に円錐形の陣取りだった。

アシユマはその最先端に居て、念導境界面を張り続けていた。まるで、巨大なエネルギーの塊の様である。オロは慌てた。

軍勢五百の大群が、とある一点、それも、この自分を目指して、突っ込んでくるのである。

「壁を作れ！ 押し包んで、潰してしまえ！」

壁を作ったのは作ったが俄か作りの防壁等、直ぐに蹴散らされ、オロに直ぐに迫ってきた。

しかし、壁として立ちはだかったのは、七人のマスクド、エルファの騎士団であった。

七人の作る念導境界面はノリトレア統合軍の突進をとめてしまった。

ノリトレア統合軍は大混乱を呈した。

だが、マスクド達も只では済まず、それぞれ力尽き退いて行った。この大混乱を収める為に、アシユマは気弾を放つ事にした。

居合いの形のまま気を出るだけ集め、敵の気を持つものをイメージし、一気に鬼虎を引き抜いた。

すると幾線條の光の束が、敵に目掛けて曲線を描きながら、次々と撃破していく。

そして敵も大混乱に陥った。

「ルー！！ 大勢を立て直すのは、今しか無いぞ？」

「分かった！！ 錐の陣形を立て直せ！ 多少いびつでも構わん！」

ルーの号令は絶対だ何とか錐の陣形を立て直した。

「このまま突っ込め！ オロにぶち当たれ！」
ルーは号令した。

錐の艦隊は文字通りオロの旗艦に突っ込んだ。

それと同時に、一人才口は逃げた。
なりふり構わず。

恐怖に駆られながら。

オロの旗艦は瞬く間に、貪り食われた。砲撃に、瞬く間に、蜂の巣にされた。そして、爆散した。

「このまま突っ切れ！」

ルー・ウィロンが叫ぶ

痛み分けだった。

こっちも、向うも、相当の被害を受けた。

ノリトレア統合軍はそのまま行き過ぎた。

後日、東南海洋連合国家群に、オロの軍勢が攻め込んできた。

イーサ教国圏側から、攻めてきたのだ。

「よくも私に恥をかかしてくれたな」

オロが言っ。

東南海洋連合国家群は、瞬く間に攻め取られた。

東南海洋連合国家群は、オロの恨みもあつてか徹底的に破壊し尽くされた。

その上で街の再建が始まった。

代官を置いて。

東南海洋連合国家群は、オロの手に落ちた。

オロの目はすでに次の国へと、向いていた。

ノーツ連邦である。

北極を介して隣接しあうこの国同士は、オロ・エバス国がまだ、アヘイビア連邦共和国と呼ばれる頃から、まるで水と油のように忌み嫌い合っていた。

双方とも他に並ぶ物の無い、超軍事大国同士。

長らく、均衡が保たれて、緊張した関係が続いていた。

その均衡が今、崩れ去ろうとしていた。

ノーツ連邦の国境線にそれは近づきつつあった。これまでに無い規模で、それはやってきた。それは艦隊だった。

オロの新しい旗艦ンディオとともに。いきなりの来訪者……いや、侵略者にノーツ連邦は慌てふためいた。

前線は延びきっている。

どこから攻められても対応できるように、円周に。だが、それが仇になった。

オロ連合軍は、堂々と最短距離の北極圏を乗り越えて、一路首都のメシエクに向かった。

途中、散発的に戦闘が起こる。

しかし、そんな物は数で圧倒して、粉碎してしまう。最早敵無し……そんな形容が似合う。

「余に勝てる者が居るのか？」

そこまで言わしめても、違和感が無い。

オロに王者の風格がいつの間にか備わっていた。

ノリトレアのアルスティーン国王が、ノーツ連邦のウーリン書記

長に救援の話を持ちかけるが、書記長はこれを拒否。

書記長の意地なのか怨讐なのか。

とにかく、救援を受け付けない。

アルスティーンは迷った。

自国民を投入してまで、助けなければいけない相手なのか？

相手は救援を、拒否しているではないか。

自国の戦力を温存しておく方が、賢くないか？

自問自答していた。

その答えを教えてくださいたのは、アーチエルだった。
「人は皆等しくあるべきです」と。

この言葉にアルステインは、目が見開かれた思いがした。
早速アルステインは、艦隊の体裁を整えて発進させた。
勿論アルステインが、艦隊と一緒に発進するわけではない。
が、しかし気持ちは、一緒のつもりだった。

その想いは、イーハンの王、シユンマも同じだったろう。
シユンマ王。

普段は、穏やかな表情を崩さないが、内に秘めたる熱い物、闘志
というものは隠し切れず、好戦的な王として皆に評されるようにな
る。

また、善政を布く王としても、民に慕われるようになる。

その王だが、こつそり旗艦に乗って、発進してしまった。

キュポアは止めたが、止めきれものではないと判断したのか、
一緒に乗り込む事に決めた。

そして、レンヌである。

レンヌは身分としてはノリトレア預かりの身だが、青龍号に乗っ
て発進してしまった。

勿論リィナも一緒である。

さて、戦闘だが、小競り合いが各所で起こっている。

その数、ノーツ連邦は五百の艦艇、約五万の魔導機兵。

対するオロ連合軍は艦艇は三千、魔導機兵に至っては三十万にも
なる。

一対六。

絶望的な数字である。

その上オロはコール、ンアール、プット、ガドラ、ブラ、ポガッ
サの六要塞を引き連れてきた上に、更に……

「艦長！ こちらの攻撃が全くあたりません！！」

「何だと！？」

と、ノーツ連邦の攻撃が封じられていた。

これは勿論マスケドの恩恵なのだが、相手にはわからない。

無駄な砲撃を繰り返すだが、逆にオロの艦艇に反撃されて、次々と沈んでいく。

多勢に無勢、その上こちらの攻撃が効かないとあってはノーツ連邦軍としては、堪らないだろう。

ノーツ連邦軍の数は、瞬く間に減って行った。

そこに到着するクーロン軍五百、魔導機兵五万。

オロ艦隊の背後に着いた。

図らずもオロ軍を挟撃する形になった。

そして、オロの旗艦はクーロン軍からは丁度丸見えの位置にいた。

「防壁を作れ！ 余を守れ！ そして敵を押し包んで潰してしまえ」

オロはそう命令した。

図らずもオロの軍勢が、二つの球体になって、敵を押し包んで、

その中心にオロがいるところに……。

「第三勢力です！」

「第三勢力？ 不明瞭な言葉は使うな」

オロが言う。

「は。どうやらノリトレア・イーハン統合軍のようです」

「『どうやら』？」

「いつ、いえ、ノリトレア・イーハン統合軍です。わが群の側面をついてきます」

「側面とは……無防備ではないか？」

「はっ……そのようで……」

「ならどうする？」

「は。クーロン人民共和国にあてている兵のうち五割方割いてノリトレア・イーハン統合軍にあてるのが宜しいかと……」

「では、そうせい」

オロ連合軍はクーロン人民協和国軍に割いている兵のうち半数をノリトレア・イーハン統合軍へと割いた。

艦首を向けて突進してくる艦隊。砲撃を開始してきた。

プラズマの光の矢はノリトレア統合艦隊の手前で阻まれる。

幾度と無く見慣れた光景だ。

これの主因は彼にある。

アシュマ・アトーだ。

アシュマの作る念導境界面が、なんと約七百五十の大群の攻撃を、一身に受けている。

それでも彼は平気な顔をする。

アシュマが凄いのか、鬼虎が凄いのか……。

が、こちらの攻撃も、敵には届かなかった。

マスクドが居るのだ。

マスクドがこちらの、攻撃の邪魔をしているのだ。

どこのマスクドか？

言うまでも無い。

エルファの騎士団、オロのマスクドだ。

そしてやってくるエルファの騎士団団長ウフェイトウ。

魔法ウィングを、使っている彼は、アシュマの前に舞い降りた。

美男子である彼はまるで天使のようだ。

「アシュマよ。こうして出会うのは何回目かな？」

ウフェイトウがアシュマに語りかける。

「さあな」

アシュマはそっけなく答える。

「どうやらウフェイトウは一人で来たらしい。」

「他の取り巻き連中はどうした？」

「取り巻き連中など呼ぶな。それを聞いたら怒るぞ？ 奴ら」

「他人事のように言うな。マスクドの結末は固いと思ったが……」

「だから我が一人でお前のところに来ている」

「信頼の証という訳か」

「そうだ。向うでは、我の帰りを待って、皆で念導境界面を張っている」

「何人掛りだ？」

「六人だ」

「そうか」

「さて、やるか」

「結局そうなるのか」

「当然だ。貴様と我とは宿敵同士。戦いあわなければならぬ運命」

「誰が決めた」

「『鬼を持つ者』とマスクドの宿業だ」

「だから何故戦わねばならん!？」

「『鬼を持つ者』の宿業と言った!!! …… 古来、『鬼を持つ者』

は、ここまで強くは無かった。我らは『鬼を持つ者』を狩る者としてその名を欲しいままとした。我らは世界を破滅から守る為『鬼を持つ者』を狩った」

「さて。それでは『鬼を持つ者』が、まるで悪の権化のような言い様ではないか。そも、悪の権化は、バヴェルであり、マスクドではなかったのか？」

「違う。『鬼を持つ者』は、過去、世界を破滅に導こうとした者が創った破壊の権化だった。我らは『鬼を持つ者』から、世界を守る為に創られた。また、バヴェルも、『鬼を持つ者』から世界を守る為に創られたものだ」

アシユマは言葉を失った。

正義云々で戦ってきたわけではないが、自分の出自が破壊の限りを尽くす為に創られたものであるといわれれば、それなりにシヨックもあつたろう。

そして、アシユマは口を開く。

「確かに宿業だな。事実ならば」

「事実だ。だから、我らは『鬼を持つ者』を狩る。しかしお前のそ

の強さは異常だ。普通では考えられないほどだ」

「そうか」

「少し喋りすぎたようだ。お前を生かす時間が延びてしまう。では、参る」

「……………」

「最早、喋らぬか……………」

ウフェイトウは二刀の双正眼に構える。

対するアシユマは居合いに構え相手を待つ。

その間にも艦隊戦は続く。

未だにアシユマの念導境界面は生きておりオロの連合艦隊の攻撃を未然に防いでいた。

「恐ろしい奴。我と対峙していて尚且つ念導境界面を張っていられるとは。我には到底真似できぬ芸当よ」

ウフェイトウがそう言う。

「時間を掛けずに、始末をするぞ」

アシユマがそう宣言する。

「幾ら貴様が『鬼を持つ者』として別格だと言って、思い上がるなよ？ 我はマスクド。『鬼を持つ者』を狩る者だと言うことを、忘れるな！」

ウフェイトウの気が膨れ上がる。

それに対しアシユマの気はどこか洗練されていくような、すうつと透き通るようなそんな感じがした。

アシユマは秘剣・流星を使った。

ウフェイトウはまたかと思った。

流星に何回も、これをやられると辟易したが、アシユマへのやり難にくさは以前と少しも変わらなかった。

気を抜けばこちらが殺られる。

アシユマは未だ手ごわい相手だった。

アシユマは、ウフェイトウに効かないかも知れない、秘剣・流星を使用した。

膨れ上がったウフェイトウの気が、アシユマに大きく押し掛かり、押し潰されそうな錯覚に陥る。

アシユマはそれに動揺しそうになる。

それはアシユマにとっては致命傷になる。

何故なら秘剣・流星は集中力を必要とするからだ。

それが動揺しては、集中力が途切れてしまう。

それは詰まる所、秘剣・流星が敗れることを意味する。

アシユマは密かに焦る。

しかし……。

アシユマは想う。

無念無想を。

ウフェイトウはこの時、周りの空気が変わったことに気が付いた。

無念無想、無想剣。

秘奥義、無想活殺。

アシユマは秘奥義を使った。

そこまでアシユマは、追い詰められていたのだ。

ウフェイトウは、本能的に危険なものを感じ取った。

アシユマは、一気に間合いを詰めた。

それ以前に、ウフェイトウは恐怖に駆られて、逃げ始めていた。

それが、ウフェイトウの一命を取り留めた。

寸余の差で、アシユマの太刀をかわしたのだ。

「！」

アシユマは、ウフェイトウの恐怖を、見抜くことが出来なかった。

アシユマはこれで、秘奥義、無想活殺まで、破られた事になる。

ウフェイトウは、このまま戦いの場から去った。

「アシユマ！ この場はこれで預ける。決着はこの次にまで持ち越

すぞー！」

アシユマは言い様の無い、敗北感に打ちのめされていた。

相手の心の内も読めず、見苦しい一刀を放ってしまった。

しかし今はそれ所ではなかった。

未だ艦隊戦は、続いているのだ。
アシユマは鬼虎に気を溜め一気に引き抜き光の筋を湧き起こした。

艦隊戦はオ口の圧勝だった。

ノーツ連邦艦隊はほぼ全滅。

ノリトリア統合軍もその艦艇数を半減させていた。

負け戦だった。

オ口にとって厄介だった、ノーツ連邦もオ口の手には落ちた。

オ口にとっては大勝利だった。

オ口は祝勝会を開いた。

飲んだ。

食べた。

抱いた。

もう、乱痴気騒ぎだった。

特にオ口はナナルを貪る様に抱いた。

「アシユマさま。お帰りなさい」

アーチェルがアシユマを出迎える。

「ああ」

アシユマはそう応えたのみだった。

(アシユマさまの様子がおかしい)

それに気付いたのは、矢張り妻である、アーチェルだけだった。

アシユマは自分のブースに戻る。

ベッドの上に腰をかけ右手を顔にあて苦渋の表情を浮かべていた。

「アシユマさま。如何なさいましたか？」

アーチェルは努めて、優しく静かに訊いた。

「アーチェル。……無想活殺が破れた」

「無想活殺……アシユマさまの秘奥義の？」

「そうだ。偶然だが……相手の心の動きも揺らぎも見極められず、無様な一刀を放ってしまった」

「アシュマさま……」

「ウフエイトウには何かある。いつも止めをさせない。それは何だ？ 何かがある？ このままでは、いつか負ける」

「アシュマ……さま……」

「アーチエル。一人にさせて……くれないか」

「いえ。そういうことなら、一人にさせておくわけには、参りませ
ん」

「アーチエル？」

アーチエルは、ゆっくりとアシュマを引き寄せ、胸にアシュマの頭を優しく抱いた。

「アシュマさまは、完璧主義者に過ぎます。たまにはゆっくり、のんびりとして下さりませ」

「今はそれ所では……」

「それがいけませぬ。さあ、このアーチエルが慰めます故、たとえ甘えて下さりませ」

「……アーチエル……」

アシュマはアーチエルに抱きついた。

一夜開けてアシュマはアルステインと語り合っていた。

「ウフエイトウに、悪だといわれたよ」

と、アシュマ。

「アシュマ君。正義も悪も表裏一体。コインの表と裏です。気にしなくて良いと思います」

アルステインはそう返す。

「そう言うものだろうか？」

「そう言うものです」

オロは、一旦この空域を去るときに、ノリトレアを国土に封じ込める為、に六要塞を楔として打った。

クーロン、イーハン、ノリトレアの三国の統合軍の要は、ノリトレアである。

このノリトレアに楔を打ち込んでおけば、他の国々は動けない。この楔は非常に効果的に働いた。

オロはこの頃から、その性癖が現れ始める。

友好国、占領国の区別なく、各国から一人ずつ美女を集めだし、自らの愛人としていった。

ナナルはその様を見て、オロには、

「王としては当然のこと」

と、言い、本心では、

(丁度言い休息になるわ)

と、思った。

「なあ、アルステイーン、頭の上にあんなデッサン物が乗っかっていてサ、鬱陶しくないか？」

オルバニアンが、アルステイーンの政務室で話していた。

他にはアシユマがいる。

「確かに、嫌々な感じは、しますね」

アルステイーンがそう返す。

「なんだよ、さらつと返しやがって。どうなんだよ？ 本音は？」

「本音ですか？ 本音はですね……」

「本音は？」

「まあ……」

「本音は、良くなさそうだな」

アシユマがそう言う。

「まあ……ね」

「どうするんだ？」

「叩いちやおうかと、思っています」

「あの六要塞をかよ!？」

オルバニアンが言う。

「ええ。今の内に」

「今の内？」

「敵艦隊が引き揚げてしまった今の内に。今ならマスクドもないでしょう。アシユマ君には大いに期待するところです」

「分かった」

ノリトレア統合軍は、前回の戦いの傷も癒えないまま、発進した。丁度オロの艦隊が、戦場から意気揚々と帰って行った、次の日である。

まさか、こうなるとは誰も想像等、しないだろう。

今回の攻撃、オロの六要塞は、全くの想定外であった。

護衛に付いた、僅かばかりのオロの艦隊も驚いた。

その為、六要塞だけで、迎え撃つ事になった。

護衛と言っても、形ばかりのその艦隊も、戦力にはなら無いだろう。

ノリトレア統合軍には、イーハンの三要塞イボラス、ビニラ、ビムラーが付き従っていた。

いくら艦隊総力戦と言っても、相手は要塞。

それも六基。

こちらにも要塞があるとはいえ、戦力は互角と見ていいだろう。

だが、こちらには切り札がいる。

そう、アシユマだ。

今回は相手も油断したのか、マスクドがいる気配は無い。

ノリトレア統合艦隊が、イーハンの三要塞と共に攻撃を開始した。それと同時に、青龍号のゴンドラの上に乗ったアシュマが、鬼虎を引き抜き、幾つもの気弾を発した。

マスクドがいけないだけで、面白いように攻撃が当る。

しかも敵方からの攻撃は、アシュマの念導境界面で阻まれる。

一方的だった。

この光景を見たアーチエルは、

「酷すぎます！ 惨すぎます！ 何とか助けてあげてください！」

と、ルー・ウィロンに訴えた。

ルー・ウィロンもそれには同意を示し、オロ側の六要塞に降伏勧告をした。

六要塞はその勧告に乗り、武装を解除して降伏をした。

「なに？ そんな馬鹿な！」

オロは大いに怒った。

「何故そんな事になった!？」

オロは、部下に怒鳴り散らした。

が、しかしこれは、オロの油断から来る失態で、部下たちの無能を罵るのは、お門違いと言うものだった。

「マスクド達は何をしていた!？」

オロは尚も部下たちを罵り続けた。

流石にナナルがこれを見かねて、これ以上この事態が続くと、士気に影響すると思ったのか、

「今日は、この辺にしておいて、あげましよう?」

と、オロをやんわりと止めた。

しかし、六要塞が敵の手に落ちたとなれば、かなりの痛手だった。それから暫くは穏やかな日々が続いた。

人は嵐の前の静けさとも言った。

それはその通りでオロは軍備増強に励んだ。

それはこちらと同じで軍備増強に努めた。

特にクーロンでは、ノリトレアの技術を取り入れた魔導機兵が、やっとロールアウトしてきた。

クーロンではこの機体の量産化と、艦艇の増強を急いだ。

シュニク・インジャは、何と、ノリトレアにアジトを持って隠れ住んでいた。

勿論クロダの六人衆と共にいた。

シュニクはノリトレア、イーハン、クーロンの三国同盟の要ノリトレア、その王たるアルステイーンの暗殺を目論んでいた。

そして今、シュニクが口を開く。

「アルステイーンを暗殺するなら今だな。平時に近いこの雰囲気だ。油断しているであろう。そうだな？ シシオウ」

「御意」

「ならば、行け。そして、アルステイーンの首を取ってまいるのだ！」

「は！」

「死んでもアルステイーンを潰してくるのだ！！」

そして、夜。

クロダの六人衆は、魔法ウィングを使って漆黒の中、一路宮殿へと飛んで行った。

門にいる衛兵を飛び越しテラスの一角に飛び降りた。

アルステイーンの部屋への道順は、頭の中にしっかりと入っていた。

途中衛兵に見付かるも、声をあげる前に、斬り殺した。

監視カメラはそのつど破壊してきた。

そして今、アルステイーンの寝室の前に居る。

シシオウは天餓鬼を、ドアの隙間にすうっと差し込んで、鍵を斬り壊す。

鍵は静かに開けられて、ドアをゆっくり開けていく。
そして、侵入する。

侵入し終えた所で、声が掛けられる。

「ここにアルステインはおらん」

アシユマの声だった。

「なに!？」

シシオウが驚く。

ドアが閉まって結界が作られる。

「自分達の力を、過大評価したようだな」

「アシユマ……貴様……!!」

シシオウが唇を咬む。

「何故分かった？」

「気付かないのか？ 自分達が発する微弱な気に」

「そんな筈は無い」

「水掛け論を行うつもりは無い。事実が物語っている」

「くっ……」

「大人しく帰れば良し。さもなければ討ち取るまで」

「アシユマ！ そんな甘い事で良いのかよ！」

オルバニアンが叫ぶ。

「我らも舐められたモノよ！ そこまで言われては、引き下がるわけにはいかな!!」

シシオウが激昂する。

「プライドにこだわると死ぬぞ？」

アシユマが言う。

「死ぬだと？ 我が死ぬだと？」

「そうだ」

「有り得ぬ事を言うな！ 我はマスケドだぞ!？」

「それが死を呼ぶ。それが分からぬか？」

「そこまで言うなら戦って、そうではない事を証明して見せよう」

「!？」

シシオウは自信たっぷりにそう言った。

アシユマはシシオウが何かをする気だと察知した。

(一体何をする気だ?)

それが分かるならば苦勞はすまい。

そここうするうち、この広い寝室のあちらこちらから剣戟の音が聞こえてきた。

そして、シシオウの自信の根拠が何であるか分かった。

シシオウの両の目が黄金色に輝き始めた。

戦利眼だ。

「戦利眼か！」

「そうだ。貴様の太刀筋は、既に見切った」

シシオウが言う。

「そうかな？ ならばこれはどうかな？」

アシユマは秘剣・流星を使った。

これで事実上無限の太刀筋が表された事になる。

戦利眼を持つ者にとっては辛いはずだ。

だが、シシオウに動揺の色は見えない。

逆に肝が据わったように見えた。

「アシユマよ。貴様はその剣の弱点を、知っているのか？」

「弱点？」

「そうだ。それはこちらが一つの太刀筋を決めると、お前の太刀筋も一つに限定されると言うことだ」

「それがどうした？」

「ならば、二刀を持つものにとって相手の太刀筋が一つになるとすれば？」

「！」

「しかもこちらは、復活が即座に出来る」

「！」

「動揺が見えるぞ、アシユマ・アトー。どうやら自分では、自らを癒せないようだな」

「……」

「我が、相討ち覚悟で来るとすれば？」

「……」

「だいぶ動揺しているな」

確かに、アシユマは、動揺していた。

ウフェイトウとの悪夢を思い返していた。

しかし、心を決めた。

先ず動揺を鎮めた。

心を、平静に、保ったのだ。

そしてアシユマも、相抜け覚悟で戦いに臨んだ。

「む？」

シシオウは疑問に思った。

自分は先ず一刀目は上段からの打ち下ろしを、二刀目は臨機応変に対応しようとしていた。

一刀目で、アシユマの太刀筋が、決まるはずだった。

だが、シシオウの戦利眼は、いまだアシユマの太刀筋が無限に見えた。

（アシユマ！ 貴様、一体何をするつもりだ？）

シシオウは迷いを吹っ切るように、一刀目を繰り出した。

アシユマはこれを寸余の差でかわした。

シシオウは二刀目を左から車に回し、アシユマを斬りに掛かった。

アシユマはこれかわし、居合いに鬼虎をシシオウへ、送り込んだ。

アシユマは又も、シシオウの左腕の肘から先を、斬り飛ばした。

「くっ！ ……おのれ……」

シシオウは悪態をつく

「お前の戦利眼もあまり役には立たないようだな」

アシユマが言う。

「何故だ！？」

「俺も、相抜けの覚悟を、持ったからよ」

「そうか。だから無限の太刀筋が、見えたわけか……」

「まだやるか？」

「……皆の者！ 引き上げるぞ！」

「逃げるのかよ！？」

オルバニアンが言う。

「いい。行かせる。オルバニアン」

アシュマが止める。

「何故だよ！？ アシュマ！」

「手負いの獣は危険だぞ？ オルバニアン」

「う……」

シシオウ達が窓から逃げ出すのをアシュマ達は見ていた。

第六節 激闘の会戦

オロは、ノリトレアに攻め込む為の軍備を、増強していた。殻兵器も用意していた。

艦隊も整備された。

魔導機兵も倍增した。

機は熟した

オロ連合軍は艦隊を編成して発進した。

アシユマ達が、緊急招集された。

これまでに無い大艦隊が、こちらに向かってくるとの事。

議題は、これを如何にして叩くかと、言う事だった。

「無理だつて！ 叩けだなんて！ 一体敵はこちらの何倍で来ると思っているんだ！？ 十倍だぞ？ 十倍！ これじゃあ、勝てねえよ！」

オルバニアンが叫ぶ。

「そこをなんとか勝てるようにしないと……」

アルステインが溜息混じりに言う。

「精神論じゃ、ねえんだぞ！」

「何とかしてアシユマさんの力が、使えれば……」

レンヌが言う。

「無理だつて！ きっとマスクド達が来て、アシユマを抑えるだろうよー！」

「マスクドつて、後、何人残っているんでしょうね？」

シユンマが訊く。

「ウフェイトウだろ、シャケルウだろ、ウゴグロフだろ、ウデイガアだろ、イラだろ、レトウだろ、それにナトイゲフル……七人か」

「こちらは？」

「俺だろ、アシュマだろ、アルミナだろ、ガンロクさんだろ、ジークだろ、ビツシュさんだろ……六人だな。何でそんな事訊くんだよ？」

「だってほら、アシュマさんがフリーになればアシュマさんは気弾を打てるじゃないですか」

「成る程！ アシュマ！ 何分フリーになれば気弾をつてる？」

「一分だな」

アシュマが断じる。

「成る程……って、相手の数より、こっちの数の方が、少なえじゃねえか！」

「僕が戦線に復帰します」

レンヌがそう言う。

「駄目よ！ レンヌ！ 何てこと言い出すの!？」

「リイナ。別に死に行くわけじゃないんだ。一分持てばいいんだよ」

「……やっぱり駄目よ。貴方を行かせる訳には行かないわ」

「リイナ。僕を信じて」

「レンヌ……分かったわ。貴方を信じる。絶対生きて帰ってきてね」

「うん。分かってる」

「レンヌさんがそう言うなら、僕も戦線に復帰します」

今度はシュンマが、そう言います。

「シュンマ、おぬしまで、何を言いだすのじゃ！」

キュポアが悲鳴に近い声で叫ぶ。
「僕が戦列に復帰すれば、マスクドと数が合います。そうならばアシュマさんはフリーになります」

「しかし、だからといって……」

「大丈夫です。レンヌさんも言っていたじゃないですか。一分持てば良いって」

「……おぬしは言葉は、柔らかいくせに、言い出したら聞かぬから
のう……約束してくれるか？ 五体無事で帰ってきてくれることを」

「約束します。キュポアさん」

「じゃ決まりだ」

オルバニアンがそう言う。

「でも、誰がああウフェイトウに当るんだ？」

ビツシユが言う。

「俺が当る。今、人が余ってるのは俺だ」

オルバニアンが言う。

「しかし、あのウフェイトウは、アシユマでさえ、怯ませた奴だぞ？ 戦って、一分持つのか？」

「仕方ないですねえ。僕がサポートに付きましよう」

そう言いだしたのは、なんとアルステインだった。

「貴方！ 一体何を言いだすの？ 貴方は国王なのよ？」

エファールが怒り出す。

「シユンマだつて国王ですよ？」

「じゃ、じゃあ貴方は……え〜と……」

「エファールさん愛しています。僕も必ず戻ります。信じてください」

「ば、ばか。こんな時に何を言いだすのよ……」

「重ねて言います。信じてください」

「わ……分かったわよ。信じてあげる。その代わり……」

「分かってますよ。こんな感じで良いかな？ オルバニアン」

「おおよ！ 良いぜ、兄ちゃん！」

「今度は私も連れて行ってください」

そう話したのはアルルマ・サンファだった。

「どうかしたので？ 姫」

アルステインが訊く。

「デイー又殿下が、今度は是非にも連れて行ってもらえと、仰るの
で」

「そうなので？ 殿下？」

「嫌な予感がします。彼女の能力が、役に立つでしょう」

「そうですね。分かりました。でも、青龍号で待機ですよ？」

「はい。それでも構いません」

「皆さん、一つ宜しいですか？」

アーチエルが口を開く。

「おう、何でい。アーチエルさま」

「皆さん。最初から戦線にいる人も、戦線に復帰される方も、皆々様、無事に帰ってきてくださいね。待っている人を、悲しませる事の無いように、お願い致します」

「アーチエル……」

アシユマが感慨深げに言う。

「アシユマさま。いつもならば、無駄に命を殺めぬよと言つところですが、今回はそれが叶いそうもありません。残念です」

「アーチエル」

「どうかご武運を」

「有難う。アーチエル」

アルステインを総大将とする統合軍は、ノリトレアを発ち、オロ連合軍の待つ空域へ移動を開始した。

数刻後、二つの勢力がボグロムの海の上で衝突した。

こちらは千の艦艇、十万の魔導機兵。

対するオロ軍は五千の艦艇五十万の魔導機兵。

「殻兵器は、持ってこなくとも、良かったかな？」

オロは、この数の艦隊をもつてすれば、ノリトレア統合軍など、容易く勝てる^{やたす}と踏んだのだろう。

思わずそうという言葉が口に出た

今日は、オルバニアンやアルミナも魔導機兵で出撃せず、サイコ・フライヤー青龍で待機していた。

アシユマが、ゴンドラで上に昇っていく。

アシユマは、ゴンドラごと外に出た。

アシユマは、鬼虎に気を溜める。

いざ、放つといった時、頭上から声が掛かる。

「さて、それは放つな」

ウフエイトウだ。

「先ずは我と戦え」

「いや。今日貴方が戦うのは僕たちですよ」

「……貴殿は？」

「アルステイン・ノリトレアと申します」

「なんと！ ノリトレアの王であるか！」

「まあ、そう言う立場でもありますか」

「成程。だが、悪いが立会いは直ぐに終わりますぞ？ お命頂戴仕り候」

「おっと待った。俺もいるぜ！」

「オルバニアンと言ったか……貴様もか？」

「おうよ」

「なんと二人掛かりで来ると言うか？」

「如何にも」

「卑怯よな」

「ハンデと言つて下さい」

アルステインがそう言った。

アルステインはわざと会話で時間を延ばそうとしていた。

アシユマの言った一分間を稼ぐ為である。

一方アルミナはシャケルウと対峙していた。

立会いに際してアルミナは右目の眼帯をむしり取った。

「また、戦利眼か！」

「『また』は無いでしょう？ 『また』は。アタシに言わせりゃ、

「アンタなんかまたかつて感じよ！ いい加減、やられて頂戴！」

「いや、今日こそ、お前を倒してやる」

「いかにも悪役が吐く様な台詞ね」

「何を言うか！ いくぞ！」

「早くいらっしやいな。相手してあげるわよ」

アルミナのロンリーストライフとシャケルウの大槍が空中で交錯した。

ガンロクはウゴグロフと対峙していた。

以前味わった敗北感を糧にして、ガンロクは剣士として、一際大きく変わったようだ。

ウゴグロフの攻撃もかわすことが出来るようになり、また攻撃も出来るようになった。

「ちっ！」

今では、ウゴグロフを舌打ちさせるほどにまで、成長した。

「今度は勝つべ！」

ガンロクは大鎧を振り上げた。

ジークは秘剣・裏・閃光一刀・崩し・改の構えでウデイガアの出方を伺っていた。

ウデイガアは戦斧を握って矢張りジークの出方を待っていた。

ジークは何かをぶつぶつと呟き始めた。

ウデイガアは緊張した。

あのオルバニアンとやらが、ナイゲルに行ったブーストとマジックブレイドの魔法を、使用するのかと思っただからだ。

ウデイガアは魔法を唱えられる前に、勝負を決しようとした。

誘いであるにも拘らず、突き出した左肩に戦斧・巨蟹鬼を、送り込んだ。

「ブースト！」

ジークは一気に間合いを詰め、超高速の秘剣・裏・閃光一刀・崩し・改からの剣を車に回した。

「マジックブレイド!!!」

そしてマジックブレイドを唱えた。

巨大な剣は強力な破壊力と相まって、ウデイガアの胴体を真っ二つにした。

マジックブレイドの効力はそこで失われたしまったが、大質量の剣を、左からの車に回し、今度はウデイガアの首根を断った。

何故、断てたか？

マジックブレイドで胴を断たれ、ウデイガアの気が、失せたからである。

イラは喜んだ。

宿敵が戻ってきたことに。

「待ちかねたわレンヌ。寂しかったわ。私の愛しい人」

「僕はいつから貴方の愛人になったんですか？」

「最初に戦ってから」

「はぁ。そうですね。それより行きますよ？」

「そうですね」

「秘めたる聖剣、内より溢れん！

愛するものを、護る為

六つの星に、六つの剣、

額に印を表す時に、

両の手、両の目聖剣掴まん！

出でよ聖剣、汝の敵を切り刻まん！

へブンズソード!!!」

レンヌはヘブンスソードを唱えた。

「コマンド、オールソード、六剣乱舞！！」

レンヌは最初から切り札を使ってきた。

「風切る翼、銀翼よ。

気高き心、天かける。

汝に問おうその心

風切る翼、剣とならん

サイクロンスラッシャー！！」

シユンマは初しよっぱな端から呪文を唱えてきた。

「甘いわ！」

対するレトウは大鎌を眼前で回しウィンドスラッシャーの風の刃を防いだ。

そして、レトウは一気に間合いを詰めて大鎌を振るった。

「くっ！」

シユンマは寸での所で大鎌をかわす。

「ほう！ 今の一撃をかわすか」

「受け止めては、こちらが傷を負いかねませんからね」

「よく分かっているな。では行くぞ！」

レトウが鎌で切りかかる

対するシユンマは、呪文を詠唱し始めた。

「我は禁忌を見た者、犯したもの。

我が憎しみは、汝の快樂。

我の癒しは、汝の死のみ。

黒く塗りこめ我が魂。

今、その力を汝らに示せん。

全てを吸い込め。

ブラックホール！！」

今度は、よくよく狙って、ブラックホールを放った。

「ぐあっ！」

レトウは、まともにブラックホールを、食らった。

(チャンスか！？)

シユンマは剣を振り上げ、突進しかけた。

「『磨羯鬼』よ、汝の主が命ずる。汝の主の危難に際し、汝の力を以って汝の主を癒すべし」

レトウは癒され復活した。

「！」

シユンマは突進をやめた。

「残念だったな。シユンマ」

レトウが言う。

「くそっ！」

シユンマが悪態をついた。

「我らが、『鬼を持つ者』を狩る者だと言う事を、忘れるなよ？」
レトウが言い放つ。

ナトイゲフルの金剛棒が唸る。

ナトイゲフルの頭上で回っている。

ビツシユはその金剛棒をじっと見ていた。

不意にナトイゲフルの金剛棒、『天秤鬼』がビツシユの顔面を狙う。

それを僅かに首を捻ってそれを避ける。

ビツシユは間合いを詰めナトイゲフルの胸を打つ。

「矢張り斬れんか」

ビツシユが呟く。

「我を、見くびり過ぎの様だな」

ナトイゲフルが、間合いを取り、再び金剛棒で打ち据える。
それをかわすビツシュ。

「くっ！ 一筋縄ではいかんか……」

「ウ、ウデイガア！」

それはウデイガアが絶命した直後だった。

ウフエイトウが叫んだのだ。

「ウ、ウデイガア！」

残りのマスケド達も皆それぞれ叫んだ。

「さて、そろそろですかね？」

アルステインがそう言う。

「？ 何がそろそろなのだ？」

ウフエイトウが訊く。

それはここよりはるか上空、アシユマが登りつめた所だった。

アシユマは存分に鬼虎に気を集めそして一気に引き抜いた。

幾千もの光の条が、オ口の連合艦隊に襲い掛かる。

「しまった！ 貴様らは時間稼ぎのための罠か！」

ウフエイトウが叫ぶ。

「さあ？ どうでしょう？ 本気で貴方を、倒すつもりかもしれま

せんよ？」

アルステインがそう言う。

オ口艦隊では全滅ではないが、殆どの艦艇と殆どの魔導機兵が落とされていた。

その中でオ口は運良くも生き残っていた。

「ああっ！ そんな馬鹿な……私の艦隊が……！ 私の魔導機兵が

……！ エルファの騎士団は何をしていたのだ……！ ……おのれ、

アシユマ・アトー……！ こうなったら……！ 殻兵器、全弾用意！ 目

標ノリトレア統合艦隊」

「……！」

その時、アルルマ・サンファの様子が変わった。目を閉じ、手を胸の前で組み、何かを念じているようだった。その様子をアーチエルが不審に思い声を掛けようとした。それをディー又王子が手を取って、

「大丈夫です。見ていて下さい」

(殻兵器の皆さん、どうか聞いてください。その力を封印してください。お願いします)

アルルマは念じていた。

「オ口様！ 殻兵器の安全装置が解除されません！」

「なに！？ どういう事だ！！」

「それが……！ あ、いかん！」

「どうした！」

「殻兵器が皆アポトシスしていきます！」

「何だと！？」

殻兵器が使えない。

これでは話しにならない。

オロの旗艦ンディオは艦首を回頭して戦線を離脱しつつあった。

アシユマは急ぎエルファの騎士団のいる所へ戻っていく。皆が心配だった。

特にウフェイトウと対峙している、オルバニアンとアルステインが、気がかりだった。

「何故マスターである、オロに忠誠を誓う？」

アルステインがウフェイトウに訊く。

「マスターには忠義を尽くすのがマスケドと言うものだ」
ウフェイトウが返す。

「では、マスターが悪でも忠誠を誓うのか？」

「従う！」

「もし、マスターが悪だとしたら、それを諫めるのが真の忠義と、思わないのか？」

「我らは、マスター忠誠を誓った。それがマスクドの正義だ」

「ならば、アシユマ君を悪と決めつけ、つけ狙うのは、それこそお門違いと言うものじゃないのかね？」

「マスターが悪だとも言うのか？」

「自分の欲望の赴くままに、世界を私し、自らの手に入れんとする者を、悪でなくて何と言う！？」

「私しているのではない！ 平定しておられるのだ！」

「そこまで目が曇っているのか！ マスクドともあるう者が！」

「貴様にマスクドの何が分かる！」

「マスクドとは、もっと誇り高いものだ、思っていたぞ！」

「では何をしろと言うのだ！？」

「オロの下を去れ！ 民の為に生きる！」

「具体的にはどうしろと？ お前の下に付けとでも言うのか？」

「そこまでは言わん。だが、オロの下を去れ。お前もオロのやっていることが、正義だと思うのか？」

「……………」

「即答できまい？ 悪い事は言わん。オロの下を去れ！」

「皆の者、引き上げるぞ！」

ウフエイトウが叫ぶ。

「ウフエイトウ！」

アルステインも叫ぶ。

「ウフエイトウ！ ウデイガアが殺られたんだぞ！ このままで良いのか！」

レトウがそう言う。

「私の命令が聞けないと言うのか？」

「……………」

「ウデイガアの亡骸を持って。皆の者帰るぞ！」

こうしてマスクドも去って行った。

オロは戦力の内、九割方を失った。

この事を受けて、各国ではオロに対して反乱の兆しが見えた。

オロの執政に関して、反対の意を示す、デモ行進が行われたのである。

オロは各地のデモに対して、武装警官を以って当った。

各地に流血の惨劇が、繰り広げられた。

オロへの非難は、更に広がりを見せた。

オロはそれ等にも際しても、武力を持って鎮圧した。

流血の大惨事。

恐怖政治。

これを見て、レキシタニアのエースティ王、ノリトレアのアルスティーン王は、非難する。

先の戦いで、ノリトレアは浮き足立っていた。

特に英雄視されたのは、アシュマに、アルスティーン。

アシュマは、直接敵を叩いたと言うことで、特に英雄視されていた。

「困る！」

アシュマは、ただそう言った。

そして、アーチエルも心沈んでいた。

「あのような形で、決着を付けてしまってよいものなのかしら。私は……」

しかし、皆は、心浮かっていた。

アシュマとアーチエルとアルスティーンを除いて。

「今、ノリトレアは戦勝で浮き足立っている。アルステインを狙うなら今だ。行け！」

アジトに隠れているシュニクがクロダの六人衆に命を下す。
「はっ」

クロダの六人衆は、一陣の黒い風となって、王宮市に向かった。

ノリトレアの王宮は今、祝勝会で賑わっていた。

城中浮かれていた。

油断しきっていた。

「アシユマ君」

「どうした？ アルステイン」

「いえ。なんか、こう、落ち着かなくて……」

「何故？」

「僕が敵だったら今、この時を逃さないでしょう」

「そうか。でもオロは今動けないぞ？」

「でもマスケドは動けるでしょう？」

「成程。ではエルファの騎士団が動くか？」

「クロダの六人衆もいます」

「ふむ」

「オルバニアン達には、騒ぐのは、そこそこにさせておこうか？」

「そうですね。お願いします」

アシユマは意外に思った。

普段のアルステインならば、

『それまでには及びませんよ』

これが、アルステインの言葉だと思っていたからだ。

「じゃあ、行つて来る」

「はい」

アシユマはパーティー会場にやって来たが皆、浮かれていた。

確かに、これは危ないと思った。

夜半、宴もたけなわ、皆楽しんでいるところ、クロダの六人衆は王宮のテラスに、密かに降り立った。

以前はここで裏をかかれた。

今度はこちらが裏をかく番だと、シシオウは思った。

アルステインは、恐らく自分の寝室にはいないだろう。

もしかしたらマスクドの到来を予想して、大広間に居るかも知れない。

早速大広間に行ってみる。

大広間の窓から、中へと侵入する。

果たして、そこにはアシユマがいた。

アルステインはいなかった。

また、レンヌとシュンマもいなかった。

「矢張りここに集まっていたか。アルステインはいないな」
シシオウが言う。

「わざわざ危ない目に、さらすわけには行かないのでな」
アシユマも返す。

「そうか。今日は勝つまで帰らん」

「ならば、我らも、負けるわけにはいかん」

「なら、我らと勝負をするべし」

「致し方なし」

「さあ、勝負だ！」

エヴユが言う。

「お前の相手はこの俺だ！」

オルバニアンが言う。

少し酒臭い。

「そうだったな。多少酒が過ぎるようだが、大丈夫なのか？」

「敵から心配されるなんて、思わなかったぜ」

「酔っ払った相手から、勝ちを得ても、自慢にならんからな」

「言ったな？」

「おうよー！」

「もう、オルバニアン！ 敵と親しそうに話さないでよ」

「お前も、よそ見しないで、こっち見ろ」

そう言ったのはアジャオだ。

「調子に乗るんじゃないよ」

「じゃあ、お前の相手はこの俺だ」

ナイシーがガンロクに言う。

「じゃあ、やるべー！」

「ああ」

ナイシーは鉤爪・金餓鬼を掲げながら間合いを詰めていく。

ガンロクも大鉈を二刀に掲げながら爪先で間合いを刻むように詰めていく。

暫く睨み合いが続いた。

ガンロクは何かをぶつぶつ呟き始めた。

これは、魔法ブーストと魔法マジックブレイドを唱えているのは、アシユマ達の間では周知の事実。

一気にトリガーキーを言い、瞬く間に相手を葬る戦法である。

「何をぶつぶつと！」

ナイシーは鉤爪を振るってきた。

ガンロクは二刀で鉤爪を弾いた。

その時に初めてガンロクは

「ブースト！ マジックブレイド！」

と二つのトリガーをいっぺんに言った。

「な、なに？」

ナイシーは超高速で首根を斬られた。

ナイシーの頭は飛び、床に落ちて転がった。

ガンロクは力尽きて大鉈を杖に方膝付いて喘いだ。

「お、おのれ、よくもナイシーを！」

シシオウが激昂して、言った。

それを見てアシユマが

「お前の相手は、この俺だ！」

と、言う。

「どけ！ アシユマ！」

「それなら、俺を倒してから行け」

「ナ、ナイシー！」

叫んだのはアジャオだった。

首の無い死体からは今も血が流れ出ている。

アジャオは思わずそっちに気を逸らされた。

その時アジャオは背中に強い衝撃を覚える。

「アンタの相手はこのアタシ。余所見なんて、すんない！」

アルミナが言う。

「くそっ！」

アジャオは悪態を吐きながら振り向く。

「あ、平気だ」

「当たり前だ」

「やっぱり、マジックブレイドを使わなきゃ、貫通しないのね？」

「何を言っている？」

「しょうがないわね」

アルミナはそう言うってから、何かをぶつぶつと呟き始めた。

「何を、ぶつぶつ、言っていやがる！？」

アジャオは槍を持って、アルミナに迫った。

アルミナはロンリーストラライフを以ってして、アジャオの槍を、

捌いていた。

アルミナは戦利眼を用いていた。

その為にマスケドの攻撃を、何とか凌いでいたのだ。

アルミナは、アジャオの槍を弾いた。

アジャオの体勢に隙が出来る。

「ブースト！ マジックブレイド！」

アルミナは間合いを詰め、一気にアジャオの首根を断ち斬った。

「アジャオ！！！」

続いてアジャオが倒され、悲鳴に近い声でシシオウが叫んだ。

「おのれ！ 女！ 待っている今に殺してやる！」

「シシオウ。今の相手はこの俺だ」

アシユマが再度言う。

「アジャオ……お前まで」

エヴユが呟く。

「よう、俺の相手だろ？ ちゃんとこつちを見てくれよ」

オルバニアンが言う。

「くっ！ お前など。酔っ払って戦いに望むなど、失礼にも程がある！」

「しょうがねえだろ？ お前らが呑んでいる時にやって来たんだからよ。それで失礼だのなんだのって、こちらの都合も考えないで来る、お前達の方が失礼なんじゃねえのか？」

「言ったな！？」

「おつよ、言ったださ」

「おのれ小童！」

エヴユは鎖鎌の分銅を回しながら機会をうかがっている。対するオルバニアンは剣を高く突き上げていた。

「天刀稲妻斬！」

オルバニアンが静かに呟く。

そして何かをぶつぶつと言い始めた

「また、ブーストとマジックブレイドか」

エヴユが断じる。

エヴユが分銅を投げる。

分銅はオルバニアンの逸鉄に絡みついた。

「ちっ！」

オルバニアンは、舌打ちをする。

エヴユは手と鎌とで、鎖を手繰り寄せる。

手繰り寄せられては、離され、バランスを失う。

そうなるのではないかと言う恐怖に駆られながら、オルバニアンはエヴユと対峙していた。

オルバニアンは決意した。
切り札を使うのだ。

「ブースト！ ウィング！マジックブレイド！」
オルバニアンはこの時に三つのトリガーを使ってきた。

「な……なに！？」

オルバニアンは高速で飛翔し、エヴユの首根を斬り刎ねた。

オルバニアンはそのまま、エヴユの死体を引き摺りながら、ソファに突っ込んだ。

「エヴユ……」

シシオウが呟く。

「クロダの六人衆も、とうとう貴様一人となったな」

アシユマがそう言う。

鬼虎はまだ鞘の内だ。

「アシユマ。せめて貴様だけでも討ち取って、仲間の、手向けにしてやる。例え相討ちになってもな！」

アシユマは、ウフェイトウの事が、頭によぎる。

アシユマは、ウフェイトウの事をあえて引き摺りながら、シシオウと対峙した。

正直に言つて、それは恐怖以外の、何者でもなかった。

しかしそれを乗り越えないと、目の前のシシオウはおるか、ウフェイトウを倒す事は敵わないと思ったからだ。

「む！」

シシオウの動きが止まる。

アシユマの変化に気付いたからだ。

アシユマは秘剣・流星を使っていた。

だが、シシオウに怯む気配は、全くなかった。

自らの死を覚悟して、アシユマに突っ込むつもりなのだ。

ここに来て、アシユマも、死を覚悟した。

生死の狭間を超えそこへ至る境地。

明鏡止水。

無想剣。

アシユマはいつの間にか、自分でも気付かぬ内に、秘奥義、無想活殺を用いていた。

「おおおおおおおっ!!」

シシオウが雄叫びを上げて突っ込んでくる。

アシユマはあくまで平静だ。

シシオウの二刀の天餓鬼は空を斬った。

アシユマの姿はそこになかった。

が、アシユマは、確かにそこにいたのである。

そこに有りそこに無し。

全てのものと同化しつつ個を維持し続ける。

アシユマはシシオウを袈裟に斬った。

この瞬間アシユマの頭の中で、何かがはじけ飛び、呪縛から開放されたような気分になった。

「お前の負けだ。シシオウ」

「そのようだな。早く首を斬れ」

「何か言い残す事はあるか？」

「……シユニクの居所を教えよう」

「!？」

「アシユマ、乗るな！ この期に及んで、罨を仕掛けるつもりだぜ、

コイツ！」

オルバニアンが言う。

「いや、それはあるまい」

アシユマが断じる。

「何で分かるんだよ!？」

「もののふ武士の最期の言葉だ。嘘は言つまい」

「かたしけな忝い……」

「で、どこだ？」

「アンコーだ」

「アンコー？ 別荘地街のか？」

オルバニアンが問う。

「そうだ」

「何故、教えるんでい？」

「主人としても、人間としても、最低の男だ。そんな居場所を教える俺も、最低の男だがな。さあ、もう良いぞ。首を刎ねてくれ」

「相分かった」

アシユマが淡々と言う。

鈍い音がして。シシオウの首が飛ばされる。

ここにクロダの六人衆は壊滅した。

数日後。

アシユマたちは、シシオウの最期の言葉に従って、ノリトレア有数の保養地、アンコーに来た。

アンコーは、商業地や街中と違い、穏やかな、そして静かな佇まいを見せていた。

アシユマ達の行き先は決まっていた。

アンコーのはずれの小さな屋敷。

ここにシュニク・インジャは居るはずだった。

回りからとり囲み、徐々に包囲の輪を狭めて行く。

警護の兵にも、ましてやシュニク・インジャ本人にも、会うことは無かった。

本当にここでいいのか？

皆が皆、疑問に思っただけで始めている。

アシユマが臙霞でドアに近づく。

警報機、監視カメラ、そのほかのセキュリティ装置は一切無い。

アシユマは臙霞を解く。

(本当にここなのか？)

オルバニアンは思い始める。

アシユマはどうやら、行く気のようなのだ。

何か気配があると、身振りで教える。
アシュマが再び朧霞を使う。
ゆっくり中に入る。

暫らくすると、中で、人同士が争う声や音が、聞こえてくる。
そして静かになった。

オルバニアンらが、入っていく。

そこには、アシュマに組み敷かれたシュニクが居た。

他の者は居ないようだ。

「アシュマ！ シュニクだけか？」

オルバニアンが訊く。

「さあな。気配はしないが」

アシュマが答える。

「他のところにも、居ないわよ？」

「まさか、コイツ影武者じゃ……！！」

「どうだろうな？ 訊いてみるか」

アシュマは膝を、人間の急所から外す。

「ぶはっ！」

途端に呼吸を取り戻すシュニク。

「お前、本当にシュニク・インジャか？」

「違う！ 私は影武者だ！ 本物はとうに逃げてしまった」

「どうするよアシュマ？」

「安心しろ。オルバニアン。本物のシュニク・インジャだ」

「なんだって？ 何で解るんだよ？」

「人が嘘をつく時の気の色を発している」

「アシュマに掛かっちゃ、形無しだな。おい」

「おのれアシュマ！ 覚えている」

「お前に次は無い。人民法廷で裁かれて、おそらく死ぬ事になるだろう。あっけないもんだ」

「大人しくしろい！」

オルバニアンがシュニクに手錠を噛ませる。

「くそっ！ おのねえっ！ 忘れんぞ！ この恨み！ わすれんぞ
おお！」

「この場に、アーチエルが居なくて、正解だったな」

アシュマが言う。

「どうしてさ？」

アルミナが訊く。

「この場にアーチエルが居ると、あの呪の言葉に、あてられそうだからな」

「うん。言いえて妙」

ガンロクとビツシュがシュニク・インジャの両脇を固める。

そのままシュニクは運ばれて行った。

オロは、世界を我が手にしたかった。

理由はと言われると、これは極側近にしか話していない。

そんな中で、武力等まるで無いのに、権威を保っている国がある。
許せなかった。

それが、自分の野望の前に立ちほだかる国だから。

それでいて、民意を一身に受けるその様が。

許せなかった。

ただ、許せなかった。

その国とは……。

レキソタニア。

アーチエルの故国だ。

過去その国を襲った国が二つ有った。

クーロン人民共和国、そしてノリトレア王国。

双方の国には革命が起き、国の体制は大きく変わった。

つまりこの国、レキソタニア王国は、神聖不可侵なるモノとして、
祭り上げられる。

今も、昔も。

そして、恐らく、未来までも、
その権威が憎かった。

だが、手を出せば、今、各地で蜂起しかかっている、国内外の不安定要素が、暴発しかねなかった。

オロの国は今軍需産業が活況だ。
ちよつとしたバブルになっている。

次々と新しい戦艦、魔導機兵がロールアウトしてくる。

オロの旗艦ンディオも修理が完了した。

まだ無傷な各国の艦艇もある。

兵力は前回の決戦前の七割五分まで回復した。
が、それだけではない。

バヴェルの建造があと僅かで完了するのだ。

オロはこの余勢を駆ってノリトレア統合軍の内、最も被害の酷かったクーロン共和国へ攻め込もうとしていた。

雲霞の如く空を覆ってクーロンへ攻め込むオロ連合軍。

クーロン軍は統合軍三国の内最も被害の大きかった国である。

国土には直接被害が及ばなかったものの、国軍は大きく疲弊した。
もうそろそろ、新しい魔導機兵や、艦艇がロールアウトすると言
うときに、オロの連合軍が攻め込んだのである。

国の西から攻めいれられた。

すぐさま、そこへ行かねばならない。

しかしそこでクーロン軍は、ノリトレア統合軍と分断される。

つまり、クーロン軍は先行し過ぎたのだ。

クーロン軍は包囲されて壊滅してしまった。

これを見て、クーロンの若き宰相、リン・シャオリンは、

「ああ！　なんてことを！」

そう叫んだと言う。

ノリトレア・イーハン統合軍はこれを見て、クーロンに攻め込む

のを一時中断した。

今、闇雲に突っ込んでも、負けは目に見えていたからである。クーロン共和国ではオロの降下部隊が政府の要所要所を押さえ、政府高官を次々と捕らえた。

だが、リンはなんとか逃げ切り、今は地下に潜んでいるらしい。

ノリトレア統合軍はノリトレアの西海岸に集結し様子を伺っていた。

オロの連合艦隊もクーロンの東海岸に集結していた。

今回もオロは旗艦ンディオに乗っている。

ノリトレア艦隊が敗れる。

そんな光景を見たくて、乗り込んでいるのだ。

ノリトレア統合軍は五百の艦艇、五万の魔導機兵。

対するオロ連合軍は三千五百の艦艇、四十万の魔導機兵。

圧倒的な、数字の差である。

が、しかし、ノリトレア連合軍には心強い味方があった。

イボラス、ビニラ、ビムラーの三要塞である。

それに、恐らくオロ連合軍も最後の艦艇であろう。

これ以上は生産数のキャパシティを超えるだろう。

絶対に負けられないはずだった。

今回はアルステインも戦場に出た。

皆の反対を押し切って。

アルステインも必死なのだ。

ここを突破されれば、敵は本国に到達する。

それだけは、避けねばならなかった。

オロの艦隊は、ノリトレア統合軍を、押し包むように進軍してきた。

方やノリトレア統合軍は、ハーティアー三世号を先頭に（厳密に言えば更にその先に青龍号が陣取っているのだが）錐の陣形を取っ

てきた。

アルステイーンの得意の陣形である。

狙いは一つ。

オロの乗る旗艦、ンディオだ。

以前にも、この戦法を取って勝った。

しかし今度は、敵はオロの防御を厚くした。

艦艇の壁を、何倍にも増して、築いたのである。

戦いは、いつ始まって、おかしくなかった。

ウフェイトウ率いるエルファの騎士団は、当初十三人いた者が今や数を半減させ、六人となっていた。

マスクドは義を重んじ、仲間を重んじる為、アシユマ達に戦いを望むものと思われた。

アシユマ達も、アシユマ、オルバニアン、アルミナ、ジーク、ピツシユ、ガンロクと精鋭を集めていた。

両陣営がゆつくりと動き出す。

戦端が開かれたのだ。

ノリトレア統合軍は、加速度を増す。

スピードが何より大事な戦法なのだ。

半円球状の一番奥に居るオロを目指す。

周囲から、攻撃が統合軍に集中する。

それでも被害が出なかったのは、アシユマの念導境界面の、なせる業である。

今日もゴンドラの上で、念導境界面を張っていた。

しかし、案の定と言うべきか、ウフェイトウ率いるエルファの騎士団が現れる。

「アシユマ。貴様を葬りに来た。覚悟せよ」

ウフェイトウがそう言う。

「そう、簡単に行くかな？」

アシュマが返す。

「我が倒す。それでお仕舞いだ。後のものは雑魚。造作も無い」

「雑魚っていうなあ！！ その雑魚に何人のマスクドが、倒された
と知っているんだ？」

オルバニアンが割って入る。

他のメンバーも後部ハッチから飛んでくる。

「そうだな。油断だった」

「そう思っているうちは永遠に勝てんだろうよ」

アシュマが言った。

「言つたな？ ならば、試して見るまで。者供、かかれ！」

「おう！」

ウフェイトウ以下エルファの騎士団はアシュマ達に踊りかかった。

アシュマはウフェイトウと対峙した。

「アシュマよ今日こそお前を葬る！」

「出来るかな？」

「お前の言うことなど聞く耳もたん！ 行くぞ！」

ウフェイトウはアシュマに突進しかかった。

その途端ウフェイトウは、突進をやめた。

アシュマの周りの空気だけが違うのだ。

アシュマを見ると、無念無想の境地に居るようだ。

「アシュマ……」

これは以前ウフェイトウを恐怖させた、あの境地である。

秘剣・流星とは位が違う。

どう動いても斬られる気がした。

手足が硬直する。

頭の芯が痺れる。

目が霞む。

ウフェイトウはあの時の恐怖を、思い出した。

相抜けなどと言う、位では無い。
全く違うのだ。

ウフェイトウは死を覚悟した。
アシュマは少しずつ間合いを詰めた。
間合いを詰めた分だけウフェイトウは無意識に後退した。

オルバニアンはレトウと対峙していた。
「いつもの魔法剣士の兄ちゃんはどうしたよ？」
レトウが訊く。

「ああ、シユンマなら今日は出てこないぜ？ 何せ王子様だからな。
出て来れないのサ。……っといつても、俺も王子なんだけどなあ……
…まあ、良いか」

オルバニアンが逸鉄を上段に構える。
その構えは少し独特で刀の切っ先が天を衝くように構えていた。
「天刀稲妻斬！！」
オルバニアンはそう言った。

「あら、今日はあの可愛い坊やじゃないのネ」
イラはそう言ってスモールソードとスモールシールドを構えた。
「今日は、レン又は来ないそうだ」
ジークが答える。

「あら、そう。私は貴方も好みだからいいんだけど。どう？ 今
度お姉さんと付き合わない？」

「下らない冗談だな」
「あら、後悔しても知らないわよ？」
「後悔するかしないかは俺の勝手だ。お前には関係ない」
「そう。じゃあ行くわよ？」

イラがそう言った時、ジークが構えてこう言った。

「秘剣・裏・閃光一刀・崩し・改」

その間にノリトレア統合軍はダメージを受けずに敵陣の中核、オロの機関ンディオをめざす。

三基の要塞イボラス、ビニラ、ビムラーは敵陣の右翼から敵陣を崩しに掛かっている。

敵陣は端と中央から陣形が壊れ始めた。

「今だ！ 敵陣は総崩れだ！」

アルステインが叫ぶ。

旗艦前に幾重にも陣を張っていたオロ連合軍だが、ノリトレア統合軍が錐のように穴を開け、広げていった。

「おのれ！ アルステインめ！！ 急速反転百八十度！ 全速でこの空域から離脱！ まだ壁が生きているうちに逃げ切るのだ！」

オロが乗っているンデュオはその場から逃げるように去ろうとしている。

「まて！ オロ！」

アルステインが叫ぶ。

聞こえるわけが無い。

ンディオは逃走に掛かっている。

「くそ……逃げられてしまう……アシュマ君……アシュマ君達は！？」

アルステインはブリッジに有って、オペレータにそれを告げた。

「艦前方、青龍号近辺で戦いを継続中のようにです！」

「そうか。手詰まりだな。いや、アシュマ君達がいてくれたからこそ、ここまで追い詰める事が出来たのかも知れん」

アルステインは呟くように言った。

「いや、諦めるのは、まだ早い！」

「魔導砲用意！ オペレーター魔導砲発射の旨、射軸上に居る青龍号に伝達。なお青龍号上で戦っているアシュマ諸氏にも直接伝達。」

注意を促せ！ 尚、魔導砲発射トリガーは私が取る。艦体左右に開け！ カウントダウン始め！」

ゴクン！

と、いう鈍い音と共にハーティアー三世号の艦体が開いた。

そして巨大な砲が現れた。

魔導砲だ。

「敵艦！ 魔導砲反応です！」

オロ艦隊旗艦ンディオのオペレーターが告げる。

「魔導砲だと!？」

「はい！」

「ブリッジ、切り離し！ 高速飛行モードへ移せ！ 急げよ！」

「は、はい！」

アシユマは今、尚も、じりじりとウフェイトウへ間合いを詰めていた。

最早、ここまで来たら、恐怖は無い。

それとは対照的なのが、ウフェイトウだ。

彼は恐怖に駆られ、今にも逃げ出しそうだった。

しかしそれは許されない。

彼のマスケットとしてのプライドが、それを許さなかったのである。

その時ンディオのブリッジが切り離された。

「！」

一瞬我を疑う光景だった。

ンディオのブリッジが切り離されたと言うことは自分達が見放されたと言うことと同義ではないか。

アシユマ達にも、アルスティーンから魔導砲発射の報が入る。

傾く青龍号。

魔導砲の発射線軸から、離れようと言うのだ。
「者供、退くぞ！ このままではマスターに見放される」
マスクド達は皆、動揺を隠せないで居る。
が、仕方が無い。
時が時、場合が場合。
時間がなかった。
これによってウフェイトウのプライドは保たれた。
仕方が無いのだ。
そう、仕方無いのだ。

マスクド達が青龍号から去る。
青龍号は射線軸から離れる。
同時に魔導砲が発射された。
響く轟音。

粉碎される艦艇。
その中には旗艦、ンデイオも含まれていた。
主の居ない。
兎にも角にも旗艦がいなくなった事で艦隊は大混乱になった。
そこへアルステインの名で降伏勧告が伝えられる。
降伏するか、それともしないか。
もし降伏勧告を吞まねばアシユマ・アトーが君達を攻撃するだろ
うと。

逃げ帰るも良しとした。
これには、参謀達等から異論も出た。
逃がすとは、一体どうということかと。
答えるには、制限時間を設けた。
一時間だ。

オ口連合艦隊は答える間も無く一斉に逃げ始めた。
オ口艦隊は凡そ五百の艦艇、五万の魔導機兵を失っていた。

クーロン共和国はオロの占領期間が、僅か一日と言ったこともあり、短い期間であったため、すぐさま元の政治体制を取り戻した。

早速、クーロンは敵の次の来襲に備えて軍備を増強し始めた。

オロは政権基盤を強くするどころか、却って各地で抗議デモやテロ、はたまた小規模な反乱が起こり、政治的求心力の弱さ、脆さを露呈してしまった。

第七節 オロとバヴェルとアルステーンと

オロは敗北をした。

これを機に世界中の不满が爆発した。

オロは世界各国で起こりつつある、反オロ運動に対して、怒りと武力で以って、これを鎮圧するつもりでいた。

しかし、今まで力で押さえつけられていた各国が、揃い合わせたように一斉にオロ・エバス国に対して反旗を翻した。

今のままでは、オロは孤立し圧倒されてしまう。

「おのれ、虫けら共が！」

オロは怒り心頭だった。

折角手に入れた世界のはずだった。

それが、今や、オロの王国を包囲して、押し潰そうとしている。

国の外だけでは無い。

国の中でも、大規模な抗議デモや、抗議行動が日々勢いを増している。

オロは決心した。

バヴェルを起動するのだ。

反攻する者供には、力で押し付ける。

それが、オロの流儀だった。

そして、バヴェルが、その手段だった。

バヴェルの起動には、前回バヴェルを起動したときの、データを流用した。

これに関して、ナナル・エコリコは反対しなかった。

むしろ遅すぎると、思ったくらいだった。

始めからバヴェルを使って、現生人類を滅ぼせば良かったのだ。

「ここで勝たねば、『携拳』のリストから外れますよ？」

七賢人はオロの政務室でこう言った。

その言がオロの気に障った。

「お前らが居ると、世界が益々醜くなるばかりだ」
オロは小銃の銃口を、七賢人全員に向けた。
「え、永遠の命は、欲しくはないのか？」
「我々の今の技術で、そんな事は十分可能だ」
「き、貴様、我々を、裏切るつもりか！！」
「裏切るも何も、仲間になった覚えは無い。これ以上の話し合いは、無意味だ。さらばだ、七賢人の諸君」

「お呼びでしょうか？ マイマスター。」
ウフェイトウが、オロの政務室に呼び出された。
血の匂いがする。

何か有ったのだろうか？
「うむ。バヴェルを起動するにあたり、邪魔な者がいる。そいつらの始末を頼む」

「……アシユマ・アトーですな？」

「そうだ。貴様らが何度も苦渋を飲まされ続けたアシユマだ。これで最後だ。次は無いぞ？」

「はい。分かっております。背水の陣で当たります」

「最初からそうしてくれれば良いものを」

「申し訳ありません」

「分かったなら行け」

バヴェルの建造現場の最上階。

神人が、バヴェルのコアに制御装置として組み込まれるのを、ナル・エコリコは見ていた。

七賢人が殺された事実も、知らされないままに。

後ろから、オロがやって来た。

気配を殺して。

驚くナナル。

「な、何でしょう？ 後ろから急に？ 驚きますわ」

「今日までよく、余に仕えてくれた」

「え？」

「が、今日からナナル。君は自由だ」

「な、何を言ってる……？」

オロは剣を取り出してナナルの鳩尾みそおちから心臓目掛けて突き刺した。

「うぐっ！ ……な、何故？」

「新しい世界を作るのは七賢人ではない。余、オロ・エバスだ。さらばだ」

「ぐっ！ かはっ！」

オロは止めとばかりに、剣に力を込めた。

ナナルはその場で、崩れ落ちた。

オロは、バヴェルに乗り込む。

「バヴェル起動！」

バヴェル復活の報は、すぐさまアルステインの耳にも、届く事になる。

「なに？ バヴェルが……？」

「はい。急ぎ報告せよと、お爺様じいが」

報告しているのはキララ・ムラサキである。

ここは、アルステインの政務室。

アルステインの他にアシユマ等がいた。

「うむ。よく知らせてくれた。ゆっくり休んで戻るが良い」

「いえ、休んでいる暇ありません。直ぐにでも戻ります。では」

「まるで嵐だな。ところでどう思う？ アシユマ君」

「どちらにしても、放って置くわけには行かない」

「幸い、各国がオロに対して反旗を翻しています。その戦力を結集して当たれば勝てるんじゃないかと思っています」

「魔導砲の集中攻撃じゃな？」

ルー・ウィロンが言う。

「ええ。その方法もあるでしょう。細かい戦術は任せます。私は各国の首脳に働きかけて、戦力を結集します」

アルステイーンは決意を述べた。

アルステイーンは各国に戦力の結集を呼びかけた。
が、結集どころか、各国は手前勝手に攻撃すると言つ事が露呈された。

アルステイーンは与えられた時間が短い中、必死に各国に訴えかけた。

だが駄目だった。

皆、自分の国のことしか頭になく、聞く耳を持たなかった。

各国の戦力を結集しなければ勝てないのに。

アルステイーンはバヴェルに勝つ別の方法を模索した。

「それは、コアを潰す事だな」

アシユマがそう言った。

「コアですか」

アルステイーンが返す。

「まあ、そこまでに至るまで苦労するがな。念導境界面。ビーム砲。プラズマ放電。鉄ミミズ。そして、『漆黒の門、裁きの扉』。どれも強力だ。特に念導境界面とビーム砲は鬼虎の念導境界面でも防ぎきれるかどうか微妙な所だ」

「そうですか」

「だが……」

「だが？」

「俺が、無念無想の境地に至れば鬼虎の力も無限になる。そうすれば活路も見出されるかも知れん」

「そうですか」

アルステイーンは少し喜色を示した。

彼らは昼日中、正々堂々と、正面からやって来た。

正門の警備を退け、堂々と通り抜けていく。

正門広場で足を止めた。

衛兵が攻めても、軽くあしらわれるだけだった。

「アシュマ！ 最後の決戦だ！ 出て来い！」

彼らの一人がそう言った。

そう、彼らはマスクド、エルファの騎士団だった。

そしてそう言ったのは団長のウフェイトウだった。

政務室の窓からそれを見ていたアシュマは、

「行つて来る」

と一言残して、部屋を出ようとしていた。

「アシュマさま……」

アーチエルは、何かを言おうとしたが、言葉が出てこなかった。

「ウフェイトウにまで最後の無想の一刀を見せてしまった。奴には

秘奥義は効かないかも知れん」

「アシュマさま……」

「しかし、森羅万象、無想の一刀、正に無想活殺に賭けるしか、最

早、手は無し」

「アシュマさま！」

「大丈夫だ。必ず戻る」

「アシュマさま……どうぞご武運を」

「有り難い。千万の味方を得た気分だ」

そう言つて部屋を出た。

そしてオルバニアンやアルミナ、ガンロク、ジーク、ビッシュと

部屋を出て行こうとした。

アンがガンロクに声を掛ける。

「ガンロクさん死なないで下さい」

「おらは大丈夫だべ。アンさん。心配しねえでける」

「ガンロクさん」

アンがガンロクに抱き付く。

こっちではビッシュユがフィナと話をしていた。

「必ず帰ってきてね。約束よ?」

「ああ、分かっている」

ビッシュユはフィナを抱きしめた。

ジークとミカも話をしている。

「きつとジーク君なら勝つよね? 信じているから、頑張ってね」

と、ミカは言う。

「ああ、勿論」

と、ジークは言った。

そして背中を向けて出て行こうとした。

その背中に縋るように、ミカは抱きついて、言った。

「勝ち負けなんてどうでもいい。絶対無事に帰ってきてね。約束して……」

最後のほうでミカは涙声になっていた。

ジークは振り返り、両肩に手を置き他人には滅多に見せない優しい顔で、

「大丈夫。絶対帰ってくる。お前を一人になんかしない。約束する」

と、言ってミカの涙を指で軽く拭いて、唇に優しくキスをした。

「じゃあ、行って来る」

そうジークは言った。

戦士六人はマスクド達の待つ広場へと向かう。

マスクドの周りには死体が幾体が転がっている。

マスクド達はアシユマ達を認めた。

ウフエイトウが叫ぶ。

「決着をつけに来たぞ!!! アシユマ!!!」

「こちらもそのつもりだ！ ウフエイトウ！！」
アシユマは居合に構えをとった。

ビツシュは刀を正眼に構えていた。

対するナトイゲフルは金剛棒を頭上に回してビツシュの攻撃を待っていた。

ビツシュは何事かをぶつぶつと呟いていた。

「どうした？ 待ってるだけじゃ、勝てないぞ？」

ナトイゲフルが言う。

ビツシュは、あの金剛棒は、ビツシュの刀を破壊するだけでなく、ビツシュの頭蓋をも砕く力を、秘めていると見た。

また、ナトイゲフルも下手に棒を繰り出せば、その隙を突いて棒を両断されると見ていた。

お互い実力が拮抗して動けなかった。

幾度か立会いが行われたが、双方の睨み合いが、この立会いまで、ずっと続いていたのだ。

ビツシュはゆっくりと正眼から下段に構えを変えて行った。

「む？」

ナトイゲフルは疑問に思った。

ビツシュがこの構えをするのが、初めてだったからである。

いつもは、正眼のまま微動だにせず、隙を見せなかったからである。

ナトイゲフルは攻撃を、してみようと思った。

マスクドたちには、後が無い。

自分が動かなければ、事態は動かないのである。

ナトイゲフルは頭上から、ビツシュの顔面目指して、棒を繰り出した。

その直後、ビツシュは首を捻って棒をかわし、ビツシュの下段からの刀は後の先を取って、ナトイゲフルの棒を襲った。

棒は、ビツシユの刀によって、中ごろから切り分けられた。

「！ なんと……！！」

ナトイゲフルは驚いた。

次の瞬間、

「マジックブレイド」

ビツシユはそう呟いた。

刀身は白銀色に輝いて、返す刀でナトイゲフルの頭蓋に吸い込まれて行った。

ナトイゲフルは、頭頂から顎の先まで斬り割られた。

こうあつては、自らを癒す言葉を発する事は叶わない。

ナトイゲフルは絶命した。

ビツシユは力尽きてその場にうずくまった。

が、

「フィナ……勝ったぞ」

と、呟いた。

ジークは何かをぶつぶつと呟いていた。

今、ジークはイラと対峙していた。

「秘剣・裏・閃光一刀・崩し・改……」

ジークはそう呟いた。

「またその構え？ はつきり言って、やりにくいんだけど。それ」

イラはそう言った。

この構えに入ると、イラはついジークの左肩目掛けて突進したくなる衝動に駆られる。

だが、この構えがジークの誘いである事をイラは知っている。

「駄目よ。誘ったつて。いけない子ね」

「じゃあ、これならどうだい？」

ジークは左手を前へ突き出し、こう言った。

「秘剣・裏・閃光一刀・崩し・改・一の太刀」

剣の切っ先は軽く地面に着いた。

「駄目よ。そんなに誘って。お姉さん、つい乗りたくなるじゃない？」

「乗りたければ、乗ってみるのはどうだ？」

「初めて言葉らしい言葉を、話したわね？」

「無駄口は好きじゃない」

「片腕一本じゃその剣は振り切れないわ」

「御託はいい」

「そう。じゃあ行くわよ？」

イラは疾走した。

ジーク目掛けて。

その時ジークの剣が唸り出した。

ジークの右腕一本でその大剣を車に振り出したのだ。

途中、左腕も加わり加速度を増す。

「！」

イラは、自分の判断が、間違ったことに気が付いた。

加速度がついた剣を、かわすことが出来ない事を、一瞬にして悟

ったからだ。

「マジックブレイド！」

ジークはマジックブレイドのトリガーキーを発動した。

「！」

イラは絶望感に襲われた。

ジークの剣は白銀色に輝きイラの盾を割り、イラの腕を引きちぎ

り、イラの首を刎ねた。

「終わりだ」

ジークは言った。

ジークはその場にしゃがみ込んだ。

「以前より出来るようになったんじゃないのか？」

そう言ったのは、ウゴグロフだった。

「さあ、そんなのは分からねえべ」

ガンロクはそう言う。

ガンロクは二刀の大錠。

ウゴグロフはクレイモア。

大剣だ。

二刀の有利を生かしてガンロクは幾つか有効打をウゴグロフに与えていた。

だがウゴグロフに痛手が与えられた気配は一向に無い。

ガンロクは呪文を唱え始めた。

「紛う事なき汝らの

誓いたてたる信条は

天の神に伝わりたもう

悪鬼に対する天罰の

怒りをそこに打ち秘めん

……」

「マジックブレイドか……それを食らうわけにはいかんな」

「食らってもらわねばこっちが困るべ」

「そうかい」

ウゴグロフはクレイモアを拝み打ちに斬って来た。

ガンロクは大錠を交差して打撃を受け止めた。

それほどの打ち込みだ。

「ぐっ……」

力自慢のガンロクが圧されている。

ガンロクはもう一つの切り札を切ってきた。

「我、血の盟約に従い、汝を我の側におかん。

我はそこに汝はここに、

無にして全、全にして無
無限の力、その一端を見せん
我を死の淵から救いたまえ
纏え漆黒の羽根

……」

「ブーストか……それも食らうわけにはいかな」

「もうおそいべ！」

そう言っただんロクはウゴグロフを足蹴にして間合いをはずすと、
「ブースト！」

と、言っただん高速の攻撃に出た。

重い二刀の高速攻撃。

これにはウゴグロフも堪らなかった。

「おのれ！」

ウゴグロフが悪態をついた所で足元を蹴られ、四つんばいになっ
た。

「マジックブレイド！」

このタイミングでダンロクはマジックブレイドを使った。

ダンロクの大鉈はウゴグロフの首の後ろから斬りつけ、そして刎
ねてしまった。

首のなくなつたウゴグロフは血管ちくたから何間も血液が飛び出した。

「ふう、やったべ。アンさん。喜んでくんろ」

ダンロクはその場に倒れこんでしまった。

アルミナとシャケルウが戦っている。

ある意味もう馴染みになっている。

「マスクドと呼ばれるようになってから、ここまでしぶとく生き残
っているのは、お前が始めてだぞ。名は何と言ったかな……あ〜」

「アルミナよ！ アルミナ・ラ・シア！ 覚えて置きなさい……よ

っ！」

アルミナの上段からの斬り付けだ。

「甘いな」

シャケルウはアルミナの右手に避けて大槍を突き入れてきた。

「甘いのはそつちよ！」

アルミナは、ロンリーストライフを横に叩きつけるようにして、シャケルウを打ち据えた。

シャケルウは何間も先に吹き飛ばされた。

そこからのアルミナは容赦がなかった。

アルミナは刃筋を立てて何度も何度もシャケルウを打ち据えた。

反撃の暇も与えぬくらいに。

その間にアルミナは呪文を唱え始める。

「紛う事なき汝らの

誓いたてたる信条は

天の神に伝わりたもう

悪鬼に対する天罰の

怒りをそこに打ち秘めん

マジックブレイド！」

最後の一撃はシャケルウの首筋に決まった。

その後首は刎ねられ、ロンリーストライフは地に突き刺さった。

「やったあ…… やつと決着がついたあ…… もう駄目。動けないい……

……」

レトウは大鎌を持っていた。

この大鎌が厄介だと、オルバニアンは思っていた。

なにせ、普通の受け止め方が出来ないからだ。

鎌の軸の部分で受け止めても、刃の部分が飛び出ている為、こち

らを切り裂くのだ。

故に、相手の間合いから外れて様子を見なければならぬ。

だが、早々時間を掛けてもいらぬ。

大逸鉄を持って来れば良かったとも思った。

その間にもレトウの攻撃は続く。

「どうした？ 全然攻撃してこないじゃないか？」

その間にもオルバニアンは何かをぶつぶつと呟いていた。

途端にレトウの攻撃がぱったりやんだ。

オルバニアンの雰囲気agaraりと変わったからだ。

オルバニアンは切っ先を天を衝くように真上に立てた。

「天刀稲妻斬！」

オルバニアンの必殺技だ。

胸がから空きだった。

隙だらけだ。

だが、これはオルバニアンの誘いなのだ。

それはレトウにも分かる。

分かるがそこを攻めずにはいらぬなかつた。

レトウはから空きのオルバニアンの胸を狙い鎌を繰り出した。

「ブースト！ マジックブレイド！」

オルバニアンは切り札を使ってきた。鎌の間合いの内に入り込み、

上段からの稲妻のような一撃。

レトウは頭の天辺から、心の臓辺りまでを斬り割った。

返り血がオルバニアンを襲う。

即死だった。

「ふう」

オルバニアンはそのままそこに倒れこんだ。

アシュマとウフェイトウの睨み合いが続いていた。

じりじりと時間が流れる。

アシユマはのっけから、秘剣・流星を使っていた。それに対してウフェイトウはどうか？

ウフェイトウが失う物等、何も無かった。

ウフェイトウに、最早恐れる物は、何も無かった。

背水の陣だ。

死など、もう恐れていなかった。

アシユマを倒す事のみ集中した。

死をも恐れぬ立ち振る舞いのウフェイトウを見てアシユマは悟った。

最早、秘剣・流星がウフェイトウに通用しない事を。

その時点でアシユマは無意識に秘奥義・無想活殺を発現させていた。

「そうだ！ その剣だ！ 我をおびえさせたもの！ しかし、その技はもう我には通用せん！」

「そうか。なら試してみるか？」

アシユマは生死の境の境地を越えた。

ウフェイトウも死を恐れない。

剣の腕は両者互角。

後は位が物を言った。

二人は剣を放った。

両者の剣と刀が光芒を放ち交差した。

生死の境は紙一重。

ウフェイトウは腹部をほとんど切り裂かれていた。

だが、癒しの言葉は言えなかった。

言えばその瞬間鬼虎がのど笛を掻っ斬ったであろうから。

「何故だ？ この差は何だ？ 今一步のところでお前に勝てぬ。その差は何だ？」

「あえて言うならば、お前は死しか見ていなかった。おれは死中に活を見た。たったそれだけの事よ。正に紙一重だったな」

「しかし、天は、お前を選んだ！ 紙一重などとは言うが、手の届

かめ境地に、ぐほっ！ さあ、止めを刺せ！ アシユマ・アトーよ
ウフェイトウがどつかと腰を落す。

アシユマはウフェイトウの後ろへ回る。
刀を高く上げた。

「アシユマよ！ マイマスター……オロ・エバスを止めてくれ！」
「？」

「オロは己の私利私欲の為に、バヴェルを動かそうとしている！
それを止められるのはもうアシユマ、お前しかおらん！」
「何故俺なんだ？」

「お前にしか……ぐほっ！ ……出来ん事だからだ。頼む」

「俺がお前を生かす。お前が止める。それでは駄目なのか？」

「そんな生き恥を晒してまで、止めようとは思わん！」

「マスケドよう」

「そうだ。マスケドだ」

「相分かった。後のことは心配するな。きつちりカタをつけてやる
！ 心安らかにあれ、ウフェイトウよ……！」

「忝い……！」

ウフェイトウは首を切り下ろされた。

それは全く見事な斬り口だった。

「そうですか。エルファの騎士団も壊滅しましたか」

アルステインが感慨深げにそう言う。

「決着を付けてくれと言っていたが……」

「ああ。余程オロに、我慢ならぬモノがあったのだろう。悔しそう
だった……」

「そうですか。今度は僕も出陣しようかと、思っているんですよ
と、アルステインが言った。

「それは、エファールが許すまい？」

「しかし、あのオロが、バヴェルに乗っているのです。だれが止め

「得る事が出来ましようや？」

「それこそアンタを止めるのは至難の業だわよ！」

「げ！ エファさん！」

「『げ！』じゃないわよ、『げ！』じゃ！」

「こ、今度ばかりは、幾らエファさんの頼みでも、聞きませんからね！」

「分かっているわよ！ 今度は私も出るわ！」

「エ、エ、エ、エファールさん！」

「駄目よ。行くわ。ワタシ」

「エファさん、いけません！」

「どう？ いつも引き止める側の、気持ちが分かった？」

「そんな気持ち分かったって、エファさんを引き止められなきゃ、どうしようも無いじゃないですか！」

「『分かったって』って何よ？ 大事な所じゃない！ 私の気持ちも少しは汲んでよ！」

「……す、すいません」

「で、行くわよ！ 良いわね？」

「……はい」

「エファールさんが行くなら、私も行きます」

アーチエルだった。

「アーチエル様、いつの間に？」

アルステインが辛うじて言う。

「さつきから居たよな？ アーチエル」

「ええ」

（いつから居たのよ）

そう思うエファールとアルステインだった。

「だが、駄目だよ、アーチエル。付いて来ちゃ」

アシユマが優しく言う。

「何故で御座いますの？」

アーチエルが聞き返す。

「何故つて……危ないからだよ。駄目だよ。アーチエル」

「足手まといなのは分かっています。でも……でも、お願いします！ 連れて行ってください！！」

「駄目だ！」

「行きます！」

「……………」

アシユマはいつに無いアーチエルの気迫に気圧された。

「分かった。その代わり、俺の傍から離れない事。いいね？」

「はい！」

アーチエルは満面の笑みでそう答えた。

バヴェル突入に関しては青龍号単独での突入で、という事になった。

大艦隊で行っても被害が増すばかり、と考えたからである。

オロ国軍は、テロリスト掃討と称して、反オロ派の思想家や、政治家等を、手前の軍を以ってして、粛清し始めた。

オロは後悔した。

初めに、これをやっておけば、よかったのだと。

自分が殺したいくらいだ。

下では、ちまちまと、殺し合いをやっている。

苛苛としてきた。

何をやっているのかと？

バヴェルの望遠レンズは実によく辺りの風景を映し出してくれた。

オロはもう我慢できなかった。

そのテロリスト（と、呼ばれる一家）は、オロから何としても逃げ出そうとした。

が、オロはちよつと、バヴェルを動かしてみた。

そのちよつとが大事だった。

風をまき、木をなぎ倒し、建物を巻き上げ、人を飲み込んで行く。

これを街中で、やられたのだから、堪らない。

これはバヴェルの外周であるにも拘らず、ちよつとしたハリケーン災害のような物になってしまった。

オロは後悔した。

この惨状にはない。

これでは、狙いの一家の生死が、分からぬでは無いか。

これでは意味が無い。

なので、オロは街ごと『漆黒の門、裁きの扉』を使用する事にした。

街ごと葬りさえすれば、後腐れも無く、さっぱりする。

オロはそう考えた。

オロは『漆黒の門、裁きの扉』を使用した。

それもごく初期段階のグレードでだ。

それでも街は跡形も無く吸い取られ、地球上から消え去った。

凄まじい威力である。

これを大都会でやったらどうなのか？

想像すると身震えがおきた。

歓喜の震えだ。

だが、これではいかにも大味だ。

もっと細かい物は無いか？

オロは閃いた。

オロのアバターを作成すればいいのである。

簡単だ。

バヴェルのケーブル群で作ればいいのである。

オロとはイメージスキャナで繋がっている。

思いのままだ。

次の街に行く。

反オロ勢力が潜伏しているとの情報を得て、オロのアバター様、

御自らご出陣。

一体ではない。

十体も二十体も出陣している。

街の、出口に向く。

バヴェルが当然近くに来ているので、皆逃げる。車で逃げるもの。

バイクで逃げるもの。

自転車で、電車で、徒歩で逃げるもの。

逃げるものに対してオロは一斉に発砲した。

指の先からプラズマの塊が飛び出るのだ。

それを絶え間なく打ち続ける。

飛び散る肉片。

まき散る骨片。

快感だった。

自らの眼の前で、人間がミンチになっていく。

その後、逃げるものは居なくなる。

全滅したわけではない。

市民自ら、反オロ勢力の者を差し出したのである。

オロはその者を、躊躇なくミンチにした。

オロは笑った。

オロの敵を差し出した者も、引きつった笑いをしていた。

中にはその光景を見て戻す者、失禁する者、気を失うものそのよ
うな者も多数居た。

そんな光景をオロ（のアバター）は一通り見回すと、

「にっ」

と、笑って飛び去ってしまった。

「もう二度と来んな！ バカヤロウ！」

そういった若者がいた。

その若者は、超長距離射撃で額を打ち抜かれて、絶命してしまっ
た。

「オロは殺戮を楽しむ男になってしまった」

アルステイーンは嘆くように言った。

「あれに乗れば誰でもそうなる」

アシユマがそう言う。

「早く彼を止めねば……」

アルステイーンの真意が何処にあるか誰も知らない。

友にこれ以上罪を被せたくないのか、罪も無い人がこれ以上死んでいくのを見ていられないのか、それはアルステイーンにも判然としない所だった。

ただ、一致していたのは、オロの凶行をこれ以上、許してはいけない、と言うことだった。

「なんだって！？ 行くのはアシユマとアーチェルの姫さんとアルステイーンとエフアールだけか！？」

オルバニアンが驚いて言う。

「ああ」

アシユマが返す。

「『ああ』じゃねーよ『ああ』じゃよう！……」

「もう決めたことです」

アルステイーンが割って入った。

「水臭え事言ってるじゃねえよ！ 何の為の仲間なんだよう！」

「だからこそ言っているんです」

「俺達や、足手纏いつてか！？」

「そうは言っていないません」

「同じだろう！？」

「違います」

「同じだろう！？」

「あー、もう水掛け論は止めましょう。確かにこれは私のわがままです。でも私のわがままの為に、大勢の人間を巻き込むわけには、行かないんです！」

「それが水臭いって言うてるんだよ！」

「……駄目です！」

「アルステインー!!」

「大人しく待っていないさい! 衛兵!」

「はっ!」

「この者達を、余が帰るまでここに止め置きなさい」

「はっ!」

「俺たちや軟禁かよ!?!」

「そう言うことです」

「あの武器は取り上げなくて……」

衛兵が訊く。

「それは構いません」

アルステインが答える。

「では、言ってまいります」

青龍号のコクピットに乗るアルステイン。

なにやら感慨深いモノがある。

「久しぶりのコクピットはどお?」

エファールがからかって言う。

「えもいわれぬモノがあります」

「そう」

アーチエルは既に半球板の前だ。

アシユマは三基の魔導石の真ん中に座って念を送っている。

「では皆さん発進しますよ?」

アルステインが号令をかける

「いいわよ」

「はい」

「分かった」

三者三様の反応を見せて、青龍号が発進する。

オロはその日の気分で、街を消したり、銃撃戦を楽しんだり、やりたい放題、し放題だった。

オロはまだアヘイビア大陸から出ていない。できれば洋上で叩きたかった。

が、このまま放置すれば、人的被害が増すはかりである。

幸いにも広大な砂漠地帯にバヴェルが出た。

それいまだ。

と、言うことで、青龍号はオロのコックピットを目指し突っ込む。

ステルス仕様だ。近くに来るまで気付かれて、いないはずだ。

だがバヴェルはビーム砲群で攻撃してきた。

万事休す！

ゴンドラ上にはアシユマが居る。

アシユマはバヴェルのビーム砲群の攻撃を受け切れるのか。

これは剣の境地と一緒だった。

一剣が万剣となり万剣が一剣へと帰る。

無限の境地。

無為無想。

無想剣。

その時にこそ、全てのものと一体になる。

幾多の強敵との戦いが、アシユマをその境地へと導いた。

最早、バヴェルのビーム群等怖れるに足らず。

アシユマはバヴェルのビーム群を全て呑み込んだ。

アルステインの操縦する青龍号はオロが乗るコックピット前に悠々と着陸をした。

そのぐらいの広さがあるのだ。

四人は青龍号から降りてコックピットを見上げた。

アルステインは棒ではなく魔導石製の長槍を携えていた。

アシユマが見ると下のコックピットには神人が格納されていた。

「かみびと神人！ まだ居たとは！！」

アシユマが叫ぶ

「よく来たな。アルステイン」

オロが言った。

「友として、お前を止めに来た」

「笑止！ 世界の王たる余には、友など要らぬ！ ただ、下僕が付き従うのみ」

するとオロのアバターが、多数現れた。

「悪ふざけは止める！ オロ！」

アルステインは一喝した。

すると、アバターは消えてしまった。

「その有様を止めに来た。もはや、法廷に出ても極刑は免れんだろう。せめてもの手向けに『俺』が、お前に引導を渡してやろう」

「出来るのかな？ 脆弱な人間であるお前に」

「まるで、神が如き言い様だな」

「そう、その通り。余がこの世に舞い降りた神である。それが証拠に……」

「集え彼の地に刻印求め

探せ、天の眼この世の秘法

聞け、七つのラツパを吹き鳴らし

血の色、臙脂に緋のマント

馬は蒼ざめ死を司り

淫婦にその身を堕されて

鬼神、悪神、加護を受け

血の刻印の契約によりて今、

汝の約束いざ果たさん。

出でよ冥界！

アポカリプス！！」

なんと、オロまでが、究極の召喚呪文、アポカリプスを唱えた。

すると、地の底から湧き出すように、世界の色が血に染まったように赤くなり、地上と言わず空と言わず水中と言わず悪鬼・ドラゴン・魔獣の類の大群が押し寄せた。それも、全世界規模で。

オロはその膨大な念の増幅器に、バヴェルを使った。

「アポカリプスだと！ オロ！」

アシユマが叫んだ。

「わははははは！」

「オロを倒すしかないのか……」

アルステインが呟く。

アルステインがオロに近づく。

その時一匹の竜がアルステインを食らおうとした。

「！！！」

驚くアルステイン。

そこに巨大な三日月型の飛来物。

アシユマの鬼虎・秘剣・三日月だ。

竜は頭を割られ絶命した。

アルステインはオロを、アシユマは神人を目指した。

神人はバヴェルと完全に一体化して動けなかった。

その代わり、バヴェルが強力な念の増幅装置として働いて、神人の念導境界面たるや、それはもう凄まじい物があった。

マスケドなどは、可愛い物で、鬼虎で斬り付けても、傷一つ付かない。

オロの方はというと、やはりバヴェルの強力な念導境界面で守られていて、傷一つ付かない。

「オロ！ 何故こんな事をする！？ 何の為にこんな事をする！？」

アルステインが叫び声を上げる！！

「何故？ 何の為に？ 痴れた事。わが王国を作るためよ！」

「オロ！ こんな野獣と悪鬼に埋もれた世界が、お前の望みなのか？」

「余の……余の望み……」

「そうだ！ 望みだ！ お前はこの殺戮に埋もれた世界が望みなのか！？ これこそ正に地獄ではないか！」

「……」

「オロよ！ これがお前の世界なのか！？」

「違う！」

「何が違う！？ このような殺戮の世界を築き上げ、何が違う！？」

「私は美しい世界を作りたいだけなのだ。美しい自然、美しい生き物、美しい草花……そして美しい人間。美しく調和の取れた世界。

しかし、今のこの世はどうだ。混乱を極めているではないか。人間は地球を食い物にし、自然を破壊しつくしている。だから私は立った。後世の歴史家になんと言われてもよい。今は膿だしの時期なのだ。この世から美しくないものを一掃する。それが私の使命なのだ！」

「下を見る！ 足元を見る！ そして聞け！ 地上の人々の阿鼻叫喚の声を！ ようく聞け！！」

「……」

「これでも清浄な世なのか？ オロよ……」

「余は……余は……余はあーっ！っ！！」

『オロよ、そなたは神なのだ。何を躊躇している』

その時神人口を挟む。

「余計な時に余計な事を！」

アシユマが言う。

「そうだ！ 余は神だ！！ 神なのだ！！ はあっはっはっは！！」

「オロよ！ お前はそれでいいのか？ 愛する物も無く、愛される訳でもなく、一人孤独で」

「それが世界の覇者たる者よ！！」

「愛あればこそその、清らかな世界ではないのか？」

「愛あればこそ……」

「そうだ！ オロ！」

そこで神人がまた呟こうとする。

『神なればこそ……』

「お前は黙れ!!!」

アシユマは一喝した。

すると、オロの念導境界面や、神人の念導境界面までも弱くなつてしまった。

どうやら、オロの精神状態に強く反応するらしい。

「さあ、殺れよ。アルステイン。そのつもりだったんだろ？」

「……………」

「その代わりに約束してくれ。この世を、この世界を美しく清らかに……………」

「分かった。出来る限りのことはしてみよう」

「お前らしい答え方だ。さあ、殺ってくれ」

「オロ……我が友よ……………」

「お前はまだ俺のことを友と……………」

「当たり前だ。友以外の何者だ？ 俺は」

「ふふふ。昔はよくお前にこうして叱られたモノよ。さあ、時間だ。

もうこれ以上神人を押さえつけていられない」

「オロ……………」

「さあ、殺れ！ 心臓目掛けて！ さあ!!!」

オロはカプセルの中で両手を広げた。

「オロ……………」

アルステインは躊躇する。

「さあ、アルステイン！ 時間が無いんだ！」

「オロ!!!」

アルステインは目を瞑りながら、オロの心臓目掛けて槍をついた。

鈍い感触が手に伝わる。

「流石だ…………寸分の狂いも無い」

オロが言う。

「オロ……」

同時に念導境界面がオロに同調して弱まっている神人に、アシュマは斬りかかった。

『ピギヤツ!!』

奇妙な叫び声(?)をあげて両断されてしまった。

アポカリプスはいつの間にか掻き消えていた。

「これで終わったんですね?」

アルステインが言う。

「いや、両断面が綺麗過ぎる。直ぐに復活するぞ」

「そうなの?」

いつの間にかエファールが来ていた。

「ああ、そうだ。邪魔だからどいている。復活前にケリをつけてやる!」

「さあ、エファール様、少し下がりましょう?」

アーチエルが言う。

「鬼虎よ。無限の力を我が前に示せ!!」

アシュマは凡そ半径三メートル、直径六メートルの黒色の塊を作る。

そしてそれが消えた時にはぽっかりと空洞が出来て跡形も無くなっていた。

「これでお仕舞い?」

エファールが訊く。

「いや、後は本体の処理が残っている」

アシュマが言う。

「本体の処理?」

「そうだ」

アシュマは三人を青龍号へ返し、安全な所まで退かせると、例の眩い光を起こした。

その眩い光は暗転し巨大な黒い球形になったかと思うと、急速に収縮した。

終節

今年からスコラでは、星誕祭と言う催しが開かれる事になった。これはアシユマ達が、この星を護ったことに対して行われる、感謝の催しだった。

スコラの校庭でもあり、王宮公園の一角であるその広場に、皆めいめいに夜空の星を楽しんだ。

オロ・エバス国（社）は解体。

国名はアヘイビア共和国連邦に戻ることに。

オロ・エバス国の重職に就いている者達は、皆、悉く捕らえられた。

世界は今はまだ、混沌の中だ。

ノリトレアは王国を解体し、共和国に移行した。

アルステイン国王は国の象徴として、政治の第一線から退いた。憲法も改正された。

今も、アルステインは、エファールと共に星を見ている。

オルバニアンと、アルミナは星誕祭を待たずに旅立った。

また、フリーのバウンティーハンターとしての途に就いた。

イーハンは王、シユンマ・イーハニアを迎えるに先立って、筆頭家老オムロ・セタが政権を維持する事が決まった。

シユンマがまだ、スコラで学んでいる為だ。

今では、キユポアと仲良く授業に出ている。
そして今も二人は手を繋いで星を見ている。

レンヌはリイナと手を繋いで星を見ていた。

レンヌの兄であるディーヌ王子とアルルマ・サンファは故郷であるアールヌーに帰って行った。

まだまだ混迷を深める地帯であり時期である。

が、レンヌには色々と学んでもらいたいとのディーヌの願いであった。

そして、こうしてレンヌはリイナと星を見ていた。

ガンロクとアンは明日帰るそうだ。

レキシタニアのあの谷に。

その前に星誕祭を二人で楽しんだ。

二人はレキシタニアに帰ったら結婚をするそうだ。

ビッシュ・ノマンとフィナは子供が生まれるのを待ちわびる日々を送っている。

そんな事も話題に上りながら、アシユマとアーチェルは、肩を抱き合い、夜空を見ていた。

大都会なので、決して星を見るのに適した環境ではないが……。
それでも二人は会話を楽しんでいた。

「矢張りオ口様は、美しい世界を、望んでいたのでしょうか？」
アーチェルが訊く。

「今となっては分からない。オ口だけが知っているだろうさ」

「そうですね」

「果たしてそれは、人の領分だったのだろうか？」

「え？」

「いや、何でもない」

「アシユマさま」

「アーチエル……」

二人は口付けをする。

優しいキスを。

いつまでも、いつまでも。

第十三話 了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4548k/>

デュエリスト アシュマ 第十三話 美しき世界

2010年10月8日14時42分発行